

目撃者

長野正毅

あと少し整理して説明したい気持ちがあっても、関係者があらかた鬼籍に入ってしまったいまとなっては、もう手遅れだ。こうして先が見える年齢になり、あらためてあれはなんだったのだろうという特定の思い出が、ひっかかってくるようになった。何十年も昔のごく小さいな出来事が、じつは人生において決定的な意味を持っていたのだと解釈できる余裕を持てたのは、それなりに幸せなのかもしれない。

母子家庭で育った私に、母は期待をかけていた。私は自分の意志とは関係なく、私立の新しい中学校に入れられた。高校部まで併設された男子だけの進学校で、東京の山の手にあり、上流階級の子どもが多かった。学費は、祖父

た。私はつねに一人だけ余った。

その転校生は、中学一年の微妙な時期に他県の公立中学校から転校してきた。裏口入学ではないかという噂があった。不思議な転校生が突然他クラスに来たということ、遠くから見るとかぎりにおいて、その転校生は長身長髪の美男子であるということだけは、私も認識していた。

私が彼と実際に接点を持ったのは、高校二年生になった直後だった。毎年クラス替えがあり、その年に転校生と私ははじめて同じクラスに編入された。私たちは偶然最後尾で隣同士になった。教室は四階にある。毎日毎日外をながめて退屈な授業をやりすこしている。遠くに高速道路が見える。

英語の授業中だった。歳はいくつぐらいなのだろう。はでな化粧の、小柄な女性教師がきんきん声をはりあげている。星というその教師は、子リスのような愛くるしい容姿で人気があった。胸が大きく、性的な感じを与えるところもよかった。

突然転校生が「あの高速道路」と声をかけてきたので、私は面食らった。

「あそこを走って東京に来たときのことをよく覚えてるよ」

それが私たちのはじめでの会話だった。

「車を走らせていたママが、左手に見えるのが新しく通う

から相当援助を受けていたのではないかという気がする。男子校というのは、自分にとって苦痛の種以外のなにものでもなかった。そもそも小学生のときは、私にはむしろ異性の友人のほうが多かった。それはいくらか特殊な性向ではあっただろう。

クラスの連中は、放課後部活動に励んでいた。スポーツを好むやつもいれば、英会話に夢中になっているやつもいる。私は授業が終わると、いつでも一日散に帰宅した。偶然だれかと一緒に帰る機会があったが、親しい友人だと意識することはなかった。彼らはあくまでも知人でしかない。それだけに教師が授業中、いまから親しいもの同士で班を組めなどと変なことを言いだすと、私は本当に困惑し

中学よと言ったんだ」

私は彼がそんな事実を、よく知りもしない自分に告白してくれたことに、ちょっとした感動を覚えた。親しくなりたがっていることが本能的に伝わってきたからだ。

一直線にというわけではなかったが、それから私たちは徐々に親しくなった。大きな駅まで私鉄でふた駅しばしば一緒に帰り、雑踏をうろつくことも多かった。私も彼も流行の洋楽に興味を持っていて、大手のレコード店に頻繁に足をはこんだ。

彼は平然と「このアルバムを試聴してください」と店員に声をかける。大人とのやりとりに気遅れしたところがないのは彼の特徴だった。出だしの部分だけを聴き、軽くうなずくと彼は当然のように、

「じゃあ、このLPをください」と言った。

どうやらとてつもなく金持ちらしい。きみのお父さんはなにをやっているのと質問すると彼は「どっちの父親？」と答えた。

「いまの父親は医者だよ。本当のパパは病死したんだ」

私たちは学校からターミナル駅まで歩くようになった。脇道から突然線路際に出る。母校の生徒を大量に乗せた電車が、目のまえを通りすぎていく。黒い学生服の集団なので、車輛のなかは真っ暗に見える。

「やあ！」転校生は声をはりあげた。「家畜が搬送されて

いくぜ！」

私は声をたてて笑った。

「本当に、飼いならされた家畜みたいなものばかりだからな！ 友だちはきみだけだよ」

直截な表現に、思わず顔を赤くする。

「死んだパパのことだって、きみ以外だれ一人として話しちゃいない」

「どうやら生まれてはじめて「親友」というもののできたらしいというしみじみした喜びはあった。彼だけは信頼しても大丈夫だという自信は、自分の生き方にある種の安定感を与えた。

あるとき、いつものように下校する途中で彼が「きみのガールフレンドはどんなタイプなんだい？」と尋ねてきたことがある。汗ばむような日だったが、私たちは制服の上を着ていた。六月に入ったらワイシャツ姿で登校してもいいことになっている。転校生が上着姿なので、私も真似していた。

異性の話題はそれまでもときどき出ることがあった。彼が複数の女友だちの話をするので、私は自分にもそうした友だちがいるとうそをついていた。見栄というより、彼との関係に上手なバランスを保ちたかったのだ。

私は得意になって、

「英語の星先生を高校生にもどしたような感じ」と胸を

張った。

過去も級友にそう告げると、例外なくだれもがうらやましそうな顔をした。だが、驚いたことに彼は真逆の反応を見せた。

「星だって？」かん高い声を出す。「サイアクじゃないか。あんな尻軽女」

私は慌てた。しどろもどろになって、

「星……っていうか、あんな感じに小柄で、でもお化粧もなにもしていないから、そっくりというわけじゃないんだ」と弁解した。

「クラスの連中はばかだから仕方ないけど、きみは知的だから深みのある女の方が好きなんだと思ってたよ」

転校生がここまで星を悪く思っているとはまったく予想外だった。ただ私はこの男のわからなさをこの件だけではなく、ときどき感じるがあった。

うちに来ないかと誘われて、転校生の自宅にはじめて遊びに行ったのは、言葉を交わすようになってふた月ぐらいたってからだ。私の家から彼の自宅までは、バスや電車で乗って一時間以上かかった。待ち合わせの改札口で、制服姿ではない彼をはじめて見た。白いしゃれたジャケットはおっている。Tシャツにジーンズ姿の私は、もうちょっとましな格好をしてくるのだったと後悔した。

活気ある商店街の裏道に入ると、彼は上着の内ポケットから、銀色に光るシガレットケースを取り出した。表面に繊細な飾り模様が施されている。慣れた手つきでタバコをつまむと、私にも一本よこす。高いんだ、これ。シガレットケースを私に持たせる。ずしりと重い。

ひととき大きな軍艦みたいな建物が見えてきたと思ったら、そこが彼の自宅だった。クリニックが併設されている。

重量感のある木製の玄関扉を転校生が押し開けると、奥からけたたましい女の人の声が聞こえてきた。

「いらっしやーい！」

小走りに走り出てきた女の人を見て、私は息が止まるぐらい驚いた。星！ 星先生にそっくりな女の人が目のまえに立っている。南国の花のようなその人が、転校生の母親なのだと理解するまでには、それなりの時間が必要だった。

がっしりした階段を三階までのぼっていくと、そこが転校生の部屋だった。ちよつと複雑な構造の建物で、部屋そのものは十二畳ぐらいあった。大きな窓からは東京タワーが見える。それまで私が訪問したどの家庭より裕福なことだけは間違いない。レコードを聴いていると突然ドアがノックされ、母親が華やかな蝶のように飛びこんできた。

「ジャーニー！」

お盆のうえにコップに入った飲み物とチョコレート・ケーキの皿が二つ乗っている。彼女はいったん中央の大き

なテーブルにお盆を置くと、ためらうことなく私のすぐ目のまえの絨毯に腰をおろした。オシャレな花柄のブラウスの胸が鋭角的に張っている。

真崎くん、と彼女は私を呼んだ。「まえからお話したいと思ってたの。コウちゃんをはじめて親友と呼んだお友だちなんだから。真崎くんも医学部志望？」

私は当惑しながら「いや、文系に進むと思います」と答えた。

「あら」彼女は大げさに上体を引いた。

「じゃあ来年はコウちゃんとべつべつのクラスになっちゃうじゃない」

転校生はうんざりしたように、

「いいから下に行つててくれないかな」と言った。

「はいはい」

両手を軽くついて立ち上がる瞬間、ちらりと胸もとが広がり、色のついた下着の一部がはつきり見えた。母親が出ていってしまったあとで、転校生は長いこと沈黙していた。私も意識的に黙っていた。

「……軽いといふかなんというか。父親はそういうところを好きになつたんだろうな」

彼はぐるりと部屋の様子を目で示し、

「こんなぜいたくが可能になつたんだから文句もないんだけどさ」と言った。

夕方になると、なんか食おうぜと転校生は立ちあがった。大きな通りを渡ったところにある商業施設内のとんかつ屋ののれんを当然のようにくぐって行く。

飲食店にふらりと入るのは高校生の私にとって、ちょっと緊張する行為でもあった。財布に入っている総額を思い浮かべる。店は休憩あけらしく、客は自分たちだけだ。テーブルに着くなり彼は、

「カツ丼を二つください」とお店の奥さんらしき人に向かって声をかけた。

食べ終わると伝票をとりあげ、あたりまえのようにレジに向かう。このままおごられていいものかという迷いが胸をよぎる。だが、転校生は少し複雑な行動に出た。

「丘のうえの新庄クリニックです」静かに告げる。「つけ」といってください」

手ぬぐいで頭を被ったキツネ目のおかみさんが、これまでしごく当然といった調子でうなずく。私は衝撃を受けた。通りに出るとすぐに「お金を払わなくても大丈夫なのか」と質問した。

「こちらへんではね」

「なにを食べたかなんて証明できないじゃないか。ひよっとすると実際より高く請求してくるかもしれないぜ」

「かもな」再びシガレットケースを取りだすと、私にもすすめてくる。

とロウソクに火をつけてテーブルに置いた。

彼はあつという間にビールを飲み干すと、置いてあった適当なコップにウイスキーを注いだ。私よりはるかに飲み慣れている。タバコに火をつける。臭いがつくので自室では絶対に吸わないと言っていたのだが。

「ママはさ」呂律のまわらない口調で母親のことを話題にする。

「魔性の女ともいうんだろうな。父親はママのためにまへの奥さんを捨てたんだ。大騒ぎだったよ。本当のパパの兄さんなんだから」

私はわけがわからなくなった。

「伯父さん？」

「そっだよ。パパは病気で亡くなったんだ」

コップのウイスキーに無造作にビールを注ぐ。

「パパが死ぬとどんだん話が進んで伯父さんとママの結婚が決定したんだ」

いつものまにか窓のそとは真つ暗になっている。東京タワーのネオンが美しい。美貌の母親を思い浮かべる。なにがということもないのだが、私はシヨックを受けていた。目がまわると言って彼は床のうえに身体を横たえた。レ

コードが終わる。

「……B面にかえてくれないか」

椅子からすべり落ちるようにして床に立つとステレオの

「父親が払うわけだから関係ないさ」

「おれが一人で来て、新庄くんのいところで言って無銭飲食したらどうなる？」

転校生は面倒臭そうに、

「知らないよ。やりたきゃやってみればいいじゃないか」と乱暴に言った。

私が言葉を継がないでいると、彼はちよつと弁解するよ

うに、
「おれにはどうしようもないことばかりだと思わないか？」とつけ加えた。

その後もたて続けに彼の自宅に遊びに行った。夏休みの終わり、こういう出来事があった。その件がきっかけになって、私は訪問を控えるようになったのだ。夕暮れどきまでレコードを聴き、商業施設内の喫茶店でピザトーストを例のごとくつけて食べて部屋にもどつてくると、彼は「今日はちよつと酒でも飲まないか？」と提案してきた。

「大丈夫なの？」

「部屋で飲めばわかりっこないさ。きみは玄関に直行して帰っちまえばいいだけだし」

転校生は一度部屋を出て、どこからか飲みかけのウイスキーのボトルと数本の缶ビールを持ってきた。ビールで乾杯し、レコードの音量をあげる。さらに部屋の灯りを消す

ところまで歩いていく。背後で転校生がつらそうに何度も何度も咳きこんだ。

「大丈夫かい？」

近づいていくと、転校生は首をもたげてわーつと絨毯に液体を吐いた。

びっくりして駆け寄ったが目をつぶったままだ。慌てて何度もおいと声をかける。返事をしない。私は覚悟してドアを開け、声を出しながら駆けおりていった。毛足の長い絨毯に足をとられそうになる。一階までおりるとなにかを察知したように奥から母親が出てきた。

「コウちゃん、なにかやったのね」

いたずらつぽくこちらを見つめる。階段を駆けあがる母親のあとについて私も歩を進める。部屋に入るなり母親はあらあらとあくまでも明るく声を出した。

「コウちゃんコウちゃん」

しゃがみこんで軽く頬をたたくが反応がない。薄暗がりのおかげで戸棚からタオルを取りだし転校生の口もとと絨毯を拭く。二枚目を取りさらに拭く。

「ちよつと待っててね。大丈夫だとは思うけど、パパに診てもらおうから」

母親が出ていったあとで、私は壁際からすぐに転校生のもとに駆け寄り「ねえ、まずいよ、すこくまずいよ」と身体を揺さぶった。転校生の身体はぐにやぐにやして、

大きなゴム袋みたいな感じがした。

突然部屋の電灯がついた。入口に黒い上下の着を着た大男が立っている。しみわたるようなおごそかな低音で、「ロウソクを消しなさい」と言った。

「どら」大きなカバンのなかから注射器を取りだし、どれぐらい飲んだの？ と穏やかな声で質問する。

「ビールと、新庄くんはウイスキーも飲みました」

太い注射器の針が転校生の腕にささる瞬間を私は凝視していた。透明の液体のなかに、もやもやと赤い血が逆流していく。相変わらず反応はなかった。背後に立っている私の心を見すかすように父親は口を開いた。

「この程度の飲酒でどうなるもんじゃない。それよりタバコはやめなさいよ。きみが吸ったんだらう？ 酒はよくてもタバコはだめだ。いいね？」

「はい」

私は直立したまま返事をした。それからひと呼吸置いて「ぼくはそろそろおいとまいたします」と精一杯の敬語を使った。父親は注射器を握ったままちらりと私を見た。

「きみのように酒が強いのはいいことだ。男はなんでも強くなくちやいかん」

深々とお辞儀をして逃げるように部屋を出る。背後から母親が追いかけてくるのがわかったが、そのまま速度をゆるめずに駆けおりのた。靴ひもを結んでいると、

一瞬なんのことかわからずぼかんとする。数学の岸本とこのうのは、見るからにりっぱな地位のある先生だった。

「抱き合う？」

「おれは裏道を歩いてきたんだ。すると路上に岸本の高級外車が止まってるじゃないか。助手席に女が乗ってたんだよ」

彼は抑えきれないという感じでまくしたてた。「車中で岸本とその女が抱き合うようにした。それから女だけが車をおりた。すると星だったんだ！」

「見間違えたんじゃないのか。岸本先生がそんなことするわけじゃないじゃないか」

体育祭のときに、岸本がとびきり美人の奥さんや聡明そうな小学生の女の子を連れて校庭をゆっくり横切っていたシーンを思いだす。

「おれはわざと星を追いついておはようございますと声をかけてみたんだ。回り道したくなかったの、なんてでたらめ言ってたぜ」

私たちは二人の動向をさかんにチェックするようになった。岸本はテニス部の顧問だった。生徒相手にラリーをしているときがある。相当の腕前らしく、誰一人として歯がたたない。ときどきそんなシーンを星が見つめていた。どうしても星と転校生の母親が重なってしまう。さらに美男子の岸本と転校生の父親とが、地位のあるりっぱな男とい

「忘れ物」母親はからになったシガレットケースをさしだしてきた。

「すてきね。高かったでしょう？」確認するようにのぞきこんでくる。

「これにこりないでまた遊びに来てね。いつだってあなただけが頼りなんだから」

外気に触れると、少しだけ気分が楽になった。上品な香水の香りが鼻先に残っている。あの女の人は——とあらためて考える——得体の知れない力を持っている。ただその力は正しく使われていないし、そもそもあの人自身がその力に振り回されている。大男の父親もまた振り回されている。せめて自分だけは振り回されないようにしなければ。

自宅に着いてから私は光沢を放つシガレットケース用心深く引き出しのいちばん奥に隠した。酔いはすっかりさめていた。学校に持つていくわけにはいかなないので、今度彼の家に遊びに行くときに持つていこう。ただしばらくはそんな機会もないような気がした。

夏休みがあけて半月ほどたったある朝、登校してくるなり転校生が私の耳もとに顔を寄せてきた。

「とんでもないものを見たぜ。英語の星と数学の岸本が抱き合ってたんだ」

う意味で重なった。

私は星についてはどうにもなんとなく思わなくなっていた。ただ岸本に対しては少年期特有の過剰な正義感みたいなものが働き、聖人君子のような顔をして裏でこそこそやっているのは許せないという義憤を抱いた。

秋も終わろうという天気の良いある日、岸本の授業中に私は売店で買ってきたツナのサンドイッチをこっそり食べようと考えた。慎重に端をちぎり、頬杖をつきながらもぐもぐ咀嚼する。二口目をはこんだときだった。

「そこ」岸本が突然私を指さした。

「いくらなんでもマナー違反だとは思わないのか？ 隠しているものを出してみる」

のろのろとサンドイッチのかけらを出す。それは無残な形で崩れていた。

「みんな」岸本は静かに言葉を置いた。

「よく見ておけ。こうやって捨ててしまった人間がいる。捨ててしまったのは、じつは数学だけじゃないんだよ」

それからなにこともなかったように授業を再開する。机のうえには食べかけのサンドイッチが乗ったままだった。つい二日まえの席替えて転校生のかわりに隣の席に来た眉のない小男が身体を傾けてきて、

「あいつでも怒るんだな」と囁いた。私は前方に移動してしまつた転校生の背中を見た。予想どおり、彼は一度もこ

ちらを振り返らなかつた。

だが、休み時間に私の席に来るなり転校生は小声で言った。

「浮気野郎きみを侮辱したな。おれは許さないぜ。復讐しよう」

「復讐？」

「明日な。いい考えがあるんだ」

翌日も転校生の様子は変わらなかつた。私たちは横並びになりたかつたので、星の英語の時間だけは眉のない小男に移動してもらつて、転校生が横に座つた。その日の星はなぜかいつも以上に上機嫌だつた。年齢の話が英文に出てくる。きちんと授業を受けていなかったのでよくわからないうが、どういう経緯か星の年齢の話になつた。クラスのだれかが、

「それにしても先生すごく若いですね！ きれいだから二十代に見えますよ」

と言つた。

「でもね」星はいたずらっぽく笑つた。「お洋服脱ぐと、もつともつ若いのよ」

教室中におおーっ！ というどよめきが広がり、拍手がわき起こる。

転校生が私にだけ聞こえる声で、

「ばかな女だな」と言つた。

るだろうよ。岸本はきみがかける。なんといつても侮辱された張本人なんだから」と平然と言つた。

「む、むりだよ」私は動転して答えた。

「なんて言えばいいかわからないし」

「簡単さ。おたくの旦那が星先生と抱き合つてるところを見ましたでいいじゃないか」

「だめだよ」

そんな恐ろしいことができるわけがない。

「なに言つてるんだ。自分のことなのに復讐しないでどうするんだよ」

「復讐なんかしないでいいよ」

転校生はしばらく私の顔を凝視した。それから怒つたやうな口調で、

「びびってるのか？」と言つた。「見そこなつたぜ」

私は電話をかけたくない一心で、

「おれは岸本に復讐したいなんてひと言も言つてないじゃないか」と告げた。

「わかつたよ」転校生は「岸本もおれがやってやる」と強い口調で言つた。

手帳に視線を落としながら躊躇なく番号をプッシュしていく。複数回のコールで硬貨が落ちた。転校生は受話器を持たないほうの手の親指と人差し指でまるを作つて見せた。

「復讐されるとも知らずにばかな女だ」

私は横を見た。「星にもなにかするの？」

「女も一緒に痛めつけてこそ、はじめて岸本への復讐になるんじゃないか」

だが、放課後になると転校生は、じゃあ帰ろうぜとあつさり声をかけてきた。復讐のことなど忘れてしまったみたいだ。それならそれでいい。

「今日は大通りを歩こう」

転校生の提案で、私たちは大きな通りを駅に向かつてまっすぐ歩いた。道路の両側はビルだらけだ。前方に電話ボックスが見える。

「このあたりでいいか」

理解できないまま一緒に狭いボックスに入る。転校生は手帳を取りだし番号をプッシュしはじめた。

「まず星からだ」

「なにをするんだ？」私はこわくなって少し大きな声を出した。

「名簿の番号を控えてきたんだ。旦那に浮気のことを教えてやろうと思つて」

しばらく耳をあてていたが、

「ちえつ、旦那はいないか」と受話器を置いた。それから手帳に書かれたもう一つの番号を私に示し、

「つきは岸本の番だ。奥さんは星の旦那と違って自宅にい

「……あ、こんにちは。岸本先生に高校でお世話になつてる者です。いえいえ、こちらこそ。ところでご主人のことなんです、同僚の星先生とデキてますよ。車のなかで抱き合つてたんで。星先生もご家庭があるしまずいんじゃないですか……もしもし、もしもし」

切りやがつた。鋭く呟くと受話器を一度もどし、再び硬貨を入れて続きをはじめようとす。私は慌てて転校生の手を抑えた。どきりとするほど指先が冷たくなつてい

「もういいから。頼むからやめてくれ」

「おまえ、どこまでだらしないんだよ」

私たちはボックスを出ると、駅までの道をじつに気まずい思いで無言で歩いた。彼が私に相当腹をたてているとい



タイのすべてがここに
特価 2000 円 (税込/送料共)
注文はアジア文化社まで

うことだけは伝わってくる。

「こんなもんじゃなかったんだぜ」転校生はいきなり口を開いた。

「ママが再婚するまえさ。怪電話がいっぱいかかっていた。ママはこわがって泣いてばかりだし、おれがぜんぶ対処したんだ」

ただ私たちの友情は厚く、二三日はぎくしゃくしたが、すぐにもとの形にもどっていった。私たちはその後も岸本と星の行動を細かく観察していたが、彼らの関係にはなんの変化も認められなかった。私はいたずら電話のことも含めて、これはもうすべて終わったことなのだと考えた。のちのち星と二人きりで直接話す機会が訪れるなどとは、思ってもみなかった。

高校の三年に進級すると、転校生は理系、私は文系のクラスに編入された。クラスは階も違う。私はあたりまえのように転校生のところに出かけていって話をした。少しして、彼がこちらのクラスには一切出向いてこないことに気がついた。たずねていくのは私ばかりだ。たまに廊下ですれ違う。いつも医学部志望の数人で固まっていた、すれ違いざま無視はしないが、せいぜい小さくやあと言うだけだった。話そうという姿勢さえ見せない。そのうち私だけが

電車のなかでも私たちは自然な感じで話をした。彼は医学部受験の過酷さを嘆いた。つり革につかまっただまま窓外の景色を目で追い続け、

「じつは少しまえからさきみに話したいと思っていたことがあるんだ」と言った。

「夏休みに会えないかな。おれは毎日塾やらなにやらで忙しいけど、一日ぐらいならなんとかなると思うんだ」

私は小躍りしたい感情を抑えながら、

「それもいいかもな」と言った。あまりうれしそうにしてしまうと対等な関係が崩れてしまう。彼とはあくまでも対等な親友としてつきあいたかった。

「夏休みに入ったら必ず電話をかけるから待っていてくれなにか」彼はつけ加えた。

「これがまたきみにしか話せない話でさ」

私はさらに喜びを包み隠して、つまらなそうに「へええ」とうなずいた。

夏休みに入っても私はほとんど勉強らしい勉強をしなかった。受験が自分の問題ではないような気がする。自分には具体的に進みたい道も、行きたい大学も、就きたい職業もなかった。名前を知っている大学にはとくに魅力を感じなかったし、名前を知らない大学を調べようという気力もなかった。怠惰な時間の流れのなかで、私はひたすら転校生からの電話だけを待った。

ずねていっても、仲間との会話を中断しなくなった。

「親が通った医学部より高い偏差値の私大に入るのは正直言って難しいみたいだな」

半ばかのような顔をして私はかたわらに突っ立っている。ひどいときは彼のクラスに行った方がいいものの、ひと言も発せずにもどってくる。すべて、なかったことにする気なのか？ 私は落胆するより、むしろ腹をたてはじめた。毎日のように二駅歩いて帰ったことも、お互いを親友だと確認しあったことも、夏の夕刻したたかに酔っ払ったことも、星や岸本の家にいたずら電話をかけた放課後のことも、なにもかもなかったことにしようというのか？

夏休みも近いある夕刻、駅に急いでいて、前方に珍しく一人で歩いている転校生の姿を認めた。日ごろの鬱屈した感情も忘れて、私は駆け寄っていった。

「あ、きみか」片手にコロッケパンを持っている。「塾なんだ。飯食うひまもないよ」

無邪気な笑顔を見せる。彼のこんな笑顔を見るのは久しぶりだ。真夏のような暑さだったが、彼は例によってポタンをはずしたまま上着をひっかけていた。

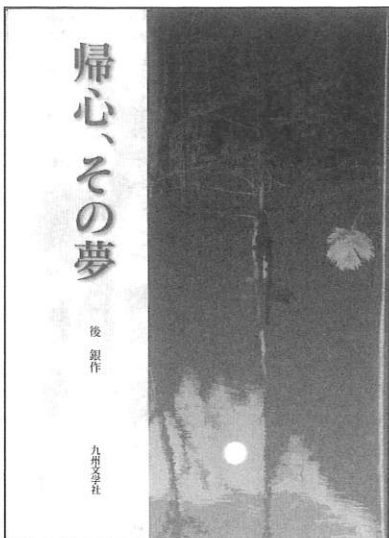
「今年も上着で通すの？」

「ああ、これね」転校生は苦笑した。

「塾の冷房のせいさ。まえのほうに座ると、もろに風があたりるんだ」

夏休みもとうとうあと数日という状況になると、私は本当に落ち着かなくなってきた。会えないのであれば、会えないという連絡だけはくるはずだ。約束を反故にするような男ではない。いらいらするが、こちらから会う話はどうなったのだと連絡するのはあまりにも惨めだ。親友が私以外の世界を持つている以上、自分にも彼以外の確固たる世界があるという風を装いたかった。

いよいよ夏休み最後の一日、私はいつでも出られるように朝からシャワーを浴びて髪を整えた。母親は勤めに出ていて一人きりだったので、安心して高価なシャツに着替えた。昼を過ぎたころから電話機の周りをうろうろと何度も歩く。取りあげては壊れていないことを確認する。夜になり、とうとう連絡はなかったのだと確信すると、私は彼に對していままで感じたことがないほどの憤りを覚えた。



後 銀作「帰心、その夢」九州文学社 税込1,980円

あまりにもひどいじゃないか。勉強が忙しくて会えなかったことはやむを得ないにしろ、それをひと言も告げてこなかった不実さだけは許せない。断じて絶交しよう！ 私は彼を完全に無視することに決めた。二期期がはじまってからは、転校生の教室に二度と行かなかった。廊下ですれ違ったら、そのときこそおまえなんか用なしだという態度を見せつけてやる。

二期期は金曜日からはじまった。一週間たった金曜日の朝、私は登校するなり担任の教師に呼び止められた。担任は漢文担当の間の抜けた中年男だった。斜めにさしこむ強い朝日をまぶしそうに片手で遮りながら、放課後ちよつと残つてくれないかと言う。

あまりの不勉強を思う。休み明けの実力テストはひどい出来だった。まだ返却されてはいないが、さすがに注意されるに違いない。

授業を受けながらも担任に呼ばれていることをときどき思ひだした。ふと、まさかあの電話の件が？ という疑念がわいた。岸本の自宅に転校生がかけた電話のことだ。私は動揺してあのとときの細かいいきさつを思ひだそうと試みた。同時に、転校生がなにか尻尾をつかまれるようなことをしたのでないかという不安を抱いた。私はどうしてもそのことを確認したくなかった。今学期になつてはじめて、昼休みに転校生のクラスに行つてみた。遠くからでも様子

（ことがきらいではなかった。

「そこにかけて」

指定されたかび臭い革製のソファに、担任と並んで腰をおろす。校長の顔にはときどき窓からさしこむ西日があつた。メガネがきらきら光る。

「真崎くんは」校長は視線を合わせずに話をはじめた。「大卒はどこに？」

私は用心しながら「まだ具体的にはなにも決まっていませぬ」と答えた。

「具体的には」

校長は私の言葉をひきとつた。「きみらしい繊細な表現だ。ヘッセを愛読しているだけのことはあるな」

私は驚いて彼の顔を見た。どうやって調べたのだろう。

「得意なものを伸ばす気持ちが大切だ。私は男子が文学を志すことを否定しない。自身の信念のもとに生きるのはいことだ」

なんとも答えようがない。困惑していると校長は急に正面に向き直り、机のうえで両手を組み合わせた。はじめて視線が合う。

「それはそうと」突然、転校生のフルネームを口にす。

「どこにいるのかね？ 本当に困っている。きみたちの友情は尊重するが、ここまでくるとまたべつの問題が生じてくるんだ。きみが喋つたことは黙っているの、居場所だ

を見れば、なにかわかるかもしれないと考えたのだ。

ところが、転校生の姿は見えなかった。席替えをしてしまったせいで、いつもの席にはべつの男が座っている。だれかに転校生の席を聞いてもよかつたのだが、私が探していたことが一方的に伝わるのは屈辱であるような気がして、とうとう手がかりをつかめないまま放課後を迎えた。終礼が終わると、担任は私を教壇のところに手招きした。「ちよつと来てくれ」

担任について階段をおりていく。階段脇の大きな窓から部活動に興じている下級生の姿が見えた。一階までおりると細い廊下を奥へ進む。この先は……校長室だ。どきりとして足がすくむ。担任は校長室のままで足を止めると私の表情を見て、

「なあに、おまえがどうのこうのという話じゃないんだよ」と言った。

ドアをノックする。

「どうぞ」

重々しい声が聞こえた。ドアを開けながら担任は「連れてまいりました」と告げた。

校長室に入るのははじめての経験だった。校長は部屋の奥の机のまえで大きなひじ掛け椅子に脚を組んだ姿勢で着席していた。いかにも高級そうな濃紺のダブルのスーツに身を包んでいる。内省的な感じの紳士で、私はこの校長の

けでも教えてくれないか」

なにがなんだかわからない。私は混乱して隣にいる担任を見た。担任は目が合うと、

「それこそ悪い仲間に引きずりこまれたりしたら大変だぞ。あれだけの大金を持つて出たわけだから」と言った。

校長が口をはさむ。

「お父さんは、お金のことはこの際もうどうでもいいとおっしゃってるんだ。額が大きいから使いきつてしまふことはとうてい不可能だろうがね。大切なのは息子さんの将来だと言うんだよ。受験を控えているからね」

このまま沈黙を守っていると大変なことになりそうだと私は判断して、

「新庄は家出したんですか？」と彼らを交互に見比べながら質問した。

そうだよ、担任がすぐに返す。「おまえなら居場所を知ってるだろうと、こうやって質問してるんだ」

「ぼ、ぼくは」私はどもりながら言葉をつないだ。

「いまは新庄さんとそんなに親しいわけではありません。

高三になってから新庄くんはぼくを避けるようになりました」

「うそをつくな！」担任は強い声を出した。

「うそじゃないです。高三になってからぼくと新庄が親し気に話してるところを見たやつなんて絶対にいないはずで

す

担任が校長に視線を飛ばす。校長は椅子の背もたれに身体をあずけた。そして、魅惑的な低音で「星先生のご自宅に」と言った。

「新庄くんから何度か電話がかかってきているんだ。きみのことを唯一の親友だと言ったそうだよ。真崎くん以外はだれも信用しないとまで言いきったそうだ」

私はおおいに混乱し、急に頭に血がのぼった。そして自分でもわからないまま、

「向こうがどう思おうが、いまのぼくは新庄を友だちだとは思っていません。そんな風に言われるのも迷惑ですし、こうやって巻きこまれるのもうんざりです」と言った。

「うむ」校長は静かにうなずいた。

「じつは新庄くんのお父さんは私の昔からの親友でもあるんだ。それこそ、あちらはどう思っているかわからないがね。大切なわが校の生徒でもあるし、親友のたった一人のご子息でもある。私が必死で探そうとする気持ちはわかってもらえるね。今後なにかあったら連絡をくれたまえ。それからこの話は絶対に他言してはいけないよ。私は心からきみを信頼しているが、約束してくれるね?」

「はい」私は校長だけを見て返事をした。

「それでは帰ってもよろしい」

担任が不満そうに座っているのを意識しながら、そそく

結局、私は有名大学だけを三つ受けて、三つとも落ちた。

卒業式の日、浪人が決定している生徒は三割ぐらいいはいただろう。ただほとんどの浪人生は、私と違って一つか二つはどこかにひっかかっていた。

卒業生名簿を繰っていくうちに、私は二学期から登校していなかった転校生の氏名が、名簿に記載されていることに気づいて衝撃を受けた。単位なんかまるでとれていないはずなのに！だが、そのことを話題にする人間はいなかった。みんな自分のことで精一杯だったのだ。

浪人生活は味気なかった。高田馬場の予備校に通うことにしたのだが、私は初日から授業を欠席した。正確に書くとかけてはいったものの、まえのほうの席に座ろうと列を作っている連中を目にして、たちまち気持ちがあえてしまったのだ。そのまま駅にもどり、ゲームセンターと喫茶店をはしごして自宅に帰ってきた。

初日から何日か連続で休んだことで、それがあたりまえになった。何度か授業に出てみたことはあったが、だいたいは小説を読んでいた。小説を読むだけなら自習室でいいじゃないかということになり、朝から自習室で内外の小説を読みふけた。六年間男子校に通っていたせい、異性が近くに来ると息苦しくてたまらない。異性に対する耐性はまるまできていなかった。

夏が終わるころになると、さすがにこのままではまずい

さと校長室をあとにする。ひどく動揺したせいか、さして暑いわけでもないのに顔にたくさん汗をかいていた。動揺がおさまらないまま校門に向かう。

テニスコートに星が立っている。堂々と岸本とボールを打ち合っていた。夏休み明けに毎年生徒たちが秘密で実施している先生の人気投票があり、岸本は今回も一位を、順位をあげてきた星はついに三位を獲得していた。足を止めずに横目でながめる。星の大きめの乳房がピンク色のポロシャツのなかで上下に揺れている。転校生が彼女に何度も電話をかけていたという話を思い出す。校長が転校生の義理の父親の親友だったという話もいまのまま知らなかった。自分は彼のことをどれほど理解していたといえるのだろうか。

しらばっくれて、理系のクラスの連中に新庄は？と質問してみたことがあった。

「病気だつてさ」相手は言下に答えた。

「腎臓病で長くかかるんだって。私大医学部は浪人不利という噂もあるからな。いつそダブるつもりなのかもしれないぜ」

担任からはその後にも言われなかったもので、私もまたなにも質問しなかった。彼の失踪のことはだれにも話していなかった。いつか彼がもどってきたときに、だれにも言わなかったんだよと伝えるつもりだった。

のではないかといい気持ちになった。二浪はとても許してもらえそうもなかったからだ。なんとか入れそうな大学を志望校に定め、科目を三教科にしぼって十月ぐらいから自習室で勉強をはじめた。

調査書が必要になり高校に向くと、窓口のところでは年度の担任からじかに書類を渡された。

「今年はまたずいぶん地味なところばかり受けるじゃないか」

彼は笑顔で軽口をたたいた。校長室でのやりとりを思い出す。冷静に考えれば、あれからまだ一年半もたっていないのになんだか前世の出来事みたいな感覚がある。



五十嵐勉

アジア文化社 1700円

私はあらためて転校生のことを思った。大学に入ったらしらばつくて手紙でも出してみようか。心の通じる相手は彼以外には考えられなかった。ふられた異性に未練を感じる感覚に似ていたかもしれない。捨てられた相手だからこそ、倒錯した愛情を抱いてしまうのだ。

一月のある日、その日も自習室で志望大学の過去問を解いていた。夕方近くになって、予備校を出た。空気は冷たく乾いていて、なんとも繊細な香りがした。景色がふだんよりくつきり見える。山手線に乗り、新大久保駅からバスに乗る。はやくも日が沈みかけている。

私はいつものようにだれもないバス停に立つてあたりをながめていた。当時の新大久保は現在とはまったく違って、裏通りが巨大なラブホテル街になっていた。ホテルと呼ぶのがためらわれるようないわゆる「連れこみ旅館」というやつだ。無数にある横道に入れば、どこもかしこもカプルのための旅館だらけだった。

木造二階建ての粗末な建物が多かった。戸口に観葉植物を置き、人目を避けるようにしている。例によって、遠くの路地からカプルの出てきた。こちらに向かつてゆつくり歩いてくる。長髪の若い男は深みのあるえんじ色のハンチングをかぶり、真っ黒なサングラスをかけていた。口も

が全身にわたってくる。それはしかし、否定的な感情ではなかった。こうなって当然なのだという思いが胸を去来する。

路地を出る。バス停に星が一人で立っていた。覚悟を決めて、近づいていく。

「お久しぶり」

なにごともしなかったように星は作り笑いを浮かべた。こんなに近距離で話すのははじめてだ。遠くで見るときには気づかなかった大量の小じわが目もとや口もとに目立つ。

「真崎くん、どこの大学だった？」

そのときバスが来た。星はちよつとげのある口調で、「これに乗るわけ？」と言った。

「いえ、べつのバスです」

私はうそをついた。バスのドアが開いて、ステッキを握った老婆がステップをおりてきた。気が遠くなるほど長い時間が経過する。私も星も、ただ老婆をじつと見つめていた。

私は気を取り直して「浪人してます」と答えた。

「そう」星は再び笑顔を作った。

「真崎くんは優秀だからどこだって受かるんじゃないかしら。たまには高校にも遊びに来てくれたらいいのに」

私が沈黙していると彼女は駅のほうを気にしながら、いきなり私の手をとった。

とがひつきりなしに動いているのは連れの女になにか話しかけているからだろう。高価そうな黒いチエスターコート。私は漠然とジョン・レノンを連想した。

バスはいっこうに来ない。ある程度まで二人が近づいてきたとき、私は再びなんということもなく男を見た。そのとき、黒いサングラスの向こうで男もまたこちらを凝視しているのではないかと、異様な気持ちがあった。男の顔から笑みが消え、かすかな煙囪と緊張が走るのがわかった。

え、新庄？

同時に、男にぶらさがるようにして腕を組み、あちら側に顔をそむけている女が星であることに私は気づいてしまった。緑色の特徴的なレザーのコートにも、はつきり見覚えがある。心臓が止まりそうになって慌てて大通りに視線を移し、おおげさにバスが来るのを確かめる芝居をした。なんともぶざまな演技だ。私自身にはなんの落ち度もないはずなのに、とんでもない失態を犯したような気分になった。

通りを見つめている私の背後を二人は足早に歩いていった。こわごわ振り返ると、腕を組んだままの後ろ姿が見えた。二人の姿が見えなくなつてから、私は彼らが出てきた路地に入つてみた。両側はやはり旅館ばかりだ。旅館以外になにもない。中途半端な時刻のせいか、人の気配は皆無だった。私は首をかしげ、しばし立ちつくした。熱い感情

「これ」四分の一の大きさに畳まれた千円札を押しつけてくる。

「ぜんぜん来てくれないから、せめておいしいものでも食べて」

一二枚ではないことがはつきりわかる。

「あ」私がつさに押しもどそうとすると星は西洋人のようなきれいな発音で、

「テイク・イット・イージー」と言った。

お互いの白い息が目のまえで絡みあう。

「受けとつこうね。それが大人の礼儀」

どうもありがとうございますと私はとにかく頭をさげた。受験がんばってね、さよなら」

振り返ることなく駅のほうに歩いていく。すっかり見えなくなつてから、おそろおそろ拳を開いてみると札は四枚あった。よほど慌てたのか、向きがばらばらだ。この金額は、転校生が決めたものではないか。私はほんやりそんなことを思った。

ある私立大学に何とか合格したあとで、私はふと思いついて星に礼状を出してみた。予想していたとおりに、返事はなかった。

転校生にはひたすら翻弄され続けた気持ちはあるが、あちらにしてみればそんなつもりはなかったのだろう。彼自身のことだけでなく、美しい母親や軍艦のような邸宅や食

べたものがつけ払いになる飲食店のことなども、私はときどき思いました。感傷的な気持ちになることもないではなかったが、それ以上の——それこそ彼の自宅を偵察に行ってみた——という機会はなかった。

大学を卒業して、郊外の専門学校に職員としての就職が決まり、私は生まれてはじめて実家を離れて独立した生活を営むことになった。自室を整理しているときに、引き出しの奥深くから、遠い昔転校生から預かったままになっていた銀色のシガレットケースが出てきた。

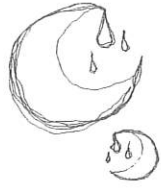
こんなものが！

私はかたづけの手を止めて考えこんだ。捨ててしまってもよかつたのだが、チャンスが無にするのはもつたいたいな気がした。ざっと計算して、七年近くの月日が経過している。ケースのなかに、折りたたんだ千円札を四枚入れた。仕返しのもりで、向きはわざとばらばらにする。大きめの封筒の宛名には転校生の名前と住所を書く。裏にはなにも記入しない。はたして彼に届くかどうかはわからないが、もうどうでもよかつた。転校生に働きかけたのは、それが本当の最後になった。

私がつ通っていた中学高校はいまではちよつとは世間に名を知られた名門校ということになっている。何十年もたつ

銀華文学賞 優秀賞 受賞の言葉 長野正毅

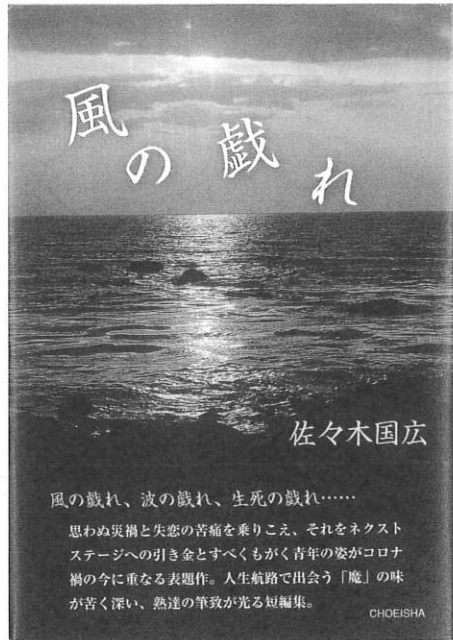
十代から詩や散文を気ままに書き散らして生きてきたが、整理しておきたいという意識が乏しいので、ほとんどが散逸してしまっている。昨年度体調を崩した時期があり、また昨今のはやり病も気にかかる年齢になって、このあたりできちんとまとめておかなければという気持ちになった。同じ場所のみをこつこつ掘り進むように書き綴った小品が、思いもかけぬ僥倖に恵まれたことに、心から感謝の意を表したい。



長野正毅

ながの まさき

1955 東京生まれ
81 学習院大学文学部哲学科卒業
81～99 各種学校講師
99～2020 会社員
現在 各種学校講師
93～96 ペンネームで文芸誌・音楽誌に小説を数作発表
2015 主婦と生活社「励ます力」上梓
20 主婦と生活社「幸せに生きるヒント」上梓



佐々木国広

風の戯れ、波の戯れ、生死の戯れ……
思わぬ災禍と失恋の苦痛を乗り越え、それをネクストステージへの引き金とすべくもがく青年の姿がコロナ禍の今に重なる表題作。人生航路で出会う「魔」の味が深く深い、熟達の手致が光る短編集。

佐々木国広短編集「風の戯れ」
鳥影社 本体価格 1,500 円



北オハイオの冷たい風

森口透 Toru Moriuchi

日本の大手機械メーカーが、総合企業の米国の会社から特許侵害で提訴された米国民事裁判で、技術担当課長が敢然と立ち向かう姿……

バブル経済が崩壊する直前、家庭を犠牲に訴訟に取り組む企業戦士の悲哀と戦いを鮮やかに描いた力作。野元正

森口透（「あべの文学」）
「北オハイオの冷たい風」

編集工房ノア 本体価格 1,900 円

て、歴史と伝統ができたわけだ。母親の先見の明に感謝すべきなのだろうが、自分は完全な異端者だったという自覚があり、同窓会などには一度も参加したことがない。

一人だけ、どういいうわけか当時はさほど親しくなかったのに毎年年賀状を送ってくる男がいて、唯一その男だけは年賀状でつながっている。男は母校の事情にも通じていて、ある年「岸本先生が事故で他界された。一部に自殺説あり」と穏やかならぬことを書いてよこしたことがあった。

こういう時代になったので、机のまえに座ったままいろいろなことを調べることができる。たとえば転校生の実家だった場所には、現在クリニックはない。様変わりした街全体が巨大なビルだらけになってしまい、昭和のころあの一角にどういいう形で民家が密集していたのか、見当もつかなくなっている。また転校生の姓名であれこれ検索してみても、情報は一切出てこない。いまのような世の中になる以前に、彼は亡くなってしまったのではないだろうか。

なにもかも消えてしまったが、私だけはこのにいて当時のことを記憶している。とりわけ生涯ただ一人の親友だった彼が、星と腕を組んで親しげに歩いていた夕暮れどきの美しさは忘れ難い。おおいに私を混乱させましたが、いまとなってみれば、あれほどの詩は私の人生に二つと存在しないからだ。

ウイルスと木偶廻し

菊野啓



離れの板戸がカラリと開いて、バアちゃん、起きとん？とメグミの声がしたかと思うと、障子一枚隔てたウメコの寝間に、凜とした山の空気が忍び込んだ。もうこんな時間かいな、と皺だらけの眼をシヨボつかせながら、ウメコは羽毛布団から這い出し、ああ今日もまた命があった、と安堵するでもなく思い、自分にとって眠りはいつも、死の予行演習みたいなものだと感じている。今日はデコが来るんやって？ とメグミの言う木偶廻しとは、この徳島県神ノ山村に、昔から風習として伝わる正月の祭祀である。それを生業にする人形廻しの芸人が、五穀豊穡・無病息災・家内安全・商売繁盛を予祝しにやってくる。ほうか、門付け

いで上がり込んで来る。お茶でも飲もか、とウメコは言っ
て台所に立ち、アルミの薬缶に湯を沸かし、馴染みの行商
から買った阿波番茶を淹れて、二つの湯呑みを居間へ運ん
だ。

正月のテレビはこのチャンネルも代わり映えせず、わ
ざとらしい笑い声で溢れており、竹籠に盛られた大粒の温
州蜜柑が萎びている。ことさら寒がりのメグミが、エアコ
ンのリモコンを見つけられず、どこよ、どこにあるん、と
散々騒いだ挙げ句、蜜柑の籠の後ろに隠れているのをやっ
と探し当て、寒い寒い、と言いながらピツとやり、ゴボウ
みたいな足を炬燵に突っ込んだ。なあ、今年はほんまにデ
コ来るんやるか？ コロナで無理なんとちゃうん？ とメ
グミがもう一度聞くので、来んやなんて聞いとらん、何が
あっても来るやろ、福の神が来んなら一年がはじまらん
わな、と返すと、そうかなあ、今回は断る家も多いらしい
で、と浮かない顔をする。なんでや、木偶廻しの芸人さん
が福の神と一緒にコロナを運んで来るゆうんかいな？ と
ウメコが刃向かうように言うと、まだ徳島県は感染者が少
ないけん、ことさらに中傷差別がひどいんや、県外ナン
バーの車に嫌がらせしたり、あからさまに帰省や移動する
者を避けたり、全国ニュースで取り上げられとるよ、それ
を後押しするようなことを、県知事がテレビで言うんやけ
んな、恥ずかしいわ、こぞって観光に來い來いゆうとった

が来る日いいやった、とウメコは最近とみに物忘れのひどく
なった頭で思い出し、メグちゃん、すまんけんど注連縄しめなわが
出とるか見てきてくれるで、と声を張った途端、それは間
違ひなく昨日の昼、門屋の表札に取り付けたと思い直した
が、すぐにまた、神棚の上に『雲』は付けたかいな、と別
の不安が頭を擡もたげ、そっちは自分の目で確かめようと、曲
がった腰をトントンと叩きながら、よっこらせと起き出し
た。綿入れの袴はかまを羽織はねって顔を出すと、バアちゃん、ご
飯は？ とメグミが聞いてくるので、いらん、朝は食べ
ん、とウメコは答え、メグちゃんは食べたん？ と聞き返
すと、あたしもいらん、と素っ気なく言い、スリッパを脱

くせに、ほんまこんなことでえんかいな、とメグミは堰せき
を切ったように不満をぶちまけた。メグミも先月東京から
帰省してきて、村の者から白い眼で見られて嫌な思いをし
たばかりなのだ。

この村に生まれ、九十年もの長きを生きてきて、御近所
さんとギスギスするなんて思いもしなかった。ほんまコロ
ナやなんて、とウメコは苦々しく思う。メグミが滑り込み
で帰って来たあと、あれよあれよという間に、日本は新型
コロナウイルス感染症の第三波に見舞われ、ゴートゥー・
トラベルとやらがあえなく中止となり、感染者の急増に
よって、医療が逼迫する危機的状況となり、東京都知事が
飲食店の時短要請をしたり、政府は二度目の緊急事態宣言
を出すの出さないと、状況は日々悪化する一方である。
これからいったいどうなることやら、何もかも初めてのこと
とだからしかたないとは言え、浮き足立った政府も役所も
後手後手に回り、それを正義面したマスコミが糾弾するだ
けで、我々国民はでくの坊みたいな右往左往している。そ
れを嘲笑うかのように、新型ウイルスは変異を繰り返しま
がら猛威をふるい、ワクチン待望論は膨らむものの、もう
じき丸一年を迎えようというのに、完全な収束はまだまだ
先のことのようだ。高齢者は重症化すると言うし、手洗い
とマスクくらいで大丈夫なんかしらん、と案じてはみて
も、どうにも他人事のような気がするの、楽天家のウメ

コにすればいつものことだった。

エアコンの吐き出す生ぬるい風に頬を撫でられたウメコは、急に顔が火照って頭がぼおつとしてきた。暑い寒いに老体がおいそれと反応出来なくなっている。きつとそのうち、あらゆる感覚がもつと鈍くなつていき、つまり多くの楽しみが失われていき、もしそうなら、ついでに痛い苦しいも感じなくなつて、眠るように死ねたらいいのにと思う。許されるならコロナなんぞにやられる前に、誰にも迷惑をかけず、ピンピンコロリと天寿を全うしたいものだ。

あちつ、茶碗に口を付けようとして引つ込める、メグミのくすんだ顔にネコを透かし見た。昔からウメコには他人を動物になぞらえる癖があった。姿形が動物に見えるのではなく、例えばイヌー人間、ネズミー人間、クマー人間、オオカミー人間などと、その人の身についた潜在的な動物性を感じるのだ。

かつて人見知りの激しい子ネコだったメグミは、今は多少すさんだ大人の雌ネコに変化している。月日がたつのは早いものだ。高校を卒業して、それまで文化祭などで盛り上がりつつあったロックバンドに嵌まり、本格的に音楽をやりたいとかで、こんな木や石みたいな一生は嫌やけん、と捨て台詞を残して村を出て行ったとき、家へは何年も寄りつかなかつたのが、ふらりと戻つて来たのが一カ月前のこと。コロナの第三波で日本中が混迷を深める中、感染者の

がへなへたと萎えそうになつた。驚き、腹立ち、情けなさ、それはやがて悲しみに変わった。

人の心はわからない。あんなに機嫌よく身内同然の付き合いをしてきたのに。誰がやったのか不明だし、犯人探しをする気もないが、村の者全員を敵に回したような怖さを感じた。死を鼻先にぶら下げられると、人は簡単にその正体を現す。コロナも怖いが、もつと怖いのは人間だ。時代が変わつて裕福になつたというのに、いっちょも進歩せんなあ、と忌々しく思いながら、総入れ歯をぐつと食い縛り、その胸糞が悪い張り紙を引つpegがし、小さく折り畳んで懐へ入れた。メグミにもトシエにも報せず、こっそりとゴミ箱へ捨てたのだ。

こうして帰郷以来、メグミは勝手知つたる我が家で、無聊な日々をかこっている。運動もせず食べてはよく眠るので、明らかに頬がふつくらしてきたが、どこか放浪してきた野良ネコの風情を残している。その迷いネコの顔を横目で見てみると、ウメコは子供の頃に経験した、忘れようにも忘れられぬ、ヒデオにまつわるあれやこれやを思い出した。

すると、不意にどこかで木の枝のへし折れる音がした。それは、ヒデオが木から落ちてきた音だった。目の前に、鬱蒼と茂る杉木立を縫うようにして、大きな岩のゴロゴロ転がる獣道が伸びているが、それは大昔にウメコが小学生

急増している首都圏からの帰省を、家族の方が押しとどめる場合も多いと聞いている。しかし、メグミの母親のトシエはなぜか反対しなかった。かつて売り言葉に買い言葉の派手な喧嘩をやらかして、長いあいだ絶縁状態にあったのに、ふん、あなたの好きにしたらええやん、とトシエが電話で許可するのを聞いたときは、へえやつば親やな、と感心したものだ。

久しぶりに実家の敷居を跨いだメグミは、自己隔離と称して二週間一歩も外へ出なかつた。家の中でもマスクをして暮らし、家族とは顔を合わせないように、食事のみならず風呂やトイレも別にして、階段や廊下のアルコール消毒を徹底しながら自室に隠つた。幸いにも発病することなく今日に到っているのだが、そうこうしているあいだ、口さがない村人たちがコソコソと囁き合っていたようで、訪ねてくる者もいなくなり、なんとなく空気が悪いのは感じていた。極めつけの事件が起こつたのが十日ほど前のこと。

門屋のコンクリート塀に、『なんでこのタイミングで東京から帰ってくるのですか？ この村は高齢者や持病を持つ人が多いのです。その人たちに移したらどうするのですか？ あなたに責任が取れるのですか？ さつさと帰ってください。もつとよく考えて行動してください』と黒いマジックで書かれた張り紙をされたのである。それを発見したのはウメコで、見た途端に身体の力が抜けてしまい、足

だった頃の、まだ父も母も生きていた時代の景色であり、彼女はヒデオを探して森の入口に立っており、そこで張り上げた声に吃驚したヒデオが、擦り傷だらけになりながら樹上から落ちてきたのだった。どうやら道がどこへ続のか見たかったようだ。おっちゃんらには黙つとてな、おまいはバツが悪そうに言つて、擦り剥けた膝小僧にかまもせず、何事もなかったかのように先へ立って歩きだした。その瘦せつぼちの背中を追いかけながら、ウメコは森の奥にひっそりと横たわる闇を垣間見ている。

と、福つて誰が授けてくれるん？ メグミの声が耳に届いた。ハツとしたウメコが、ほら福の神さんやろ、と答えて、ほんまに神さんなんておらんかいな、と問われ、ほらおるやろ、おらんだったら世の中まわつていかん、と返すと、あたしには神も仏もおらんけん、と愚痴られる。東京で勤めていた全国チェーンの居酒屋が、コロナによる経営悪化で閉店となり、非正規社員だったメグミは解雇されて、収入の道が途絶えて家賃も払えなくなつた。おいそれと次の仕事が見つかるわけもなく、政府から支給される支援金や給付金に期待したが、非正規社員には十分な補償が行われず、やむなく実家を頼らねばならない羽目になつたのだ。ほんま一年前の人手不足が信じられへんわ、無理なシフトを押しつけられてへろへろになるまで働いたのに、とメグミは首を横に振り、学生のバイトや外国人の技能実習生な

んかも、まとめてお払い箱になったんよ、生活費や授業料に困って退学したり、なかにはホームレスになった子もいるらしい、外国人の子たちはもつと大変、誰かを頼ろうにも言葉が通じんし、飛行機が飛ばんから帰国も出来ん、ベトナムから来た子なんか、ドブ川のカエルを捕まえて食べとったそうや、と心配げに言っていた。

話を聞けば聞くほど、ウメコは腹が立ってきた。日本は世界に冠たる豊かな国ではなかったんか、そのためにみんなが力を合わせて頑張ってきたはずだ。まあゆうたら国が親、国民が子供やないか、とくに若いもんは宝じゃ、それが食えんで困つとるのに、国は何をもたもたしよるんか、お金くらいなんぼでも印刷して配つたらええやん、とウメコは憤慨してみるものの、すぐ弱気になって、たぶんあらゆるが一筋縄ではいかんのやろう、代議士のセンセもお医者はんも役所の公務員さんだつて、大勢の人たちが不眠不休で働いとる、尻馬に乗ってぶつくさ言うだけなら簡単だ、と自らを戒め、社会のお荷物でしかない自分の無力をはかなんだ。それでもなんとか不運な孫を励ましてやりたくて、まずは健康が一番よ、おまはんは何より丈夫な体を授かつとるでないで、と的外れを承知で言つてやると、この頃あまり体調が良くなって、肩凝りもひどいし疲れやすくてな、あ、コロナとちがうよ、とメグミはなぜか視線を泳がせながら、首の骨をポキポキと鳴らしてみせた。

くした。お父つさんが我が子に自分の分まで食べさせていたのが印象的だった。

午後から雪になるかもしれんて、とメグミの声がして、テレビの騒がしさが復活した。サルやウマやカニになったお笑い芸人たちが爆笑している。マスクもせずに雑壇で密集しているのは、何年か前の再放送らしい。紅白歌合戦も史上初の無観客だったし、ドラマもバラエティも新鮮みのないものばかりが、ただ漫然と垂れ流されている。いっちょもおもしろくない、こんなんがいつまで続くんやら、泣いたり笑うたり楽しんで一週間を待ちかねて見るような番組が減つてしまつた、テレビの守りが日課のウメコには、退屈で不満でしかたがなかった。

お母ちゃんは正月も仕事なん？ と横からメグミに問われ、さあ、なんも聞いとらんけど、いつも通り出て行つたんならそうなんちゃう、と答えると、スーパーへの買い出しは不要不急にあたらんけん、菓ごもりで買い置きが増えてかえって忙しいんや、と知つたかぶりをするので、誰しもおまんまのために精出して働いとる、と思ひながら、メグちゃん、当分ここにおつたらええわ、ずつと忙しかつたんじゃろ？ たまにはのんびりしたらどうなん、と愛想笑いを向けてやる。うん、そないさしてもらおうわ、どうせ東京へ帰つても、また仕事があるかどうかかわかれへん、コロナがいつ収束するかもわからんし、とメグミは珍

なんぞ悩みでもあるんかな、とウメコは直感的に思つたが黙っていた。

庭の木に止まったイソヒヨドリがきれいな声で囀っている。急に周囲の音が遠ざかり、ウメコの意識は半分抜け出して、また遠い昔へと飛翔していく。ヒデオに初めて会つたのは、やつぱり元旦の朝だった。木偶廻しが来るからと表へ出て待つていたら、彼ら親子が山からよるほい出て来たのだ。そこはなんぞ訳ありの巡礼だけが人目を忍んで往き来する、遍路転がしとも呼ばれる裏の参道なのだった。ウメコはすぐさま父親を呼びに走つた。駆け付けた父親は、見るな、いんどけ、とウメコを家へ追い返した。今にも倒れそうなお父つさんを支えているのが、六歳になったばかりのヒデオだった。ひよろつとした手足や痩せこけた身体は、まるで人間の子供というより、毛の剥げちよるけたバトの雛みただった。お父つさんの方も骨に皮を被せただけのような有様で、手や足、首から顔にかけて黄ばんだ包帯をぐるぐる巻きにしていた。

今にも倒れそうな彼ら親子を、ウメコの父親は自分の家へ連れて行つたが、なぜか上がらせずに畜舎の小部屋へ入れた。そこはヤギがお産する場所で、ちよつとひどいな、とウメコは思ったが、それでも親子は手を合わせて有り難がった。ウメコの母親が雑炊を運んでやると、ヒデオはよほど腹が減つていたのだろう、最後の一滴まで皿を舐め尽

しく神妙な顔で頷いた。

メグミは東京で一人暮らしをしながら、プロのシンガーソングライターを目指していた。それがどんなものなのかわウメコは知らないが、ロックバンドはどうなん？ うまいこといきよるん？ と気がかりなところに触れてみると、まるでアカンわ、ライブハウスはコロナのクラスターで槍玉に挙げられて軒並み休業や廃業するし、メンバーは散り散りになって空中分解、もうどうしようもない、とメグミはぼやいた。それを聞いたウメコが、この子は昔からあんまり運がない、そやけど元は素直なええ子なんよ、だからこれを逆手にとつてトシエと仲直りしたらどうかな、と期待しながら、テレビが笑うのに合わせて笑ひ、欲しくもない蜜柑を一つ取つて皮を剥き、ほれ食べ、と半分渡してやると、メグミはサンキューと言つて受け取つた。

ほやけた酸味を舌で弄びながら、ウメコはまた過去へと遡行していく。腐つた蜜柑のような、髪の毛は一本も生えておらず、ちよつとつけば薄皮が破れそうで、まゆもまつげもひげもない、鼻も耳も削がれて穴になった、到底人間のものとは思えぬ醜い顔の、血膿だらけの体から悪臭を放つ、奇怪な姿の化け物が、荒い息を吐きながら筵の上に寝ているのを、板戸の隙間からこっそりと盗み見ていた。ヒデオはその隣に座り、警戒した眼でこちらを睨んでいた。ウメコは足がぶるぶる震えて止まらなくなり、来るなつちよ

うるだろ、と後ろからかけられた父親の声に腰を抜かしそうになった。なんぞ罰でも当たったんやろか、とあとで聞いてみたら、巡り合わせじゃけんしゃあない、むごいこっちゃ、と父親は答えて、納屋には近寄るなよ、と何度も念を押してきた。

ヒデオのお父っさんは、当時は治る見込みのない難病患者だった。しかも人に移ることから、それに罹った者は激しい偏見と差別に晒され、親兄弟とも今生の別れを余儀なくされて、地獄に落とされたも同然の目に遭った。そんな不憫だが厄介な人間を、ウメコの父親が自分の家へ招いた理由は分からない。その頃の父親はどこか前とは違ってしまい、年老いたヤギになったかのようだった。元々口数の少ないのが、ほとんど口をきかなくなつたのは、前の年に中国ではじまった戦争に参加したからだ。南京という町へ行つて来たのだが、銃の弾で足を怪我した父親は、療養のために村へ返され、もう二度と戦場へは戻らなかつた。そこで何があつたのかは一切誰にも喋ろうとせず、天皇陛下から授与された『志那事変従軍記章』も、筆筒の抽斗に仕舞い込んだままだった。寡黙なヤギに生成変化した父親は、納屋にヒデオら親子を住まわせていることを、村の誰にも気付かれぬように注意していた。そして、人知れず親身になつて世話を焼いた。

メグミの携帯電話が炬燵の天板を震わせた。すぐにメグミは応答し、小さな画面を指先でつるつるやつていたが、不機嫌そうな顔になつてスイッチを切り、ふん、と鼻から息を吐くと、あたしがおるうちに一遍旅行にでも来たらええのよ、と話しかけてくる。オリンピックはどうあつてもやる気のようにやし、チケット取つたげるから見に来たらどうよ、と誘われ、ほんまに出来るんかいな、こんなんで、どない考えても無理やろ、と難色を示すと、きつとその頃にはワクチンも出来るとよ、と無責任に請け合つたので、どつちにしてもよう行かんわ、東京やなんて遠いのよ、と断ると、飛行機乗つたらすぐやし、うちのアパートに泊まつたらええやん、狭いとこやけど、と本気めかして粘られた。それでウメコは、冥土の土産に行つてみたいけどなあ、と思わせぶりな態度を取つて見せた。メグミは心ここにあらずで、ふと見ると、片眼がつうと涙をこぼしている。思いがけない涙は、またしてもウメコを遠い昔へと追いやつた。ヒデオがたつた一度、喉から声を絞り出すように泣いたのは、春とはいっても花冷えのする朝だった。

ヒデオたち親子がウメコの家に匿われてから三月がたつていた。ある日、学校の帰りに、ウメコは三軒先の金田家のバアに手招きされた。バアはいつになくアメを握らせてくれて、おまはんくの牛小屋におるんは誰ぞ？ と聞いてきた。知らん知らん、誰つちやおらんけん、とウメコは激しく首を横に振り、アメを投げ返して走りだした。両親がい年月かかつてようやく間違いに気づき、深く反省して被害者に謝罪したのではなかつたか？ 万人の人権が護られる社会に致します、と誓つたその舌の根も乾かぬうちに、愚かしくも前人の轍を踏もうとしている。そうさせぬために、今度はいったいどんな犠牲が必要だと言うのか？ どんな悲しみを代償として求められるのだろうか？

ある晩、ウメコの父親とヒデオのお父っさんは、夜つびで何かを話し込んだ。翌朝のこと、ヒデオのお父っさんはヒデオを残して忽然と姿を消した。ヒデオは菌軋りしながら声をふるわせて泣いた。まるで腹を切られた獣が呻いているかのようだった。飯も食わず、誰の呼びかけにも応じず、一昼夜泣きあかした。そして、小屋から出て来たときには、別人のような顔つきになつていた。深い悲しみの中に、ある種の決意を刻み込んだ、凍々しくも悲壮な表情を浮かべていた。ヒデオのお父っさんが身を投じたのは、四国八十八カ所を巡る困難な道行きだったが、結願どころか一つ先の札所まで辿り着けたかどうか、その後の行方は杳として分からなかつた。

その日を境に、ヒデオは正式にうちの子になつた。父親が村長に直談判して無理を通したそうだが、ウメコの方が一つ年上だったので、姉やんと呼んで子イヌのように慕つてくれた。一人っ子だったウメコは、弟が出来たようで嬉しかった。小学校に上がったヒデオは、泣くのをやめて勉強

ら固く口止めされていたからだ。それでも誰がどこで言いふらすのか、あらぬ噂が立つのは早かつた。中山んくには疫病神がおる、寄るな、さわるな、うつるぞ、うつるぞ、それまで身を寄せ合うようにして、つらい山の暮らしに耐えてきた村人たちが、急に手のひらを返したように冷たくなり、しまいには村八部のようになってしまった。ウメコも学校で悪ガキどもから、バイキンバイキン、と囃されていじめられた。両親は共同で使つていた村所有の農機具などを借りられなくなり、しまいには日々の営みにも困窮する始末だった。

あれは今のコロナとまったく同じことだった。いわれなき差別やいじめが横行している。それには、この世界に遍在する『悪意』が関与している。不可視の毒を含んだ人の息のようなもの。腐つたはらわたから沁みだして、大地を被い尽くす悪臭のようなもの。普段はおとなしく腹に収めているが、事あるたびに吐きだされ、獣じみた臭いを放つのだ。その得体の知れぬものは、時空を越えて生き続けている。この現代にも未知のウィルスを引き連れて蘇つた。それがまたしても人間を狂わせている。困つたもんよのお、学ぶつちゅうことを知らんのかい？ ウメコは今を当時に重ねてみて、アホらしいやら情けないやら、どうにも居たたまれなくなつてきた。ヒデオたち父子が、旅の先々で受けてきた仕打ちが、どれほど苛酷で執拗だったことか。長

のムシになった。頭は良かったのだろう、国語も算数もよく出来て、先生たちが舌を巻いた。ヒデオへのいじめは相変わらず続いたけれど、そのたびにウメコが身を挺して庇ってやった。そのうち悪ガキたちも一目置くようになり、ヒデオは学級委員を勤めるようになった。

あたしな、こつちで仕事探そうかと思うんやけど、とメグミが急に真顔になって言った。うん？ とウメコは小首を傾げ、人に言えんことが色々あってな、とメグミが眉根に力を込めていた。でもこの御時世、条件のええ仕事はなかなかみつからんやろ、と尻込みするので、そんなことない、この村ではアイテーやらゆうのんやつとつて、そのための学校も出来るらしい、と自慢してやると、へえ、田舎の村も変わったんやなあ、と興味を示したので、なんぞ仕事がないか、村長の石上さんに聞いてみいだ、と勧めてみる。ふうん、それもええかも、と応じるので、勢い込んだウメコが、村では介護や農業や林業や、どこの分野でも人手不足で県外からの移住者を募つとる、と教えてやると、へえ、そうなん、仕事は選ばなかつたらなんぼでもあるゆうことなんやな、と思案してから、でも、お母ちゃんはどう言うかな？ と表情を曇らせた。かつて親子の間で年申諍いが絶えなかつたことを思い出したが、お母ちゃんだって内心はそれを望んどるはずや、と言つてやると、ふん、

たもんだと、今さらながらにウメコは思う。自分で言うのも憚られるが、一人息子のサダハルは不肖の子だった。品行方正とは到底言えなかつた。自分が育て方を間違つたのだ。

見合いで結婚したウメコの夫は、木こりをしている同郷の男だったが、サダハルがまだ幼い頃に山の事故で死んだ。それでウメコが女手一つで育てたのだが、肩身の狭い思いをさせまいと、欲しいものはなんでも買つてやり、叱るべきときに叱らず、甘やかされた子供がどうなったか、あとで後悔したが遅かつた。サダハルは高校に上がった頃から、悪い仲間をつくつて夜遊びをはじめた。どうにか高校を卒業して、町の建設会社に就職したものの、半年もたたないうちに辞めてしまい、その後はあちこちの職場を転々としたが、どこも長くは続かなかつた。それがどんな経緯か分からないけれど、トシエと結婚して、この村へ帰ると言ってきたときには、少しはまともになるかと期待したものだ。しかし、サダハルの放蕩は沙汰済みにならず、若い嫁と幼い娘を家に残して飲み歩き、午前様どころか朝帰りすることも多かつた。ろくに仕事もせず、生活費にも事欠く体たらくで、それがゆえにトシエは子育てと家事に加えて、夜なべやパートの仕事と縁が切れなかつた。

サダハルは浴びるように酒を飲み、仕舞いに肝臓痛を患つて入院する。手術と入院を繰り返し、モルヒネも効

そうかな、と疑わしげな顔をするので、ええでえ、帰つて来いや、とウメコは繼るように繰り返した。

ヒデオも何度か村から逃げようとしたものだった。放浪癖が染み付いていたのか、あるいはお父つさんを探しに行きたかつたのか、ヒデオが欲していたものはなんだったのだろうか？ この村で居場所を得たはずのヒデオが失つたものは、おそらく自由ではなかつたのか？ 全国を行脚するつらい道程においても、きつとヒデオは魂の自由を感じていたにちがいない。一生をこの村から一步も出ずに過ごしたウメコにはわかる。もちろん、それはお父つさんと一緒というのが不可欠だったのだろう。だから、隙を見つければ、お父つさんのあとを追つていった。しかし、いくら健脚とはいえ、荒れた山道は年端もいかぬ子供には荷が重かつた。毎度二里も行かないうちに追いつかれ、ウメコの父親に連れ戻されていた。

メグミが、やっぱ花の大東京も捨てがたいしなあ、と未練を口にした。よう考えてみいよ、自分の将来のことなんやから、とウメコは一旦話を置き、我の強い娘とそれにも増して依怙地な母親について考えた。メグミとトシエの間には深い溝があつた。何かにつけメグミと反目し合うトシエの気持ちも分からぬではない。トシエとは何十年ものあいだ、ひとつ屋根の下で鼻を突き合わせてきたのだ。ようもまあ、こんな出来た嫁が息子のところへなんぞ来てくれない酷い痛みにも苦しみ抜いて死んだ。その闘病を支えたのもトシエであり、三度の食事から入浴、下の世話まで、サダハルの八つ当たりにも耐えながら献身的に看病した。まだ小学生のメグミを残してサダハルが逝つたとき、ウメコはトシエのためには、これはこれでやむを得なかつたときえ思つたものだ。一人息子の死は身を切られるつらさだった。代われるものなら代わつてやりたかつた。生きる気力が萎えてしまい、朝を迎えるのが嫌になり、飯も喉を通らず息をするのも苦しかつた。それでも、若くして子連れの中にあつたから、ウメコは菌を食い縛つて気丈に振る舞うことが出来たのだ。残された家族のために自分が踏ん張る覚悟を決めたのだ。

その後、トシエは娘を育てるために身を粉にして働いた。パート勤めだったスーパーで有能さを認められて正社員にしてもらい、一生懸命努力して店長にまで登りつめた。休みの日には、腰の曲がつたウメコと一緒に、中山家の御先祖様が遺してくれた、ネコの額ほどの田畑を耕し、米や野菜を作つて自給自足に努めたり、道の駅の直売所に出して当座の凌ぎにしたりした。そんな親の苦勞を支えられて、メグミはすくすくと成長した。よく言えば天真爛漫だが、その反面、過保護だったために我が儘なところがあつた。

大人になった娘にトシエが望むことは、社会人として自立することである。だからメグミが自分の夢である音楽をやるために、単身上京して正社員ではなく非正規労働者として働くと言ったときは、真つ向から反対した。歌手やの芸能人やの、あんた本気で言いよるん？ そんな浮ついたことばっかしゆうてからに、もつとしつかり足が地に着いた生き方をしたらどうなん、とトシエは憤った。自分がパートタイマーや農家の嫁として生きてきて、その立場の弱さや不条理さを、嫌というほど思い知らされていたからだ。

それでも、メグミは一步も引かなかつた。徳島はな、こんな田舎でも超一流のミュージシャンが大勢出てるんや、米津玄師とかキング・ヌーとか、メジャーデビューして売れまくつとんやで、どうせお母ちゃんには関係ないやろけど、と馬鹿にしたようにまくしたてた。それにまたカチンときたトシエが、ムーやらヌーやら知らんけど、それとあんたは違いますから、あんたには絶対に無理ですから、と頭ごなしに否定すると、それはさすがにマズかつたと見えて、なんでそんなことあんたに言われんならんのか？ うちかてな、アマコンのボーカル部門で入賞したことあるんよ、それをなんも知らん外野のくせに……、と半泣きになったメグミが言い返す。そこからは汚い言葉も飛び交う、目も当てられない口喧嘩となった。

為を思つてトシエが言えば言うほどメグミは頑なになつ

かつた。目にしている景色がとても美しかったからだ。虹色の水泡が渦巻いて光の柱を作っている。それは恰も天上への通り道であるかのようにだった。大の字になつて脱力しかけたウメコの手を、ヒデオの手がしっかりとつかまえた。陸へ引き上げられた泥ブナは、河原を吹き抜ける涼やかな風に翻られた。

あのとき、自分は紙一重で死を免れた。死はすぐ目の前に現れて、ウメコの前髪を掴み損なつた。このときウメコは死が遠いものではなく、すぐ近くに潜んでいて、こちらが油断すると瞬時に、その鋭い爪を伸ばしてくるのだと悟つた。あろうことかヒデオもそいつに捕まつた。当時の『流感』に罹つて、あつけなく命を落としたのである。ウメコは泣いた。泣いても泣いても泣き足らなかつた。哀れでかわいそうで、なんにもしてやれなかつたのが情けなくて、ウメコは涙に噎んだ。他にも多くの村人たちがバタバタと死んでいった。死は弱い者から順に絡め取っていく。今のコロナとなんにも変わらない。そういうとき、神様仏様はただひたすら沈黙している。それがその人の寿命なんだとあきらめて受け入れるということか。にしても、どうにもこうにも悔しさは残る。この苛立ちをどこへぶつけたらいいのかわからない。

人は自分の死を影絵のように引きずりながら歩いていく。やがて足が一步も前へ進まなくなり、背後から黒い影

で、むしろ母親を自分の夢の実現を阻む敵とみなした。頑固なところは父親にそっくりだった。それともうひとつ、トシエが腹を立てる理由があつた。メグミの計画の裏には、常に複数の男性の影がちらついていた。トシエには甲斐性なしのろくでなしばかりだと写つたらしく、自分の二の舞を演じさせたくないとの意識が働いたようだ。その気持ちは女親としたら至極ごもつともかもしれない。はてさて、母娘の仲を取り持つにはどうしたらいいのか、ウメコの口から出るのは眠気を誘う溜息ばかりである。

メグミとの会話が途絶えると、ウメコは頬杖を突いてうつらうつらした。周囲の音が遠ざかっていき、またヒデオの気配は濃くなりだした。ぶぶ、ぶぼつ、ごぼぼつ、口から無数の泡がこぼれていた。ウメコは水の中から銀色の水面を見上げている。あれは川で遊んでいたときのことだった。旅の生活が長かつたヒデオは、ハゼやアユなどを掴み取りするのが得意で、手際よく石の竈に火を熾すと、それを焼いて食わせてくれた。焼きたての魚は塩を振つただけなのに、磯の香りがしてうまかつた。そのあと浅瀬で遊んでいたウメコが、うっかり足を滑らせて深みに嵌まつてしまったのだ。そのときウメコは一匹のフナになつていった。水面へ出ようとしたが、尾びれがないのに気付いた。水の壁に押し返されて息が出来なくなり、ああこのまま死ぬんだな、と臆腫とする意識の表層で考えた。意外と怖くはな

に覆い被ざられて影そのものになる。影は不可視の微粒子となつて空气中に霧散し、また別のものへと変化する。魚や鳥や森の動物たち、虫や爬虫類、あるいは植物かもしれない。川で溺れたとき、自分は死んでフナになるはずだった。フナになつたウメコの時間は、死んだヒデオの時間と平行して伸び、それらは目には見えぬが、現在を生きるウメコに寄り添っている。だから最近とみにあの頃を思い出し、ヒデオの気配を濃密に感じるのだろう。

でもな、とメグミが、いっぺんちゃんと言ふとは思てるんや、と話を蒸し返し、コマーシャルばかりのテレビのチャンネルを切り替えた。ん？ ああ、ほれがええ、と

☆「文芸思潮」は下記の書店で店頭販売されております。

【東京】
 ジュンク堂池袋本店
 紀伊國屋書店新宿本店
 【山梨】
 山梨朗月堂書店
 【大阪】
 MARUZEN&ジュンク堂梅田店
 【鹿児島】
 丸善ジュンク堂鹿児島天文館店
 【インターネット】
 アマゾン

ウメコは過去に半身を残したまま上の空で答え、思考がこつちへ戻つて来ると、なんでも正直に吐きだしてみたらええわ、と背中を押してやる。さて、どうなるか、でも避けては通れまい、とウメコは心の中で腕組みしながら、メグミの精彩を欠いた顔を盗み見た。トシエと丁々発止の議論を繰り返した末に、威勢良く唖阿を切つて飛び出した利かん気である。それがまさかのコロナ禍となり、浮き世の荒波に揉まれてどんなに傷ついたことか、斟酌する（しんさく）の毒だが、母親の主張にも一理あったと認めざるを得ないだろう。トシエにしてみたら、そら見たことかとなるところだが、そう突き放してしまつと元も子もない。むしろ好機と捉えてみたらどうだろう。やつぱり最後に頼れるのは身内なのだ。そんな考えが下りてきて、家族はなあ、出来るだけ近いところに暮らした方がええ、とウメコは諭すように言い、鴨居に掛けた夫や祖父父母の遺影を見上げた。つらいことも気に食わんこともあつたけれど、いつもそばにいた人たちとのあいだには、良かれ悪しかれ歴史が生まれる。膨大な記憶で構成されたそれを頼りにウメコは今を生きている。たつた一人の孫であるメグミと過ごす時間、ウメコにはそれが愛おしくてたまらない。こんなふうには炬燵に入つてテレビを見ながら、うだうだと語らつていただけで十分だ。自分の将来のために、遠方へ赴く必然があるならしかたないが、そうじゃないなら戻つて来い、なんの気

までこれが飲めるかいな、と思ひながら残りを飲み干した。再びメグミの携帯電話が着信する。しばらく手に取らずにいたが、やつぱり気になるようで、今度は長いこと弄つていた。ほれつてなんなん？ とウメコが聞くと、ライン、と答えるので、直接話した方が早いんとちゃうん、と言つてみたら、この方が話を整理できて便利やし、色んなスタンプも使えるけん、と教えられ、ほうか、ほんなもんなんか、とあかぎれの手をこすつた。

メグミのお屠蘇が手つかずになっていた。飲まんの？ と聞くウメコの脳裏を、ある予感がかすめた。メグちゃん、おまはんひよつとして？ 喉まで出掛かつた言葉を飲み込んだ。メグミはウメコと目を合わせようとしなかつた。項垂れて、バアちゃん、誰にも言わんつて約束してくれる？ とメグミが小声で言うので、ええよ、言わんよ、と身を乗り出すと、あいな、じつはあたしな……、と言ひかけて口ごもり、やつぱり黙つてしまふ。ウメコが取り繕うように、さっきのラインたらゆうん、彼氏なん？ と水を向けてもしょぼくれているので、何しよる人なん？ と興味津々を装つてみた。すると、メグミははにかみながら、相手はバンドのベースなんや、と打ち明けてくる。へえ、きつと男前なんやろな、とからかうと、ちよつとおもしろいやつなんよ、才能あるし、あたしが作詞してそいつが作曲するんやけど、とノロけるので、ふん、だいぶんホの字の

兼ねがいるもんか、ここはおまはんの家なんやから、とウメコは口を酸っぱくして訴えた。そうやな、明日にでもお母ちゃんに相談してみるわ、とメグミは殊勝な顔で肯つた。ウメコはちよつとうれしくなり、あ、ええもんがあつた、と思ひ出し、ほいさつと立ち上がつて台所へ歩いた。年末に仕込んだドブロクがちよど飲み頃になつていた。しかし、味はどうだろう。昨年は米の出来があまり良くなかつたと、生産者であるトシエもぼやいていた。長雨がやつと終わったと思つたら、次は熱中症患者続出のかんかん照り、直撃した台風に刈り取り前の稲穂を薙ぎ倒され、苦労を重ねて収穫した籾は、実の入りもいまひとつだし、収量も去年の半分以下だとのこと。どうも地球はおかしなことになつていようだ。自分が子供の頃の気候と比べてみると、夏は暑すぎるし冬は寒すぎる。巷では温暖化とやらが原因と喧しいが、人間が自然に戦いを仕掛けたから、自然が反撃してきているのだ。いずれその戦いも、そう遠くない将来決着がつくだろう。どちらが勝つかは、推して知るべしである。

まったりとしたドブロクを、一升瓶からコップに注ぐと、それを持つてまた炬燵へ戻つた。メグミの前に置いてやると、何これ、お酒？ と珍しそうにするので、お屠蘇（とそ）じゃ、と言つて、まず自分が一口飲んだ。控え目な甘みは舌を悦ばせ、仄かな熱が喉を伝つて胃に落ちていく。いつようやな、と音はたてずに舌打ちした。その人は今どこにおるん？ と尋ねると、バンドがバラバラになつて北海道へ帰つてもうた、それもあたしになんの相談もなく急にやで、と憎々しげに答えるので、彼の実家が北海道なん？ と聞くと、うん、旭川、コロナで病院が大変になつて自衛隊が出動したとこ、彼の両親も感染して大変だったらしいわ、と肩を落とした。ほれはしゃあないなあ、また落ち着いたら会えるやろ、と慰めると、それがどうしても急を要する相談事があつてな、と渋い顔をするので、うーん、やつぱりか、と確信を深めながら、あえて核心には触れないことにした。そのかわりに、その人のことが好きなんやつたら、いつそ一緒になつたらええやん、あんたもええ年なんやから、と軽い口調で焚き付けてやると、そんな家庭的なヤツとちがうんよ、そこがまた魅力なんやけどな、とわざとらしい溜息をつく。ほうか、ほら困つたな、こつちの都合だけでは進まんわな、と理解を示してやると、どうしようか迷つてる、自分だけでは決められへん、と背中を丸めるので、ように考えてな、でも、大切なことはひとつやで、そこを絶対にはちごうたらアカンよ、と眼に力を込めて言つてやつた。するとメグミは、わかつとるよ、ほんまは結論はもう出とるんや、あたしがしつかりしとつたらええだけの話、と答えて見返してくるが、内心ホツとしたウメコが、彼氏の人、そんなに男前なんなら、うちも会いた

いわあ、いっぺん連れて来てみいだ、と冷やかすと、今はちよつと無理、状況が許せばそのうちにな、とまた潮垂れてしまった。

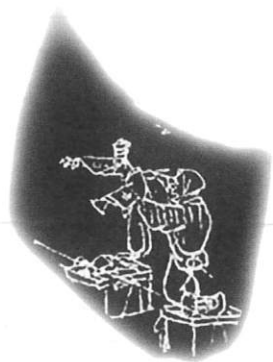
さあ、こりゃえらいこっちゃ、とウメコはテレビを見るふりをして考えた。トシエが知つたらどうするだろう？ 嫁入り前の娘がふしだらだと、怒り狂って嘆き悲しむだろうか？ 今どきそんなこと、若い人らのあいだでは抵抗ないのかもしれない、時代は変わったんやから、とトシエの方を宥めてみるか？ いずれにせよ、じつくり尻を据えて対処せにやなるまい、とウメコは、まず自分が腹をくぐることにした。もしもややこがこの家に来るのだとしたら、何はさておきこんなうれいことはない。古い先短いこの命だが、何か自分に手伝えることもあるはずだ。メグミが親になる。一組の新たな親子がこの世に誕生する。言祝いでやらずにどうしよう。メグミとややこ、仲睦まじい親子の姿を眼裏まなづらに思い描いていると、それがふとしたきつかけとなり、いつも繰り返される、ある想像上の場面が浮かび上がった。

びょうびょうと寒風吹きすさぶ浜辺を、群れから追われた二匹の野良イヌが、まろび合うように歩いている。親イヌは不治の病を患い、子イヌは咬まれて傷ついていた。もう何日も雨水しか飲んでいない。ひもじい腹を抱えて空き家の縁の下にもぐり込んで眠った。冬の寒さは身を凍らせ

子の縁だけは何かあろうと未来永劫続いていく。なあヒデオ、おまえもそう思うやろ。

あ、来た、とメグミが三角の耳をピンと立てて言った。「とうたらり、とうたらり、たらりあかりら、とうたらり、御座つたりや、御座つたりや、福の神が御座つたりや、ところ千代までおハしませ、たとい座していたれとも、さいはい心にまかせたり、あげまんやとんどうや、たえずとふたり、つねにとふたり、久しかれとぞ祝いい、とうたらり、とうたらり……」

マスクとフェイスシールドを装着し、最大限の感染症対策を施した、門付け役のツルとカメが、十分な距離を取った庭先で、いつもよりは控え目のくぐもつた声をあげ、リズムカルな鼓の音を響かせている。木偶を右へ左へと舞い踊らせる、昔ながらに御目出度い『三番叟さんぼすまわし』がはじまるのだ。もうこれを見られたら十分だ、とウメコは思いながら、二人のあとから腰を上げた。



た。オオカミにはなれない惨めなイヌたちは、瘦せこけた体を寄せて傷を舐め合い、僅かなぬくもりを分かち合った。夜明けとともにまた、どこで行き倒れるやも知れぬ遍路の旅を続けていく。お父さんに、我が子に、どんなにか会いたかったらに。なあ、うちらはいったい何をしたんやろ。あわれな親子を引き離しただけではなかったか？

片時も離れぬ後悔がウメコを責める。今頃二人でええとこにおれよ。ウメコに出来るのは、ヒデオたち親子の冥福を朝夕欠かさず神仏に祈ることだけだ。

デコはまだ来んの？ 玄関戸が開き、よかった、間に合うた、そう言いながら、トシエが仕事から帰ってきた。三和土で靴をきちんと揃えて脱ぎ、あれ、あんたもこつちい来とつたん？ ジャンパーを脱いで炬燵へ入ってくる。小太りの身体に母ネコの風情を纏っている。これうちのスパーに出とつた、とレジ袋から干し柿を出した。買うて来たん？ あんたの好物やろ。ふん、懐かしいな。食べてみ。などと言いつつ合点ながらも、母と娘の胸中には無数の蟠りが浮かんでいる。そのうちにまたひと悶着どころか、とんでもない大嵐が吹き荒れるやもしれん。

親子、干渉、自立、貧困、仕事、生活、結婚、家庭、出産、育児、老後、病氣、同居、介護……。

ウメコはそれらをぶうと吹き消した。すべてを分かり合えるはずもない。だって人はそれぞれだもの。でも、親と

銀華文学賞 優秀賞 受賞の言葉 菊野 啓

ここ一年ほど、テレビの前で怒ってばかりいた。現代のこの日本で、まさかこんな事が起ころうとは。人が目の前でバタバタと死んでいるのに、何で誰も助けないんだ？ 何て冷たいんだ、これが人間の本性か？ などと憤りながら、安全な環境に身を置いて、所詮は他人事でしかない自分がいた。そのような者が書いた小説に賞をいただけるとは、とてもうれしい一方で、何だかちよつと恥ずかしい。また書きます。ありがとうございます。



きくの けい



菊野 啓

1960 徳島県生まれ
 広島大学歯学部卒業
 徳島大学大学院歯学研究科修了
 現在、歯科開業医
 徳島県徳島市在住
 第13回銀華文学賞佳作
 小説「邪眼」(幻冬舎・電子書籍)
 小説「金の顔」(幻冬舎)
 徳島文学協会理事

無低の住人と少女

神郷愛光

「もう長くないな」

伸び放題になっていく鬚を右手で撫で回しながら、山上誠は「無低（無料低額宿泊所）」の一室で溜め息をつく。三月中旬に「無低」に入所してからすでに一週間が経過していた。

三畳一間の部屋、歩くたびに埃が舞い上がる。脚がぐらぐらする無機質な鉄製のベッド、おそろくどこかのお下がりののだろうか。汗と汚濁が染みついて弾力を失った布団、そこから立ち昇ってくる異臭に吐きそうになる。備え付けられたテレビは液晶画面の中央に小さな裂け目が走り、その周辺の映像は輪郭や濃淡がおかしくなっている。床に無雑作に転がる二つのビニール袋、洗濯前と洗濯済みになっ

と星空との境目が曖昧になって、月の光が外部の闇へ滲み出すように見えてくる。内部にあるものが全て外部へ流れ出してしまえば月の命も尽きるのだろうか。そんな妄想に耽っている、誠の目から大粒の涙が零れ落ちた。

窓を閉め、散らかしっぱなしになった床に怖々と腰を沈める。磨りガラス越しにささやかな月明かりが静かに差し込んでいる。その光をじっと見つめながら、過ぎ去りし日々や何の希望もない老い先にあてどなく思いを巡らす。そんな徒事をしていくうちにいつの間にか夜が明けることもあった。

一見すると普通の二階建てアパートのような「無低」。周辺には古びたアパートや狭小な建売住宅が密集し、その南側は海に沿って工場や倉庫が林立している。「無低」の玄関から建物の内部に入ると、右側に受付、正面に殺風景な食堂。その食堂で入所者は食事を取ったり、新聞を読んだり、何とはなしに暇潰しをしたり……。お互いに自分の過去に触れられるのを恐れるように視線を合わさず、言葉が飛び交うこともない。入所者の中には人と顔を合わすのさえ嫌がって、トレイに載った侘しい食事を自分の部屋に持ち帰る者もいる。誠は食堂で一人寂しく食べる。入所してから二週間ほど経った日曜日の昼食時のことだった。

ているが、ここ二、三日の間に洗濯前がやけに膨らんでいる。片隅に追いやられた形ばかりの傾いたラック、その上に置かれたプラスチック製のコップと安物の歯ブラシだけが微かに生活の匂いを放っていた。

入所してから深夜に目覚めることが多くなった。一度覚醒してしまってもう眠れない。脳梗塞の後遺症で動きが鈍くなった下半身をベッドの鉄柵を支えに移動させ、杖を頼りにやつとの思いで立ち上がり、薄暗い豆電球に照らされた足元に目をやり、外界と繋がる窓ガラスに向けて歩いていく。

窓を全開にして窓枠に体重を預けながらぼんやりと月を眺める。視力が衰えたせい、しばらく月を見つめている

その日、誠は朝から体調が優れず食欲がなかった。朝食を抜いて昼食に備えたのに、その症状は全く改善しない。食堂の奥の調理場で片手間で作られたような助六弁当が支給されたが、少し黒ずんだ油揚げを見つめるだけで誠の手は動かない。

「しつかり食べんと、ここを追い出されるぞ」

「えっ！」

入居者から声をかけられることなど思いも寄らなかつたから、誠の口から出たのは反射的な驚きの言葉だけだった。気がつけば胡麻塩頭の小柄な男が傍に腰かけている。この住人にしては珍しく頬がふっくらとしていた。

「ここに入りたがってる人間はごまんとおるんや。自分で身の回りのことがでけへんようになったら、ここでは厄介者扱い、病院送り。ここに残りたかったら、ちゃんと食べることやな」

傲慢な口のきき方が少し癪に障ったが、人から忠告されることなんて絶えてなかったから、満更悪くはない。

「それは、どうもご親切に。それにしても、どうして私なんか話しかけてきたのです？」

「そうやなあ、あんたはこの住人とどっか違つとる。諦めきれへん何かがあるようで、時々悲しそうな目をしてどっか遠くを見つめとる。それが少し気になつとったんや。ただそれだけや」

「悲しそうな目？」

「俺にはそない見えた。俺も含めて、この住人は半ば人生を諦めとる。ここを終の住処すまかやと考えて、ここにしがみついとる。ほとんどが病院や施設をたらい回しにされてやつとここに辿りついた連中やさかい、仕方があらへんけどな。生活保護費を担保に取られて住処と食事、それに僅かな小遣い、それが全てや。あんたもそれに近いんやろう？」

「まあ、よく似たものです。コンビニに向かう途中で倒れ、救急車で運ばれ緊急入院。病名は脳梗塞。どうにか一命は取り留めたが、リハビリをしても体が思うように動かなくて……」

「ほんでも病院はあんたを追い出したのか。まあ、病院にとつて長期入院は、診療報酬上のメリットがあらへんさかいな。病院のソーシャルワーカーもあんたの行き先が見つかつてホツとしたはずや。退院させられな経営問題や。」

「せやけど、ここは無低でもましな方やで。以前俺がおつた無低は、そら酷いもんやつた。六畳一間を二つのベニヤ板で区切つて三部屋にしてるんや。表向きは個室やけど、寝ると空きスペースがなくなる、隣の音は筒抜け、プライバシーなんかあつたもんやあらへん。それに、食事は粗末で一日二回、しかもご飯のお代わりなしで、夕食が茶碗一杯のレトルトのカレーライスだけのときもあつたんや。まあ、無低は元々ホームレスの連中が入る施設やさかい贅沢

まだ若いから、確かに入居者の中では若い部類だろうが今年で六十五になる。それに相棒か、こんな呼ばれ方をしたのは初めてだ。何か魂胆でもあるのだろうか。

「そらそうと、相棒。助六、食べへんのか」

「ええ。朝から全く食欲がなくて……」

「さよか。せやけど食べな体が持たへんで。俺は稲荷寿司に目があらへんのか。食欲があらへんのなら、その稲荷寿司、俺が貰つてもええかいな」

「ええ、どうぞ、どうぞ」

誠が弁当のプラスチックの蓋を開けると、すかさず胡麻塩頭の右手が伸びてその一つを摘む。素早く口の中に放り込んで飲み込むように食べる。まさに一口だ。それと同時に今度は左手が伸びてきて……。三つあつた稲荷寿司はあつという間になくなった。

「どうも、ごちそうさん。残りの巻き寿司は、なんぼ時間をかけてもええさかい、しっかり食べるんやで。ほなな、相棒」

胡麻塩頭は誠の肩を軽く叩いた。そして勢いよく立ち上がり「ちよい散歩に出かけてくる」と言つて足早に食堂の出口へ向かう。その背中に何か浮き浮きしたものが張りついていた。

胡麻塩頭の目的は最初から稲荷寿司だったのか。自分のすぐ横に座り親切ごかしに話しかけてきたのも作戦だった

は言われへんが、あそこはあまりにも酷すぎた。

ほんで俺は福祉課の担当者以外の所へ移りたいと何べんもお願いに行つたんや。何でも言うてみるもんやな。一年前にそいつからここが空いたと連絡があつたさかい、すぐに手続きをしてもらうた。以前のところに比べれば、ここは極楽や。食事も三回あるしな。そやさかい俺はずつとここにおるつもりや」

それにしてもよく喋る男だ。これだけ話をされたらそれを受けざるを得ないだろう。

「家族や親戚の方は？」

「そんなもん、一人もおらへん。一度結婚したんやけど、家族に愛想を尽かされて離婚。親戚は行方不明。俺は完全な独り身や。そやさかい今俺が死んだつて悲しむ者はおらへん。まあ、死んでも俺は身寄りのない生活保護受給者やから、自治体から依託されたどこの団体が火葬から納骨までしてくれるはずや。そやさかい誰かを煩わせることもあらへん。」

「せやけどな、相棒。俺は時々思うんやで。迷惑をかけるだけじゃあもう、時には誰かの役に立ちたいつてな。せやけど俺はもうすぐ八十やし、体にガタがきとる。それに心臓があかん。そやさかい俺にはもう遅すぎる。せやけど相棒は体が少し不自由なようやけど図体はでかいし、何や言うてもまだ若い。せいぜい気張ることやな」

のか。ひよつとしたら今回は自分がたまたま標的になつただけで、あの男はいつも食欲がなさそうな男を物色しているのではないだろうか。

そう思いたくはなかつたが、そんな邪推が我が物顔に頭の中を駆け巡り始めると誠は猛烈に腹が立つてきた。目の前の巻き寿司を不倶戴天の敵のように乱暴に掴み、口を大きく開けてかぶりつく。でも、どんなに頑張つても誠の食は進まず、一切れを咀嚼するのがやつとだつた。プラスチックの容器の中で残り三切れの巻き寿司の海苔が、薄暗い蛍光灯の光を頼りなく反射している。周りを見回しても話し声はもろろん人の動きもない。何かを期待するように食べ終わつたプラスチック容器を見つめる者、頬杖をついて部屋の片隅に視線を泳がせる者、組み合わせた手の上に額を載せて暫しの眠りを貪る者……。幾重にも濃んだ空気が食堂の隅々にまで広がっている。

仄かな日差しが高窓を貫いている。ほんやりした明るみの中から二階へ繋がる階段が浮かび上がってくる。低い段差の連なりの先に踊り場が微かに見える。そこから誰かが階段を上つていこうとしている。

いつしか誠はあの頃のことを思い出していた。

父が亡くなつた後、長期間にわたつて母の介護をしつつ派遣社員として働き続けてきた誠は、心身ともに疲れ切つていた。母の死が訪れたとき、誠はその死を悲しむ気持ち

だけでなく、何か解放感のようなものを心底に見いだして戸惑った。それを否定しようとして躍起になったが、そうすればするほどその感情は誠の後ろめたさを滋養に増殖していく。誠は思い悩んだ。この苦しみから逃れるためには何か新しいことを始めるしかない。そう思い詰めた誠は、以前から興味のあった文学のことが思いがけず脳裏に浮かんできて、何かを無性に書きたくなった。そしてある同人誌の会員になった。母との思い出を題材にして一つの短編を書き上げる。だが、合評の場で作中の人物が生き生きしていない、観念的な説明があまりにも多すぎる、話が作られすぎて逆に面白くない云々と散々な目に遭う。完膚なきまでに打ちのめされた。それでも自分の可能性だけは信じたかった。同人誌の会員には理解できない自分の才能、その才能を開花させる自分のためだけの階段、いつの日かその階段を見つけて少しずつ上っていくことができる……。そんな風に自分自身を鼓舞して誠は創作に打ち込んだ。でも、いくら書き続けても作品は一向に評価されない。そして誠は気づいた、見事な思い違いだった、自分には才能や階段などなかったのだと。同人誌から離れても誠は書くことへの未練を断ち切ることができなかった……。

厭わしい過去を振り払うように誠は屋外に設置された喫煙所に向かった。一度は煙草をやめようと思ったが、小説

を書き続けていた頃の悪癖はなかなか改善されない。

「無低」の関係者は火災を恐れて宿泊所内の喫煙を禁止している。食堂の奥のドアを開けると吹きさらしの中に円筒状の灰皿が一つぼつんと置かれている。形ばかりの喫煙スペースだ。

煙草に火をつける。紫煙は軽やかに渦を巻きながらゆくり昇っていく。白煙がその後を追いかけていく。でも追いつくことはないだろう。誠はその緩やかな動きを飽きることなく目で追った。

稲荷寿司の一件で味を占めたのか、二人が顔を合わせれば胡麻塩頭は必ず声をかけてくる。他に話し相手のいない誠は、嫌々ながらもありきたりの受け答えをする。誠の食欲が回復してからも胡麻塩頭は同じように話しかけてくるので、胡麻塩頭はそんなに悪い人間ではないと思えてくる。そうこうしているうちに二人は並んで食事をして、時には食後も雑談を交わすようになった。お互いに簡単な自己紹介もした。胡麻塩頭の名は藤原京太郎、本名なら少し名前負けしていると誠は思う。誠の呼び名も「あんた」や「相棒」から「山上さん」に変わった。

二人が心置きなく語り合うようになってから二週間ほど経ったある日、藤原さんは急に真顔になって誠の目をじっと見つめる。

「俺、実は山上さんに話したいことあるんやが……」

藤原さんは「無低」で唯一の話し相手だ。何か厄介な話のようだが、話し相手を失いたくない。

「何でもお聞きしますよ」

その言葉を聞くと藤原さんは「そらありがたい」と一言口にした後、視線を誠から「無低」の出口に移してしんみりと語りだした。

「俺な。女房と一緒に小料理屋をやったんや。四十になつてやつと子どももできよつたし、全てが順調やった。それやのに、五十前に魔が差したちゅうか、ひよんなきっかけからギャンブルをやり始めた。最初はその気になればすぐに止められると思うとつたのに、負けが込んでくると、今までの損を一気に取り返そうとして益々深みにはまってしまうた。気がつけば闇金にも借金しとつた。それ以降はほんま地獄。年がら年中、闇金の取り立てでどないしようものうなつた。それで俺ら夫婦はあらへん知恵を絞つて離婚を役所に提出したんや。ほんで俺は姿をくらし、女房はほとぼりが冷めるまで娘と二人で実家に身を寄せた。

俺は取り立て屋から逃れるために全国を転々。ちよい格好よと言えば、包丁一本で国じゅうを気ままな一人旅や。俺がおらへんようになつてから一年後に女房は小料理屋を売り払い、給食センターで働きながら娘を育てると人伝に聞いた。やけど、俺は取り立て屋が怖うて、なんもでけへんかつた……」

藤原さんは何故こんな話を始めたのだろう。死期が迫っていると感じて誰かに自分の後半生を聞いてほしいのか、それとも何か目論見があるのか。どちらにしろ、藤原さんの語り口調から判断すれば、行き着くところまで行かないと話は終わりそうにない。それにこんな話を自分に打ち明けるのは自分を信頼している証拠、ここは藤原さんの信頼に取り敢えず応えなければ……。

誠は相槌も打ちながら藤原さんの話に聞き入った。「こうなつたのは何もかもが俺の責任やのに、俺は未練がましゅう女房や娘のこと気になつて、時には二人に気づかれへんように物陰から見守つたりした。詮あらへんことと思いがらも、今までの罪滅ぼしのつもりやつたのかもな。娘の結婚後しばらくして女房が亡くなつた。もう俺には帰る場所が完全にのうなつた。これで全てが終わりと思つて俺は娘のことも忘れようと思つた。俺なんかおらへん方が娘は幸せになれる思つてな。希望を失うた俺は生活が荒れた。その結果、心臓を患うて今度は無低を転々……」

ここで藤原さんはプラスチックのコップに入つたお茶を一口すする。誠はこれで藤原さんの身の上話から解放されると思つた。

「それで藤原さんは今ここに居るわけですね」

「確かにそうやが、山上さん、話の続きはまだあるんや。ちゅうより、ここからが本番なんや」

藤原さんはお茶をもう一口だけ飲むと咳払いを一つした。そしてテーブルの染みを見つめるように顔を落として話を続けた。

「ところが二年前、ある地方紙に掲載された火災記事をたまたま読んだんや。家屋が全焼、両親が死亡、娘だけが生き残った……。その両親の名前に見覚えがあったさかい、少し調べてみたら、その母親はやっぱ俺の娘やった。その娘の子、つまり俺の孫娘は、引き取り手がおらへんで、この近くの児童養護施設に預けられた。

俺は孫娘を近くで見守っていたさかい、その施設の近くで無低を探した。それがここのんや」

誠の口から言葉が出ない。藤原さんが顔を上げた。誠の顔に驚き戸惑うような表情を読み取ったのだろう。藤原さんはここで一旦話を切った。

「そないに驚くこっちゃあらへん。人生には色々なことあるんやさかい。山上さんなら、こんな話でも真剣に聞いてくれると思たんは正しかったんや。もう少しやさかい俺の話を最後まで聞いてほしいんやけど……」

藤原さんは急に神妙になった。

「もちろん、最後まで聞きますよ」

ここからは誠の目を見つめたまま、藤原さんは言葉を噛み締めるようにゆっくりと喋った。

「ここに来てから俺は暇を見つけてはその施設に通った。

さかい、いつ死ぬかわかれへん。俺が死んだら俺の代わりに孫娘を見守ってほしいんや。山上さんに負担をかけるつもりはあらへん。できれば、日曜日の午後に俺と同じことしてくれば、いや時々公園で孫娘を遠くから見守ってくれるだけでええんやけど……」

最後まで話を聞いてしまったので、誠は妙に断りづらかった。迷った。藤原さんの頼みごとに重苦しさを感じたが、断れば藤原さんとの関係も終わってしまう。第一、藤原さんの方が先に死ぬとは限らない。ここは取り敢えず形の上だけでも引き受けた方がいいのだろう。

「藤原さんの頼みごとなので引き受けたのは山々なんです、何せ私は足が悪い。できるだけのことはしたいと思っていますが……」

「ほんで十分、十分やで。やっぱ山上さんに話してよかったです……」

藤原さんは零れ落ちそうになった涙を着古したジャージの袖で拭う。二人の間から言葉がしばらく途切れた。

「実を言うたら、この無低に入ってからずっと、お願いできる人を探しとったんや。山上さんを一目見たときから、ひよっとしたらと思つて、そのチャンスをずっと窺つとった。山上さんには迷惑な話やったかもわからへんけどな。あとはよろしゅう頼むわ」

藤原さんは誠に右手を差し出した。誠がその手を握ると

とやうても、その中へは入らず、少し離れた木陰から正門をじつと眺めるだけやけどな。時には正門越しに女の子の元気な声が聞こえてきたりしてな、俺の孫娘の声や思ったりして……。

そのうちに妙なことに気づいたんや。日曜日の午後になると一人の女の子がいつも正門から出ていく。何のためにどこへ出かけるのか、ちょい気になったさかい、俺はその子のあとをつけた。その子は近くの公園へ行って、ベンチに座つて、池を一時間ほど見続け、それが終わると同じ道を戻る。寄り道はせえへん。ただ、それだけなんや。帰り道も俺はその子を尾行した。

ある日、正門の近くで園長らしき人がその子に呼びかけた。

『結衣ちゃん、お帰り』

俺はびっくりした。結衣ちゃんのは俺の孫娘の名前なんや。それがわかってから俺は日曜日の昼食が終わるとその施設に出かけることにした。公園まで往復する結衣を守りたかった、けつたいな男が結衣に声をかけるのを防ぎたかったんや。そのためにちゃんと食べて少し太ろうとしたぐらいやで」

藤原さんは大きな深呼吸を一つした。

「孫娘のことまで話したのは山上さんだけや。ほんで、山上さんに一つお願いがあるんやが……。俺は心臓があかん

藤原さんは左手を添えて誠の右手を両手で包み込み、力を入れた。

「これで心置きのう死ぬる」

「馬鹿なこと言ったらだめですよ。結衣ちゃんのためにも長生きしなくちゃあ」

「それも、そうやな」

藤原さんは苦笑いしたが、その表情はどこか頼りなげだった。

自分の部屋で一人つきりになると、誠は知らず知らずのうち藤原さんの話を思い返していた。

母の介護を長年していたせいで、自分には結婚できなかつた。だから、子ども孫もいない。自分には守るべきものが何もない。自分は何のために生きているのだろう。それに引き換え、藤原さんには結衣ちゃんという宝物がある。

誠は自分の心の奥底に藤原さんに対する妬みを見いだした。

それから三日後の夕方、藤原さんは廊下で倒れ、救急車で運ばれた。元々心臓に持病を持っていたから病院に到着する前に急性心筋梗塞で呆気なく亡くなった。誰にも看取られることなく一人寂しく死んだ。藤原さんは身寄りがないので、おそらく自治体から委託を受けたどこかの社会福祉法人かNPO法人によって火葬され、その遺骨はどこかの共同墓地に埋葬されるのだろう。

藤原さんの葬儀が終わって一週間もすると、その部屋に

どこからかやってきた瘦せこけた年寄りが住んでいた。部屋の入口に貼られていた藤原さんのネームプレートはいつの間にかその男の名前に書き換えられている。こうして藤原さんの死は、元々「無低」にいなかった人のように入居者から忘れ去られるのだろう。

誠は藤原さんと交わした約束を忘れてはいなかったが、時間の経過とともにその約束が少しずつ重荷になってきた。もちろん反故にはできないが、かと言って……。藤原さんとの約束は「時々公園で結衣ちゃんを遠くから見守ること」であって、「藤原さんが死んだらすぐに見守る」ではない。いつか気が向いたら日曜日に公園へ行けばいい。そんな口実を設けて誠は約束を果たすのを先延ばしにした。

そのうちに誠の気持ちも段々と落ち着かなくなってくる。行くか行かないかは別にして取り敢えず公園の場所だけでも確認しておこう。食堂の出入り口近くに周辺マップが貼られていた。

「無低」を出て北側に広がる住宅地を抜ければ右手にコンビニ、そこから幹線道路に沿った歩道を西に進んで横断歩道を渡り、さらに西に進んで右折すれば公園の入り口になっている。かなりの距離だ。今の足の状態では無理だ。誠はよい言い訳を見つけた。

ついでに児童養護施設も探した。コンビニから東へ少し進み三番目の角を右折して海の方へちよつと行った所にあるとする。コンクリートと額に挟まれた左手に鋭い痛みが走った。ひどく惨めで、すぐには立ち上がる気力が湧かない。湿気がトレーナー越しに伝わってこなければ、そのまま寝そべっていたかもしれない。両手に力を込めて顔を浮かせたとき、頭上で声がした。

「おじさん、大丈夫？」

声が聞こえてきた方に目をやると、白い運動靴、ジーンズに半袖のTシャツ。おかつば髪の女の子が身を屈めている。女の子に同情されるなんて真つ平ごめんだ。

「もちろん、大丈夫。ちよつと転んだだけだ」

誠は体を反転させて上半身を起こし、体を少しねじって杖を探す。杖は手が届く範囲にはなかった。女の子は誠の視線の先を追いかける。女の子は黙って杖を拾ってきて誠の正面に回った。

「おじさん、これ」

女の子は大切なものを扱うように両手で差し出す。よく気がつく女の子だ。誠も両手で丁寧を受け取った。

「ありがとう。お嬢ちゃんは、本当にいい子だね」

誠は両膝を曲げ、両手で杖をコンクリートに押し付けて立ち上がろうとしたが、なかなかうまくいかない。見兼ねた女の子が誠の背中を強く押した。誠は両手にさらに力を込める。バランスを崩しそうになったが、どうにか杖と両脚で体を支えた。

る。その施設はなぜか赤い丸で囲まれていた。

ある日曜日の昼食後、煙草を切らした誠はコンビニまで買いに行くことにした。入所後は一度も病院でリハビリ治療を受けていなかったから誠は杖を使ってもスムーズには歩けない。

宿泊所の職員から支給されるのは毎日千円ばかり。でも、誠は煙草以外の物をほとんど買わないから、お金は少額だが貯まる一方。部屋に貴重品を保管する場所がなかったため、誠は風呂場へ行くときも財布をビニール袋に入れて持ち運ぶ。

小さな磨りガラスが唯一の飾りになっている木製の引き戸を開けると、昨夜から降り続いた雨を吹き飛ばすように清々しい陽光が流れ込んでくる。葉桜や家並みに光の戯れが降りかかり、その反映が至る所で波打っている。

住宅の隙間を縫ってコンビニへ向かう。アスファルトで固められた道路は凹凸が激しく、窪みには雨水が溜まっている。自転車か跳ね飛ばしたのだろう、疎らに湿った路面が日差しを受けて輝いている。まだ夜来の雨の影響が残っているのか、やたらと蒸し暑い。

交差点の手前を右折してコンビニの駐車場へ入ろうとしたとき、マンホールの蓋に載せた杖の先が滑って誠の体は俯せの形で前方へ投げ出された。とっさに左手で顔を守る

「おじさん、大丈夫？」

「もう、大丈夫。助かったよ」

それでも女の子は不安が消え去らないのか、心配顔で「おじさん、本当に大丈夫？」を何回か繰り返した。

「お嬢ちゃんは、お年寄りにいつも優しいの？」

女の子は答えを探しているようだった。

「おじさんは園長先生に似てるから……」

女の子の答えが少しずれているような気がする。でも、子どもにはよくあることなのだろう。誠は背筋を伸ばして空を見上げた。

「お嬢ちゃんに、何かお礼をしたんだけど、何か欲しいものはない？ コンビニで売ってるものならいいんだけど……」

女の子は少し困惑しているように見えたが、コンビニに顔を向けたままきつぱりと言った。

「結衣、何もいらぬ」

えっ、結衣？ まさか。誠は女の子の横顔をじっと見つめた。そこに藤原さんの面影がダブる。それにしてもこんな形で顔を合わせるとは……。藤原さんの導きだろうか。誠は話題を変えた。

「結衣ちゃんは、これからどこかへ行くの？」

「近くの公園で、一人遊ぶの」

「それなら、おじさんも一緒に行つていいかな？」

「うん、いいよ」

先ほどと同じようにてつきり断られると思っていたので、誠は結衣ちゃんの無防備な返事には少なからず驚いた。

「おじさん、ちよつと買いい物があるから、そこで待っててくれる？」

「うん、結衣、ちゃんと待ってるよ」

今日はひどくじっとりしているので、煙草だけでなく何か飲み物を二人分買ってこよう。もし結衣ちゃんが飲まなかったら自分の部屋で一人飲めばいい。

誠はドリンクコーナーへ行き、よく冷えたオレンジの缶ジュース二本を手にしてレジに向かう。「無低」に入所してからコンビニで煙草以外の買いい物をするのは初めてだったので誠は妙に浮き浮きしてくる。外で誰かが待っていると思うと、その気分が倍加する。レジで煙草の銘柄を伝えるとき、急に不安になって店外に目をやった。店名シールが貼られたガラスドアの向こうにほっそりした小さな体が見える。

「結衣ちゃん、お待たせ。おじさん、一緒に行きたいけど、足が悪いから、結衣ちゃんが先に公園へ行つてね。おじさん、結衣ちゃんのをゆつくり歩いていくからね」

「うん、わかった。結衣、先に行くよ」

結衣ちゃんはさつと誠に背を向けてすぐに歩き出した。誠が結衣ちゃんを先に行かせたのは、自分の足のせいばかりでなく、六十半ばの男がコンビニ前で出会ったばかりの女の子と歩く姿を人に見られたくなかったからだ。人の誤解を恐れたのだ。

誠は右手に杖、痛みの消えない左手に缶ジュースが二本と煙草が一カートン入ったビニール袋を持って、結衣ちゃんのを懸命に追いかけていく。先ほど転んだせいか足だけでなく体全体が痛くて思い通りに歩けない、息も上がってくる。

幹線道路を大きく横切る横断歩道が見えてきた。向こう側の歩道を西へ歩いてきた女の子が右に曲がろうとしている。誠の衰えた視力ではその子が結衣ちゃんかどうか判別できない。

老人が横断歩道をよるよると歩いている。よく見ると横断歩道は二段階横断方式を採用、歩道の中に交通島(待避スペース)が設けられていた。運がいい、これなら自分でも横断歩道を渡りきれる。

やつと交差点まで辿りついた。信号は赤。このまま信号が変わらない、永久に公園まで行き着けないという不安に襲われたが、しばらくすると信号は青に変わった。誠は杖を突きながら足元に気をつけながらゆつくりと歩く。交通島に到着したとき信号が黄に変わった。排気ガスの混じった生暖かい風が誠の鼻先を通り過ぎる。

先ほど女の子が右折した曲がり角までどうにか到着。右

手を見ると道路が左に大きくカーブする辺りに小さな公園があった。その手前で女の子が大きく両手を振っている。

「おじさん、ここ！」

女の子が大声で呼んでいる。結衣ちゃんだ。それまでの疲れが体からすつかり消え去ったように誠の足取りが急に軽やかになった。

「ここが、結衣ちゃんが言っていた公園？」

「うん、ここで、結衣、一人で遊ぶの」

二人は公園の入り口に向かって誠のペースに合わせて歩く。日は少し西に傾きかけていたが、入り口近くの木々は豊かな日差しを照り返している。申し訳程度の遊具の先にごちんまりした池がある。その近くに端が崩れ落ちた、背凭れない木製のベンチが無雑作に置かれていた。

乾き具合を確かめるように結衣ちゃんはベンチの表面を右手でさつと撫でる。

「おじさん、ここに座ろうよ」

二人並んで腰をかけた。遙か前方に濃緑に包まれた山々が霞み、その麓には家らしきものが点在している。気の早い積乱雲が山々から湧き出している。二人は爽やかな風によよぐ池面をしばらくぼんやり眺める。誠は思い出したようにビニール袋から缶ジュースを二本取り出した。

「結衣ちゃん、ジュース、飲まない？」

「……」

結衣ちゃんは池面に目をやったらま一言も喋らない。時間が停滞し始めた。時間を前に進めなければ……。ためらいを振り払うように誠は結衣ちゃんの肩を軽く叩く。結衣ちゃんは顔を誠の方に向けた。

「これはおじさんの分、これは結衣ちゃんの分」と言っている。誠は缶ジュースを結衣ちゃんの前に差し出した。目と目が合った。

「おじさん、ありがとう。結衣、オレンジジュース、本当は大好きなの」

ステイオンタブを引っ張る心地よい音が二つ響いた。

「結衣ね、池を見ると、パパやママと行った遊園地のこと、思い出すの。その遊園地には大きな池があつて、三人で白鳥のボートに乗つたの。それなのに……」

結衣ちゃんの言葉はそこで途切れた。次の言葉を探しているように池面を見つめていた結衣ちゃんが、首を左右に軽く振った。

「でも、パパとママは交通事故で死んだの。だから、結衣ね、いまは一人ぼっち……」

交通事故？ 藤原さんからは火災だと聞いていたので誠は少し戸惑った。結衣ちゃんが嘘を言っているとは思えないし……。そんなことよりも結衣ちゃんの「一人ぼっち」という言葉が胸にこたえた。そのために誠は結衣ちゃんに真相を確かめようとはしなかった。

「結衣ちゃんは辛い目に遭ったんだね」

「うん、それでいま近くの施設にいるの」

「施設は楽しい？」

「園長先生はいい人。だけど時間に厳しいの。遠くまで行くのは日曜日の午後だけなの」

「また答えが少し的外れだと思っただが全く気にならない。」

「他の日はどうしてるの？」

「近くの小学校に行ってる……」

「小学校、楽しい？」

「友だちがいなくて楽しくない……」

その語り口があまりにもぶつきらぼうだったので、結衣ちゃんは学校のことはあまり話したくないのだと誠は思う。ちよつと悲しくなる。二人の会話は途絶えた。

「おじさん、いま、何時？」

トレーナーの袖を捲って使い古した腕時計を見た。嫌な予感がする。

「三時半だよ」

「結衣、先に行くね。門限が四時半だから。おじさん、今日はオレンジジュース、ありがとう」

「結衣ちゃんがオレンジジュース、大好きでよかったよ。」

それより、結衣ちゃん。来週の日曜日もここに来るの」

「うん、来るよ」

「おじさんもここに来て、いい？」

「いいよ」

「またしても何の疑いも抱かぬ快諾の返事だ。」

結衣ちゃんは急ぎ足でその場を離れた。結衣ちゃんは一度も振り返らない。誠がぼんやりと結衣ちゃんの後ろ姿を眺めていると、また時間が激み始める。結衣ちゃんの姿が誠の視界から消えた。

誠は振り返って池に目を落とす。池面に映った鳥の影がすうつと走っていく。その影もそのうちに見えなくなるのだろう。誠は結衣ちゃんと会う前のことを思い返した。

脳梗塞を患って同人誌の集まりから離脱、思い通りに動かない体、生活保護を受ける屈辱、希望を失った日々、藤原さんからの頼みごと、そして藤原さんの死……。いいことは何一つなかった。惨めなことがかりだった。でも、このままでいいはずがない。何かを変えなければ……。

次の日曜日、誠はコンビニでオレンジの缶ジュースを二本買い、公園のベンチに座って結衣ちゃんを待った。しばらくすると結衣ちゃんがやってくる。初夏の日差しを遮るように、この前は被つていなかった黄色い帽子を頭に載せて、徐々に近づいてくる。そしてそこが指定席のように誠の横に座る。

その日の結衣ちゃんはひどく上機嫌だった。両親と過ごした大切な時間、例えば初詣、誕生日のプレゼント、花見、海水浴、運動会、紅葉狩り、クリスマスプレゼントに纏わ

お話、聞きたいの……」

できることならそうしたいが、そんなことはできるはずがない。不審に思いながらも誠は言葉を挟まず、結衣ちゃんの言葉を待った。

「だから、今度は、お話を紙に書いて、持ってきてほしいの」

結衣ちゃんの真意を理解した誠の心底から何とも言えない感情が少しずつ立ち昇ってくる。自分が、自分の童話が求められている、必要とされている……。

「次からは、紙にも書いてくるね」

結衣ちゃんから笑みが零れた。

結衣ちゃんと別れると、誠は直ちに文房具店に行つて原稿用紙を買い求めた。「無低」に戻ると、大学ノートに書き溜めていた童話を鉛筆で丁寧書き写し始める。結衣ちゃんが読めるように漢字の多くを平仮名にして……。

児童養護施設の園長は結衣ちゃんのことですら少し悩んでいた。発達障害の傾向があつて、園内で一人遊びが多く集団行動が苦手、話し相手の好き嫌いが激しいのか、私とは何でも気軽に話をするのに友だちや職員とはあまり口を利かない、小学三年生になつて少し学習障害があることもわかつてきたし……。

その結衣ちゃんが最近少しずつ変わってきた。園長は結衣ちゃんが日曜日にも同じ時刻に外出して同じ時刻に

戻ってくることに気づいていたし、特にここ一か月ほどは帰園するたびに表情が生き生きとしてくると感じていた。だから結衣ちゃんを信じて余計な詮索は控えていた。

ところがある日、給食用の肉類を仕入れている業者から思いも寄らぬことを聞かされて動揺した。

「園長先生、お宅の結衣ちゃんのこと、知ってますか」

「結衣ちゃんのこと？ 結衣ちゃんは確かにうちの園の子だが、その子のことでは何か？」

「日曜日にも公園でね。年取った男と会って何か楽しそうに話をしている、そんな噂を聞きましてね」

園長は自分の耳を疑った。結衣ちゃんには親しい身内などいないはずだが……。

「まさか？」

「私もまさかと思いましたが、その公園の近くに住んでいる弊社の従業員がですね。あの子は絶対に結衣ちゃんだと言っているんですよ。その従業員はお宅に入入りしてるから結衣ちゃんのことをよく知ってるし、日曜日はうちの会社の公休日だし……」

園長は言葉を失った。

「私も何かの間違いであればいいと思つてますが、ことがこれだけに、園長先生、一度確かめられたらどうですか。火のない所に煙は立たないと言いますから……」

「確かめる必要なんかありません。うちの園の子は、みんな

そう思った瞬間、園長はこんなことをしている、善意を悪意に曲解してしまう自分が恥ずかしくなった。園長は急いでその場を後にした。

ところがその日、結衣ちゃんは暗く沈んだ顔をして帰ってきた。不安に思った園長は「何かあったの？」と何度も質問したが、結衣ちゃんは心ここにあらずという有り様で生返事を繰り返すばかりだった。今は何を聞いても無駄だろう、しばらく様子を見るしかない。

日を重ねるにつれて結衣ちゃんは益々落ち込んでいった。言葉をかけても反応しなくなつた。あの男に何か嫌なことでも言われたのか、それとも何かいかがわしいことでもされたのか、園長の不安は際限もなく広がっていく。

今度の日曜日は結衣ちゃんを外出させない、あの男の元へは行かせない。そう決断すると園長は少し落ち着きを取り戻した。

日曜日がやってくる。園長は万全を期すために、昼食が始まる正午少し前に食堂へ行った。すぐに結衣ちゃんを探したがいつもの席にいない。怪訝に思った園長は食事担当者のもとに駆け寄る。

「席替えをしたんですか」

「いえ、四月から席は替えていませんが……」

「おかしいなあ、結衣ちゃんがないんだけど……」

「結衣ちゃんなら、昼食も食べずに慌てて出ていきました

ない子です。万が一それが事実だとしても、それには特別な事情があるんだと思いますよ。何もやましいことなどないはずですよ。ただ、そのことは他の人に口外しないように。噂好きな連中が何を言いだすかわからないからね。いいですか、頼みましたよ」

「もちろんですよ。長年続いている取引が停止になったら、うちとしても大損ですからね」

結衣ちゃんのことよりも商売の方が大事なのか、見下げた奴だと内心では思ったが、園長は結衣ちゃんのことを考えてそんなことはおくびにも出さなかった。

園長は人見知りの激しい結衣ちゃんに限つてと一度はその疑念を強く否定したが、ひよつとしたらという気持ちでどこからか湧いてきて、それが日増しに強くなってくる。

そうなるかと心配でたまらなくなる。

次の日曜日、園長はこっそり結衣ちゃんのとをつけていった。結衣ちゃんは園長の尾行に全く気づかず公園の中に入っていく。そして池のほとりにあるベンチまで歩く。すでに年老いた男がベンチに座って結衣ちゃんを待っていた。園長は木陰に隠れて黒縁の眼鏡越しに二人の様子を窺う。男のそばに座った結衣ちゃんはとても幸せそうだ。しばらくすると男が原稿用紙を手にして読み聞かせを始めた。結衣ちゃんは熱心に聞いている。

これなら男が結衣ちゃんに悪戯をすることはないだろう。

よ。何度も引き止めたんですが、振り切られました……」

しまった、もう手遅れだ。今から追いかけても結衣ちゃんに追いつくのは無理だろう。大柄なあの男に対して小柄な自分、一人では太刀打ちできない。さて、どうしたものだろう。誰かに、どこかに相談した方がいいのだろうか？ 児童相談所か、それとも警察か。どちらにしろ、このまま何もしないで放っておくわけにはいかない。園長はスマホを手にした。

そのとき、食事担当者が園長に近づき、声をかけた。「よっぽど急いでいたのか、結衣ちゃん、こんなものを落としていったんですよ」

園長の前に差し出されたのは、鉛筆書きのぼろぼろになった原稿用紙だった。その一ページ目に「山上誠」という名が記された十枚ほどの作品。結衣ちゃんを救う何かの手がかりになればと思つて、園長は一気にその小品に目を通した。

園長の目が潤む。誰かの役に立ちたい一心で自己犠牲をも省みない老人の物語だった。小さい頃母に読み聞かせをしてもらった『幸福な王子』と雰囲気がどこか似ている……。

原稿用紙を引つ繰り返すと最終ページの裏で稚拙な幼い文字が踊っていた。結衣ちゃんの字だ。

——嘘をついたらだめ。結衣も、お話に出てくるこの人

のように心やさしくなりたいなあ。

園長の目から涙が溢れる。これほど人を感動させる物語が書ける人物なら大丈夫だろう。

園長は公園に向かってゆっくりと歩き始めた。

誠はその日も早めに公園のベンチに座って公園の入り口付近を見つめながら結衣ちゃんを今か今かと待っていた。例年に比して遅れていた梅雨がやつと姿を現したのか、ここ二日ほど、ぐずついていた天気が続いている。誠は空を見上げた。今にも雨が落ちてきそうな雲行きだった。

「おじさーん」

大きな声が響いた。声が聞こえてきた方に目をやると結衣ちゃんが駆けてくる。

「結衣ちゃん、走ったらだめ。危ないよ」

でも結衣ちゃんは息せき切って走り続ける。ベンチまでやってきたときには今にも倒れそうだった。

「結衣ちゃん、落ち着いて落ちついて。ベンチに座って少し休んだ方がいいよ」

ベンチに腰かけても結衣ちゃんのハアハアという荒い息遣いがしばらく続いた。

「おじさん、ごめんなさい……」

「結衣ちゃん、急にどうしたの？」

「この前、おじさん、オオカミと少年の話もしてくれた

……」

「そうだね。嘘をつくのはよくないという話だったね」

「おじさん、ごめんなさい。結衣、気づいたの」

また話が少し飛んでいる。こんなときは知りたいことをずばりと聞くのではなく、結衣ちゃんが話しやすいように一つ一つ質問をする方がいいのだろう。

「結衣ちゃん、気づいたのはいつ？」

思いがけない質問に結衣ちゃんは面食らったような顔をした。

「この前、ここから帰るとき」

「結衣ちゃん、その調子だよ。それで、何に気づいたの？」

「結衣が嘘をついたこと」

なんだ、そんなことか。何か途轍もなく恐ろしい事態を想像していた誠は、結衣ちゃんの告白を聞いて内心ほっとした。

「結衣ちゃんはどうな嘘をついたのかな」

「結衣ね、前にパパとママは交通事故で死んだと言ったけど、本当はね。結衣がパパやママの言い付けを守らない悪い子だったから、パパとママの仲も悪くなって、パパはお酒をたくさん飲むようになって、パパの煙草の火が元で火事になって、結衣を助けようとして、パパもママも死んでしまった……」

胸の奥に詰まっていたものを吐き出すように結衣ちゃん

を上る男の幻影が現れた。

が大声を張り上げたので、木陰で様子を窺っていた園長の耳にまでその声が届いた。園長は何かを納得したように頷く。真相を話すに至るまでの結衣ちゃんの心の痛みを思うと、誠は胸が張り裂けそうになった。あんなイソップ寓話など話さなければよかった。

「結衣ちゃん、わかった、わかったよ。だから、結衣ちゃん、もうそんな話はしなくていいよ」

「結衣が悪い子だったから、悪い子だったから……」

「そんなことないよ、結衣ちゃんは、正直で優しい子だよ」

「結衣がいい子だったら、パパもママも死ななかつたのに……」

結衣ちゃんは目に大粒の涙を浮かべている。誠は一度立ち上がってベンチを跨ぐように座り直した。

「結衣ちゃんは悪い子ではない、本当にいい子、いい子だよ」

結衣ちゃんは消え入りそうな声で「おじさん」と言っただけに抱きついてきた。誠は両手で結衣ちゃんの背中を軽く叩いて「結衣ちゃんはいいい子だ」と何度も繰り返した。

結衣ちゃんは誠の胸に顔を埋めたまま声を上げて泣き始めた。結衣ちゃんの頭を撫でながら「もう泣かなくてもいいよ」といくら励ましても泣きじゃくったままだった。

そのとき、藤原さんの本心が垣間見えたような「誰かの役に立ちたい」という言葉が聞こえてくる。目の前に階段

を合うつと、園長は誠に簡単な自己紹介をした。その声を聞きつけた結衣ちゃんは園長の方へ向き直る。

「あつ、園長先生」

「結衣ちゃん、いい話をたくさん聞かせてもらってよかったね」

結衣ちゃんは何も言わず軽く頷いた。

「山上さん、あなたの話を拝見しました。心温まる素晴らしいお話ですね。それで、少し厚かましいのですが、ちょっとお願いしたいことがあります。うちの園の子にあなただけの話の読み聞かせをしてほしいのですが……」

いつの間にか曇天の裂け目から微かな日差しが落ちていた。

銀華文学賞 優秀賞 受賞の言葉 神郷愛光

そろそろ年貢の納め時かと小説にも嫌気が差していた矢先、捨てる神あれば拾う神あり、今回の受賞は「まだまだ書き続けるべし」という励ましと受けとめる。
 小説を書き始めたきっかけは、五年前に知人の勧めに応じて大阪文学学校に入学したこと。そこで甘受した辛辣な合評が私を成長させてくれたのだろう。今は、感謝しています。
 今後はこの受賞を糧にして大きな作品に挑戦してみたい。私を推してくださった選考委員の方々に心より感謝いたします。



神郷愛光

こうざと あいこう

1953 愛媛県新居浜市生まれ
 大阪大学基礎工学部卒業
 学習塾関係の会社に勤務
 2013 定年退職
 16 大阪文学学校に入学
 第13回「文芸思潮」銀華文学賞入選

ユダヤ難民を救った男

木内是壽

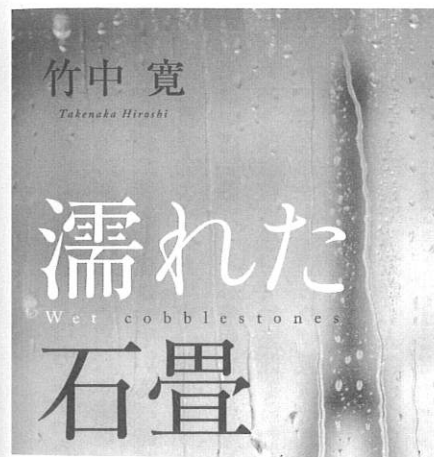
樋口季一郎・伝



ナチスの弾圧にシベリ
 きた2万人のユダヤ難
 ア経由で満州に逃れて
 民を、命を賭けて救っ
 た日本人将軍がいた。ハルピン特務機関長樋口季一郎少将。
 厳寒の中で死に瀕したユダヤ難民を人間として救済した英
 傑の軌跡を辿る歴史評伝。

アジア文化社

1540円(税込/送料共)
 御注文はアジア文化社まで



幻冬舎出版 定価(本体1400円+税)

元ブリヂストン社員が自らの経験を基に描く、
 日本製タイヤ、ヨーロッパ進出の道のり。

主人公は「サムライ」!?

竹中寛「濡れた石畳」
 日本製タイヤのヨーロッパ進出を描く
 幻冬舎 本体価格1,400円

小説の書き方を体験を踏まえて丁寧に解説
 する小説指導書

小説の書き方

作家を志す人のために

小説作法 改訂増刷版

五十嵐勉

送料共1000円(税込)

御注文はアジア文化社まで

災禍の向こう

小柳義則

1

今でよかったのかもな……。

誰もいない酒蔵で、野本清一は思う。

四十二歳。すべてをあきらめてしまふには若過ぎるし、新たな道を歩き出すには歳を取り過ぎていた。

不惑というけれど、何が起きても迷わないほど経験を積んできたわけではない。そもそも、惑わない人間などいるのだろうか。いくつになっても、迷い、惑う。それが人間というものではないか――。

そこまで思っ、清一はかぶりを振った。

つい、観念的なことばかり考えてしまふ。最近の悪い癖だ。「半年足らずで、よくここまで回復できたもんだ。感謝しないとな」

自分自身に言い聞かせるようにつぶやいて、清一は事務室に戻った。

窓の外から事務室の中を覗くと、妻の芳恵が眉間に皺を寄せ、帳簿を凝視していた。できるだけ静かに部屋に入ろうと思っただけで、建てつけの悪い引き戸は悲鳴に似た音を立てた。

「――酒蔵の様子は怎么样了？」

芳恵は清一に気づき、帳簿を閉じて笑みをつくった。

「ああ、異常なした。それより、今月の売上げも思わしくないんだろ？」

「うん、少しずつは持ち直してきてるんだけどね」

芳恵のつくり笑いは、疲れをさらに深く滲ませているように見えた。

「すまん。もうちょっとの辛抱だと思っんだ」

何の根拠もない慰めは、役に立たないだけでなく、害にしかならないことはわかっている。でも、ずっと苦勞を共にしている妻に対して、他にかけられる言葉があるだろうか――。

同じ闇でも、出口の方向がわかっていけるのなら、まだ救いがある。視界は閉ざされていても、たとえ手探りであったとしても、前へ進むことができる。しかし、出口があるのかさえ見えない闇は、ただ途方に暮れるだけだ。立ち尽くすだけしか術がない。

「みなさんのおかげで、ようやくかすかな光が見えてきたところだったのに……」

芳恵の溜め息は深い。

溜め息の発端に、清一は思いを馳せる。

半年……。そう、あれからもうすぐ六カ月が過ぎようとしていた。

突然の出来事だった。

元号が令和へと変わって、初めての八月。あと数日も経

てば、子供たちの二学期が始まる――そんなありふれた夏の日常であった。

九州北部は八月の上旬頃まで猛暑続きで、地域によっては洪水対策本部が設置されているほどだった。それが中旬以降、大気の状態が不安定となり、九州南部に停滞していた前線が二七日になって北上した。

気象庁は繰り返し注意を呼びかけていたが、清一は万一のときの避難先は確認したものの、実際に被害に遭うという認識は薄かった。

二七日の夕刻から雨は降り始めた。そして、日付が変わった頃、猛々しいほどの降雨になった。二八日の明け方、気象庁が大雨特別警報を発表したときは、すでにあちこちの河川で氾濫寸前になっていたらしい。

清一が営む鶴亀酒造の裏を流れる川が溢れ、大量の水が流れ込んできたのは、陽が昇り、辺りがようやく明るくなり始めた時刻であった。

あつという間に――その言葉がこれ以上なくふさわしい表現といえるほど、みるみるうちに水位が上がっていった。

酒蔵の中で最も低い場所にある麹室は、ほぼ水没した。為す術もなくその光景を眺めるしかない状況は、思い出す度に、胸の奥深いところが握り潰されるみたいに痛かった。もちろん、被害を受けたのは清一の酒蔵だけではない。

県西部の広範囲にわたり、浸水被害を受けた。ただ、なぜ

自分たちがこんな目に……という思いを拭い去ることはできなかった。

鶴亀酒造は江戸末期、高祖父が興した老舗の酒蔵だった。清一は五代目になる。地方の酒造会社は、多少の差はあるにせよ、どこも経営難に喘いでいる。鶴亀酒造も平成元年、父の代のときに休業を余儀なくされていた。清一が小学五年生のときだ。父は先細りする酒蔵の経営を自分の代で終わらせるつもりだったらしい。しかし、蔵元を完全に廃業しなかったのは、父の未練だったのだろう。

未練は、時間を経るに連れて、清一に受け継がれていった。酒母しほぼがアルコール発酵していくように、酒蔵を再建したいという思いが膨らんでいく。大学を卒業し、清一は兵庫県兵庫の酒造メーカーに就職した。自らが杜氏とじになって酒造会社を経営をすれば、再開は可能だと考えたのだった。「こじんまりとでいいんだ。でも、代々伝え継いできたこの味を途絶えさせたくないんだよ」

家族にも公言できるようになったのは、酒造メーカーでの修業が三年を過ぎた頃であった。「厳しい世界だからな。生半可な覚悟じゃ、潰れてしまうぞ」

父は眉根に縦皺を寄せていたが、言葉の端には温もりに似た響きが宿っている気がした。

三十歳を迎えた年、清一は鶴亀酒造を継承し、酒蔵を再開させた。

線状降水帯。聞き慣れない気象用語を近年よく耳にするようになった。最近、日本全国各地で起きている水害の多くは、線状降水帯が主な原因だと言っても、まんざら誤りではないのかもしれない。

八月二七日昼過ぎから降り始めた雨は、場所によって雨脚が強く、気象庁も予めの注意を促してはいた。国土交通省も河川の氾濫のおそれがあると警告を発してはいた。しかし——。昔話としてしか聞いていなかった遠い過去の洪水の話は、清一たちにとって現実感の薄いものであった。たしかに雨は激しいが、それが自分たちの生活を脅かすまでの被害になるとは、清一自身考えてもいなかった。

翌二八日の未明、降り続ける雨の音を聞きながら、清一はまんじりともできずにいた。

「野本さん、大丈夫ですか？」
雨音の隙間から、かすかに声が聞こえる。

玄関の戸を開けると、合羽を着た顔見知りの警官が立っていた。

「近くの川の水位が増して氾濫しているの、すぐに避難してください」

警官は早口に告げ、次の家へと向かった。

辺りはまだ薄暗く、激しい雨がそこら中を打ちつけていた。家族を起こし、みんなで避難所へと向かう。八歳の長女美咲と六歳の長男勇太は、何が起きているのかわからず、

父と二人三脚の再スタートは、すべて順調というわけではなかったが、少しずつ軌道に乗り始めている充実感があった。

あとは清一が嫁さんをもらってくれれば、思い遺すことはないんだがな——。

冗談交じりの父の言葉に従うように、大学の後輩だった芳恵と結婚したのは、清一が三十三歳のときだった。

清一が世帯を持ったのを見届けて、父はその翌年、不意に逝ってしまう。これからもつと親孝行を……と考えていた清一を、

「あなたが後を継いで、会社を再建してくれたこと、お父さんはほんとうに喜んでいたのでよ。清一は十分に親孝行してくれてるよ」

母は慰めてくれた。

清一と芳恵、それに母。繁忙期には、季節アルバイトを数名雇うものの、基本的には家族経営で維持してきた。清一と芳恵の間に生まれた二人の子供たちが酒蔵を継いでくれるかどうかはまったくわからなかったし、それはまだずっと先の話だ。とにかく清一は、自分たちの力で行けるところまで行ってみよう、多くの人に選んでもらえる酒造り続けるしかない決めていた。

しかし、その決心が揺らぐことが起こった。想像もしていなかった事態だった。

半分寝ぼけた状態で車に乗り込んだ。

駐車場は、すでに30cmほど浸水していた。気は急いでいたが、エンジンをかけ、ゆっくりと発進させる。車が動かなくなるのだけは避けたかった。年離れた母は、「恐ろしい」を繰り返していた。芳恵が自らにも言い聞かせるように、「大丈夫ですから、きつと大丈夫ですから」とつぶやき、母の背中をさすり続けていた。

避難場所に指定されている地区の公民館には、すでにたくさんの人が詰めかけていた。見知った顔も多い。母と芳恵は、知人と手を取り合い、互いを労っていた。

清一たちは一家五人が座れる場所を見つけ、部屋の隅のスペースに腰を下ろした。

とりあえず避難できた安堵感があったが、先程とはまた違った心配が膨らんでいく。

(酒蔵は大丈夫だろうか?)

(もし酒蔵に被害が出たら、致命傷だぞ)

雨はさらに激しくなったようだ。

窓に映る雨雲は黒くぶあつい、少しずつ夜が明け白み始めていた。

時間が過ぎていくのが、これほど遅く感じられたことはなかった。

大雨特別警報が発表され、県内の河川がいくつも決壊していた。ラジオ放送によると、あちこちで浸水被害が発生

しているとのことだった。

矢も楯もたまらないというのは、こういう感情の泡立ちをいうのだろう。昼近くになっていくぶん雨が小降りになったのを見計らって、清一はいったん酒蔵に戻った。芳恵や母は止めたが、自分と家族の命の無事がとりあえず見込めたので、次に大事な酒蔵の確認をしたかったのだ。

そのときの光景は、険の裏に濃く深く、いまでも刻まれている。

酒蔵全体が泥水に浸り、プラスチックケースや一升瓶があちこちに散乱している。出荷場所に置いていたダンボールなどの梱包資材は水に濡れ、もう使い物にはならないだろう。茫然自失。何がどうなったのか——。何をどうすればいいのか——。復旧などという言葉は、濁流とともに遠くへ流されてしまったような気がした。

もう、だめだ……。

どれくらい、その場に立ち尽くしていただろうか。気がつくくと、雨はいつのまにか上がっていた。

とりあえず、戻ろう。

清一は、母と妻、そして二人の子どもたちが待つ避難所へと再び向かった。

2

使い物にならなくなった梱包資材は廃棄物として搬出した。終わりの見えない作業は、清一の感情をささくれ立たせた。

もう、何もかもやめちまおう——。

何度そう言いかけて、喉のところで呑み込んできたか。

五代目の自分がここで投げ出してしまったら、これまでこの酒造場を守ってきたご先祖様に申し訳ない。それより何より、苦しい状況の中で再建を信じて、がんばってこれている芳恵を裏切ることになる。

つらいのは自分だけではない。まずは清一自身が率先して、復旧に取り組むべきなのだ。もちろん頭では理解できている。だが、どうしても身体が動かない。徒労——の二文字が清一の奥深いところに沈んだままになっている。

作業は遅々として進まなかった。それでも時間というのはありがたい。自宅に戻って一週間を過ぎた頃には、母屋での生活は何とか不自由がない程度には戻っていた。

江越智哉が鶴亀酒造を訪ねてきたのは、そんなときだった。

「大変だったな、清一」

智哉は励ますような、労うような、笑みを浮かべていた。

「どうしたんだ？」

突然の来訪を訝りかねて、清一は聞いた。

「どうしたって、応援に来たに決まってるじゃないか」

智哉の笑顔が深くなる。

それからは、めまぐるしく時間が過ぎていった——。いや、それは正確ではない。時間はときに澱み、ときに速く流れていったというのが正しかった。

被災後の数日間は、あまり記憶に残っていない。避難所と自宅を往復し、とりあえず寝泊まりができるようにするので精いっぱいだった。家族全員で、ただ目の前のことだけに向かい合った。ようやく避難所を退去したのは、五日後であった。

「もう酒蔵は、あきらめないといけないね……」

母は、いくつも歳をとったみたいなのに、やつれていた。代々受け継がれ、父が守り続けていくのに腐心した鶴亀酒造は、誰の目から見ても再起不能の致命傷を負ってしまった。

麴室にまで泥水が入り、冷却装置やポンプは使い物にならない状態になっていた。出荷するだけになっていた日本酒も、すべてダメになった。

今後のことなど、とても考える余裕はなかったが、

「とりあえず、目の前の廃棄物からかたづけたいこう」

家族にとりより、萎えている自分自身を奮い立たせるために清一は声をかけた。

しかし、復旧作業は思うように進まない。ご近所に手助けを頼みかけたが、付近の住民も皆、清一たちと同じく被害を受けていて、自分たちのことで手いっぱいだった。泥がこびりついた一升瓶やケースを、一つひとつ洗い、

「応援って……おまえの店だって被災したんだろ？」

智哉は五年前から隣町で居酒屋を経営している。鶴亀酒造ほどではなかったものの、智哉の店も大雨で床下浸水の被害を受けたと聞いていた。

「ああ、ひどい目に遭ったよ。もっと早くに駆けつけたかったんだけど、うちの店のかたづけが昨日ようやく終わったもんでな——」

「すまんな、助かるよ」

頭を下げようとしたとき、智哉の後ろに数人の見知らぬ顔が並んでいるのに気づいた。

「人手はいくらあっても多すぎることはないだろうと思っ
てな、従業員や知り合いにも声をかけたんだ」

清一の視線を敏感に感じとったのか、智哉は言い訳でもするみたいに言った。

ありがたかった。実際に人を集めてくれたのもありがたかったが、その心遣いがうれしかった。

その日から途方に暮れていた感情が、少しずつ上向いていった。やれるだろうかという思いが、やらなければという覚悟が変わっていった。

修理が可能な機材は業者に修繕をしてもらい、買い換えなければならぬ備品は購入した。とにかく協力してくれた人たちの期待に応えるためには、できる限り早く酒造りを再開させることしかないと清一は考えた。

恩返しはそれしかない。

被害総額は一千万円を超えた。それらのほぼすべてを借入金で賄った。むろん、国や県、市の支援は受けたものの、借金のリスクは清一の肩に重くのしかかった。

それでも、酒造りを再開できる喜びは、何にも増して、清一を勇気づけた。

「みなさんの厚意に報いるためにも、がんばらなきゃね」
芳恵の言葉は彼女自身を奮い立たせるものでもあったし、清一を励ますものでもあった。

底に沈んだ清一たちの目の前に、一本の蜘蛛の糸が垂れ下がってきた。あとはその細い糸を辿って、少しずつ這い上がっていけばいい。決して、後から続く者を蹴落とすような愚行をしてはならない。みんなと一緒に上を目指すんだ。

豪雨の後は、厳しい残暑が続いた。

酒蔵の復旧作業、設備の補修、資金調達、仕込みの段取り……。慌ただしく日々が過ぎていき、いつのまにか秋が来て、冬を迎える時季になっていた。

年が明け、一カ月遅れではあったが、新種の初搾りができるまで回復することができていた。ただ、やること、やらなければならないことは、山積みだった。

いつものように昼飯を掻き込み、酒蔵へ戻ろうとしたとき、仏間に人の気配を感じて足を止めた。母だった。

「いま芳恵さんと話してただけど、新酒の出来はどうなんだ？」

「ああ、おかげでいい酒ができてるよ。ただなあ……」

清一は言い濃む。

「ただ……どうしたんだ？」

「……売上げが追いついていなくて、あまり思わしくくないんだ」

これまで、智哉には何でも隠さずに打ち明けてきた。弱音や泣き言を聞いてもらったことは何度もあった。

「清一は俺と違って家族持ちだし、会社の社長だし、背負うものが多いから大変だよな。だがな、考え方によっては、それだけ人の役に立っているってことだからな」

そう言うてから、まあ、焦らずにいまやることをやっていくことだな、智哉は微笑んだ。

その笑顔は、高校生の頃、練習試合でエラーをした清一に近寄ってきて、「ドンマイ」声をかけてくれたときと同じだった。

「智哉の店は、大丈夫なのか？」

「ああ、俺はおままと違って独り身だからな。まあ、気楽にやってるよ」

「それでも、従業員を何人か雇ってるんだらう？」

「まあ、三人の従業員の生活を守っていく責任はあるけどな——」

「お父さん、みなさんのおかげで、何とか続けられそうですよ。清一もがんばってます。たくましくなって、立派な五代目に育ってくれています。もう少し、見守ってやってくださいね」

仏壇の位牌に向かつて手を合わせている。

清一は気づかれないように、その場を離れた。

水害から二ヵ月後、被災した日本酒の濾過、火入れをやり直し、『亀の歩み、鶴の恩返し』というキャッチフレーズをつけて売り出した。まずまずの販売実績は残せたものの、その後の売上げは芳しくなかった。

亡き父とともに、なんとか再建した酒蔵であったが、もともと経営が楽だったわけではない。

おいしいと感じてもらえる日本酒を造りたいという思いだけで続けてきた酒造会社なのだ。被災による傷は、見えないうちで疼いていた。

事務室に顔を出すと、智哉が訪ねてきていて、芳恵と談笑していた。

「お、五代目のお出ましか」

智哉は快活だった。いつも屈託がない。

智哉に出会ったのは高校に入学したときだから、もう二十数年来の付き合いになる。

一緒に野球部へ入部し、智哉は四番でサード。清一は補欠だった。

十二年前、智哉は突然の交通事故で両親を同時に亡くしていた。清一が兵庫県酒造メーカーで働いていた頃のことだ。

「お互い、がんばらなきゃな」

清一の言葉に頷きながら、「うちの店に置くのは、鶴亀酒造の酒って決めているからな。頼むぞ」智哉は何かを鼓舞するように言った。

口こそ出さなかったが、清一は智哉に何度も助けられてきたと感謝していた。いつかは恩返しをしなければ……と思っていた。

「お茶を淹れてくるわね」

二人のやりとりを静かに聞いていた芳恵は、不意に立ち上がり、給湯室へ向かう。

「憶えてるか？ 智哉」

芳恵の背中を見送ってから、清一は智哉に向き直った。

「俺たちが高校三年生のときの地方大会……」

「たしか、準決勝まで進んだただだよな？」

「あと二つ勝てば、憧れの甲子園に行けると言う試合だった」

あの年の夏も、ひどく暑かった。

補欠だった清一は、ベンチでチームメイトへの応援で声を枯らしていた。

試合はシーソーゲームだった。九回裏の清一たちの高校

の攻撃を迎えて三対四。二死二塁、三塁。ヒットが出れば、逆転サヨナラ勝ちという場面であった。

「あのとき、智哉が俺をピンチヒッターに出してくれて、監督に直訴してくれただろう？」

「ああ、憶えてるよ。次のバッターは二年生の八番で、あの試合では三打数ノーヒットだったからな」

「何で俺を推してくれたんだ？」

「……何でって、おまえだったらヒットを打ってくれるって思ったからだよ」

「万年補欠の俺がか？」

「いや、もしあのときおまえが代打で出ていたら、俺たちはたぶん勝ってたよ」

智哉はあの日の暑い夏に視線を送るように、窓の外を眺めた。

「俺は知ってるんだよ、おまえがみんな帰った後のグラウンドの隅で、いつまでも素振りを続けていたことを——。辺りが暗くなっても黙々とバット振ってたよな」

「知ってたのか？」

智哉は外の景色から視線を外さなのまま、黙って頷いた。「下手くそだったからな。人一倍努力しなきゃ、みんなの役に立つことはできないもんな」

自嘲気味に笑みを浮かべ、清一は智哉と同じ窓のほうを見た。

に味わってもらえる予定のない清酒は、所在なげに佇んでいた。清一もまた同じように誰もいない酒蔵に佇む。

物心がついた頃から、この酒造場で育ってきた。酒母ちまや醪ちまの匂い、アルコールの香りがあちこちに染みついている。それは、二百数十年の苦勞や喜びの証だった。

酒米を磨き上げ、洗米する。洗った米を水に浸けて水分を含ませ、甑しほを使って蒸す。蒸した米は、麴こを造るためのもの、酒母を造るためのもの、醪を造るためのものに分けて、それぞれに応じた温度に冷ます。

その次は、酒造りで最も大事な工程である麴造りだ。麴菌を米に付着し、菌を繁殖させる。日本酒の質を左右する作業であり、杜氏として清一も神経を使う場面である。

それから、酒母造り、発酵、仕込みを経て、熟成した醪を搾り、日本酒と酒粕を分ける上槽と呼ばれる作業を行う。さらに濾過、火入れの処理をして、貯蔵、調合・割水の工程がある。いくつもの工程を通して、ようやく日本酒はできあがる。

清一は日本酒の製造工程を頭の中で反芻しながら、代々受け継がれてきた酒造りに思いを馳せた。昔は鶴亀酒造も出稼ぎ杜氏を含め、多くの蔵人が携わっていた。何十人、いや何百人という人たちが、この酒蔵に関わってきたのだ。鶴亀酒造は清一のものであって、清一のものではない。一時は休止していた酒造場を取引業者や同業者の協力を得

あの試合、監督は智哉の進言に反して、打順どりの二年生レギュラーをバッターボックスに送った。結局、八番バッターは見送り三振に倒れ、清一と智哉の最後の夏は終わった。

「おまえはあのとき、きつとヒットを打ったよ。俺はいつも、そう信じてる」

いつのまにか智哉は、清一へ視線を戻していた。

3

令和になって二度目の夏が来た。

深い傷を負った鶴亀酒造は、つぎはぎだらけながら、とりあえずの応急手当を施し、ようやく通常稼働ができる状態にはなった。

高齢化が進んでいる杜氏の世界であったが、清一のように若い世代や女性杜氏も出始めていて、近年では海外でも日本酒の評価は少しずつ上がっていた。

その矢先……。そう、その矢先だった。

春先から感染が拡大していった新型コロナウイルスは、四月七日の緊急事態宣言を経て、いったんは減少に転じたものの、再び増加の波に襲われている。

清一の酒蔵にも出荷を待ただけの吟醸酒や大吟醸が並んでいた。だが、その行き先は、まだ決まっていない。誰かて父とともに再開し、豪雨災害もたくさんの方々の助けのおかげで何とか乗り切れそうだった。

その矢先だったのだ。新型コロナウイルスの影響は底知れない。どこまで行けば、どれほど歩けば、出口が見つかるのかわからない。見通せない。

清一の周りだけではない。世界中が、不安というぶあつい雲に覆われていた。今年の夏に開催される予定だった東京オリンピックは来年に延期となり、著名な芸能人やスポーツ選手も感染し、死者も出た。暗雲が晴れる気配は、まったくなかった。

ようやく酒造りの見通しがついたというのに、今度は造った日本酒が売れない。買ってくれる人がいない。これ以上、どうしろというのか。一人きりの酒蔵で、清一は愚痴をこぼした。しかし、大量の在庫は何も答えてくれない。目に見えない敵にどう立ち向かえばいいのか——。戸惑いだけが一人歩きをしていた。

「ねえ、いまだったら無利子で国の金融機関から融資を受けられるらしいよ」

芳恵が何度も電卓を叩いた後、顔を上げた。

「……これ以上、借金を増やすのもなあ」

清一は煮え切らない。正直、ためらっていた。

窮状は続いていた。水害復旧のために受けた借入金金の負

担もある。幸い、家族経営に切り換えたことで従業員の雇用はない。家族の了解さえ得られれば、廃業というのでも選取肢の一つかもしれないという考えは、清一の中にも芽生えていた。

「母さんは、どう思う？」

会社の経営のことに母を巻き込むのは、できるだけ避けたいと思っていた。でも万一、廃業ということになれば、母の意見も聞いておかないわけにはいかない。

「清一と芳恵さんの思うとおりにしてくれればいいよ」

母は遠慮がちに言った。

「母さんの考えを聞きたいんだ。もし特に意見がないんだったら、父さんが生きていたらどう言っていたと思う？」

母はしばらく躊躇していたが、

「父さんもおまえの好きにしていって言うと思うよ。でも、本音では続けてもらいたくないんじゃないかな。鶴亀酒造の酒を造り続けてもらいたくないんじゃないかな」

遠慮がちに言った。

造っても、売れないから困ってるんだよ。その言葉は呑み込んだ。年老いた母を苦しめたくなかった。

「そうだよ。この酒蔵を再開するとき、あんなに喜んでいたらもんね」

うんうん、と母は頷いた。

「父さんと同じように、一時的に酒造りを休止するという

のも方法の一つだと思うんだよね。新型コロナウイルスの感染が収束するまで、しばらく働きに出るといって考えもあるんだけど……」

母に言ったつもりであったが、異論を挟んだのは芳恵だった。

「それはだめよ。外で働くのは、私がやります。あなたは鶴亀酒造を守ってください。それはあなたにしかできないことだから——」

力強い声だった。

妻の言葉が沁みる。身体の奥が熱くなっていくのがわかった。ありがとう——を伝える前に母が芳恵の手を握った。

「すまないねえ、芳恵さん。家のことは、私も手伝うから……」

目を潤ませ、何度も頭を下げる。

「いや、芳恵が働きに出る必要はない。その代わり、今までどおり鶴亀酒造の仕事を手伝ってくれ。母さんも頼む。家族みんなで力を合わせれば、きつと乗り越えられるよ」

清一は母と芳恵を交互に見た。

「そうよ、亡くなった父さんもきつと力を貸してくれるはずだから。ううん、父さんだけじゃない、きつとご先祖様も守ってくださいるに違いないわ」

母は清一を見つめ返す。

「そうだよな……俺一人じゃ無理かもしれないけれど、俺

は一人じゃない。家族がいる。仲間がいる。鶴亀酒造の清酒を待っていてくれる人が……きつといる。

人が百回素振りをするのなら、俺は二百回素振りをしよう。もし人が二百回素振りするのなら、俺は四百回素振りをしよう。そうすれば、打てなかった球を打てるようになるかもしれない。

たとえ打てなかったとしても、智哉のように見てくれる人は、きつといるはずだ。そう信じて、俺は素振りを続けよう。ただ黙々と、おいしいと言ってもらえる酒を造り続けよう。俺にはそれしかできない。家族と一緒に——力を尽くそう。

そのとき、不意に事務室の電話が鳴った。芳恵が慌てて受話器を取る。

「はい、鶴亀酒造です」

ええ、そうです……。芳恵の声が低くこもる。

「あなた、吉沢さんという女性の方からよ」

「吉沢さん？」

聞き覚えのない名前だった。芳恵が差し出している受話器を受け取り、「お電話変わりました、野本です」清一は探るように言った。

「突然に申し訳ありません。私、江越智哉の叔母で、吉沢恵子と申します」

「あ、智哉君の叔母さんですか——」

緊張の糸が少し解けた。両親を亡くしている智哉であったが、隣県に母親の妹が住んでいるという話は聞いたことがあった。

「じつは、智哉が一日……」

智哉の叔母の声が、どこか遠くに聞こえた。

4

午前十時を過ぎたばかりだというのに、表に出ただけで額に汗が滲む。夏用の喪服ではあるが、黒いネクタイを締めると余計に暑かった。助手席に芳恵が乗り込むのを待って、清一は静かに車を走らせた。

葬儀場に着くまでの二十分程の間、二人が言葉を交わすことはなかった。口を開けば、智哉の思い出話になりそうだし、智哉が亡くなったというのを突きつけられるのがつらかった。おそらく芳恵も同じ思いなのだろう……昨日からずっと口数が少なかった。

〔江越家告別式〕

葬儀場の玄関に小さく記されている。

ほんとうに智哉なのか。何かのまちがいで、亡くなったのは智哉の親戚ではないだろうか。式場に入っても、清一はまだ現実を受け止められずにいた。

——智哉が、一昨日亡くなりました。

昨日の電話の音が、まだ鼓膜の奥にこびりついている。その後のやりとりは、はつきりと思いつけない。ただ、慌てて書いたメモには、葬儀の日時と家族葬という文字が記されていた。

「私も参列していいのかしら……」

家族葬と聞いて、芳恵はためらっているようだったが、「俺たちにも、ぜひ焼香してほしいと言ってくださってるんだから——」

清一は一緒に行ってくれるよう頼んだ。

智哉の死を受け入れられなかったし、その死を一人で確認するのが怖かった。

告別式は、葬儀場の中でいちばん小さなホールが式場になっていた。

親族の他に四、五人ほどが間隔を空けて、パイプ椅子に座っている。清一たちを入れても、二十人には満たない人数であった。

清一たちは隅のほうの席に座った。祭壇の中央に飾ってある遺影を見る。笑っていた。智哉は笑っていた。それは清一が高校生の頃からずっと見続けてきた笑顔だった。

短めの読経が終わり、喪主から親族、そのほかの参列者へと焼香が進んだ。あつけないくらい簡素な葬儀だった。

「お忙しい中、ありがとうございます。智哉も喜んでい

たら最後に智哉の顔を見てやったださいませんか？」

智哉の叔母は、遠慮がちに言った。

「ありがとうございます。清一は小さく礼を言い、棺の小窓から中を覗いた。

智哉は笑ってはいない。よく、眠っているような死に顔

……いまにも起きてきそうな死に顔と言っけれど、あれは嘘だ。智哉の顔に生氣はなく、蠟細工みたいに無機質だった。棺の中に入っている智哉は、もう智哉ではない。清一が

知っている江越智哉は、自ら死を選んだりはしない。誰よりも強く、誰よりも優しい。快活に笑っている遺影が、ほんとうの智哉なのだ。

——なんだよ、ずっと助けられつ放しで、何の恩返しもできてないのに、勝手に逝っちゃうなんて、ひどすぎるぞ。

声には出さず、智哉の写真を覗みつける。不意に喉の裏が熱くなり、智哉の顔が歪む。

「じつは、野本さん宛の手紙があるんです」

傍らの恵子が青い封筒を差し出した。

「……僕にですか？」

「ええ、私に一通と野本さんに一通。私に手紙なんか書いたこともなかったのに、最後の最後に遺書を残すなんて……。ほんとにあの子つたら——」

恵子のくぐもつた声は、嗚咽へと変わる。

「ありがとうございます。後で読ませてもらいます」

そう言うのが、精いっぱいであった。それ以上、言葉を発すれば堪えている感情が溢れそうだった。

周りの人をこんなふう悲しませるなんて……おまえらしくないじゃないか。憤りはますます自分へと跳ね返ってくる。なぜ、智哉の苦しさ、智哉のつらさをわかってやれなかったのだろう。どうして、智哉は強い人間だと決めたついていたのだろうか。

堂々巡りの問いかけは、一つ一つが清一の奥深いところに刺さっていく。

智哉に電話したのは一カ月前、ちょうど九州地方の大雨が峠を越えた七月上旬のことだった。

「大丈夫だったか？ 店に被害は出なかったか？」

「ああ、こっちは何とか大丈夫だ。清一の酒蔵はどうだ？」

「今回は河川の氾濫もなかったし、おかげさまで大きな影響はなかったよ。でも、熊本辺りは、土砂崩れとかで大変な被害が出たみたいだな。まったく、毎年毎年、なんでこんなに災難が続くんだろうな」

清一の嘆きは、電話越しに智哉へ伝わったのかもしれない。智哉が一瞬、口を噤んだ。

「どうかしたのか？」

沈黙が智哉の存在を遠くに感じさせる。

「……うん？ いや、何でもない。ほんとうに嫌になるく

らい災難ばかりだな」

「新型コロナウイルスも緊急事態宣言が解除された後は、少し収まってきたかなと思っただけ、またここに来て、徐々に増えてきてるしな。智哉の店はどうなんだ？」

実際、例年に比べると飲食店への売上は落ちている。

清一の質問には答えず、「今年の夏の甲子園は中止になったな」智哉は話題を変えた。

「そうだな。でも、代わりに高校スポーツ大会として各校一試合はやれるんだろ？」

「らしいな。そうでもしないと、球児がかわいそうすぎるもん」

これも災禍の一つなのだろう。

「なあ、清一。十三日から始まる野球大会を観戦しないか？」

一試合だけでもいいんだ。一緒に観に行かないか？」

「すまん。行きたいのはやまやまなんだけど、おまえも知ってるとおり、七月は酒造年度の始まりだから。それに去年の豪雨被害でまだ修復が終わってない箇所もいろいろ残ってるんだ」

「そうだな……そうだよな。お互い、高校野球どころじゃないもん」

「俺は無理だけど、智哉は行けよ。たまには息抜きも必要だろ？」

「ああ、できるだけ時間を見つけてみるよ。変なこと言っ

て、すまなかったな」

そう言って智哉は、電話を切った。

あのとき……一緒に野球を観に行っていたら、智哉は死ななくて済んだだろうか。智哉が抱えていた闇を照らすことはできたのか——。

5

酒造組合の寄り合いは、思っていた以上に時間がかかってしまった。どの酒造会社もいままでにない危機感を持っている。競うのではなく、県内の酒造会社が互いに協力してこのピンチを乗り切ろうということで、意見が一致した。組合の中では若手の部類に入る清一も、インターネット販売を提案し、みんなの賛同を得ることができた。細い蜘蛛の糸かもしれないけれど、地元の酒造業者が一緒に上っていかねければならない。決してカンダタになつてはいけな

いのだ。
清一は会社へ戻る途中、まわり道をして智哉が営んでいた居酒屋の前を通った。

去年の水害から一年が過ぎ、智哉が自らを死を選んでから三カ月になろうとしていた。

貸店舗。店舗の入口に貼り紙がある。十一月に入り、新型コロナウイルスの感染はまた増加している。しばらくは、

思えば、おまえの前では、快活で強い自分を演じていたような気がする。おまえの友としてふざわしくありたいと願っていたのかもしれない。

でも、ほんとうの俺は、弱くて、臆病で、見栄っ張り
で……。

ボロボロだったんだ。もう、ボロボロだったんだよ。弱音を吐いて、誰かにすがりつきたかったんだけど、それもできなくて……。

去年、清一の酒蔵が被害を受けたとき、「これくらいのことでは負けるな。おまえだったら、絶対に立ち直ることができるとははずだ」って励ましたよな。そんな俺が新型コロナウイルスに負けて、こういう終わり方を選んでしまっ

まうなんて……
笑っちゃうだろ——。

でも正直、もう耐えられなかった。
おまえには話してなかったけど、ゴールデンウィーク前、四月の下旬にうちの店のお客さんがコロナに感染したんだ。店の従業員も二人、感染していた。保健所の指導もあって、二週間休業したけれど、客足が戻ることはなかった。やっぱり人の噂っていうのは、恐ろしいな。

「ばい菌」

「店やめろ」

「ウイルス感染源」

新しい借主が現れることはないかもしれない。それでもいつかは新しい店ができて、智哉がここで居酒屋をやっていたことは忘れられていくだろう。

「おまえ、店には鶴亀酒造の日本酒しか置かないって言ってくれたよな。俺はがんばって、まだまだ酒造りを続けていくぞ」

清一は車を止めて、主のいない店舗を覗んだ。

こうしていると、不意に智哉が店から出てきて、「どうしたんだ？ 寄っていけよ」と招き入れてくれそうな気がした。

清一はいつも持ち歩いている手紙を、胸ポケットから取り出した。もう何回読んだだろうか。青い封筒は手垢で少し汚れていた。

『清一へ』

ごめん——。おまえがこの手紙を読んでいるってことは、俺はもうこの世にはいないってことだよな。

こんな形でおまえと別れることになるなんて、思ってもいなかったよ。ほんとうに、すまない。

高校生の頃に出会って、二十七年。ずっと友だちでいてくれてありがとう。いま振り返ってみると、楽しい日々だったよ。いや、最後までいい本音で書こう。もちろん苦しかったり、つらかったりしたときもいっぱいあった。それは、清一も同じだろう？

どこで誰が広めたのかわからないけど、店の外壁に落書きや貼り紙の嫌がらせが続いたんだ。窓ガラスを割られたこともあった。

従業員もみんな辞めていった。給料を払えるような状況じゃなかったから、仕方ないけどな。

今日は、どんな災いが待っているんだろう。その困難に耐えられるだろうか。眠れない夜が続く、夜が明けて、新しい一日が来るのが怖くてたまらなかった。自分の弱さを嫌というほど思い知らされたよ。

生きることからリタイアしてしまった俺がこんなことを言うのは、まったく説得力がないけど、清一、おまえは生きてくれ。生きて、みんなが喜ぶ日本酒を造ってくれ。

そしていつか、ずっと遠い未来におまえとまた会える日が来たら、いっぱい土産話を聞かせてくれよ。俺はその日が来るのを、のんびりと待ってるよ。

じゃあな。いろいろありがとう。

江越智哉

ふうっと、軽く息を吐いて、肩の力を抜いた。封筒と同じ色の便箋に、智哉の笑顔が溶けている気がした。

この三カ月間、何度も読み返した手紙だった。内容もほとんど暗記してしまったほどだ。それでも一日一度は読み返す。読み返して、亡き友の無念と我が身のこれからに、

思いを馳せる。

清一も智哉も、いくつかの災禍に見舞われた。清一に至っては、まだコロナ禍と闘っている。その中で、智哉は逝き、清一は残った。智哉はバッテリーボックスに立つことを拒否し、清一は自らを奮い立たせながらバッテリーを振り続けている。その違いは何なのだろう——。

手紙を読み返す度に、清一は考える。

智哉が弱かったわけじゃない。もちろん、自分が強かったわけでもない。家族。行き着く答えは、家族の存在だった。もし、清一に母がおらず、芳恵や美咲、勇太もいなかったら……独りきりだったら、智哉と同じ選択をしたかもしれない。

死を選択した智哉を肯定することはできない。でも、なぜ生きることを放棄したのかを推測することはできる。

「智哉、俺はもう少しがんばってバッテリーボックスに立つよ。また、三振するかもしれないけど、同じ三振でも見逃しじゃなく、空振りにするつもりだ。まあ、見てくれ」
清一は懐に手紙をしまい、車の窓から空を見上げた。またいつか、災禍はきつと訪れるだろう。それでも俺はバッテリーボックスに立つ。そしてヒットを目指して、バッテリーを振り続けてみせる。

清一はゆっくりと車を発進させ、家族の待つ場所へと向かった。

短編小説集 雪女郎

原石寛



原石寛氏の作品を読むとその後に立ち上がってくるのは、華やかさの流れの底に沈んでいった美しいものの宿命である。美しさの陰に潜む残酷さである。無数に散り、踏みしだかれて埋められていったものの姿が、三味線の音曲に乗って乱舞する。氏の文学は、生身の女性の美しさとそれを追い、滅んでいく者への鎮魂であり、憎しみと呪詛をも含んだ人間の美の影への鎮めであろう。

アジア文化社

——五十嵐勉

原石文学界生の小説集 芸の魂がここにある

アジア文化社 1600円

銀華文学賞 優秀賞 受賞の言葉 小柳義則

三次選考通過の通知をいただいてから、「入選できたら、うれしいな」と思っていたのですが、『優秀賞』受賞は望外の喜びとなりました。

小説を書くことは孤独な作業です。ときおり、独りよがりになっていないだろうか、自己満足に終わっていないだろうかという不安に陥ります。

文学賞の受賞は、そんな自分を勇気づけ、励ましてくれる存在です。「もっと書き続けていいのだよ」と認めていただいたように感じております。

主催者の皆さま、選考に関わってくださいくださった方々、ほんとうにありがとうございました。



小柳義則

こやなぎ よしのり

1959 佐賀県佐賀市生まれ
行政書士

98 第 36 回佐賀県文学賞小説部門一席受賞

同年第 29 回九州芸術祭文学賞地区優秀賞受賞

2003 第 15 回自由都市文学賞佳作受賞

11 第 18 回九州さが大衆文学賞奨励賞受賞

エニシング・ゴーズ

室町 眞

一枚の古惚けた写真がすっかり忘れ去っていた遠い記憶を呼び覚ます。懐かしいような余計なお節介をされたような気分になとなる。

その日私は書棚の中の本を引つ越し用の段ボール箱に詰め込んでいた。「これは夫、これは私、これも私」と一冊一冊手に取って区分けしながら。もうすでに不要となった新刊本があれば残しておきたい古書もある。蔵書の数は膨大だから一仕事になるだろう。

夫はともかく私のほうが出ていく筋合いはないが今や無用の長物となってしまうたこの家にあえて留まる謂れもない。過去と未来の間に挟まれて震えている窮屈な現在――

いったい何度「悪いのは僕だ」と言いつのつたのだった。そう、こっちは落ち度はない。ないはずだ。子供を授けられなかったのは私だけのせいではない。それにしても長い間私との性交渉がなかったのに相手が三十代だと可能なのか。癢に障る。

六十代の半ばを過ぎたとはいえ、私の顔はしわだらけというほどでもないし乳房だってまだ張りがある。かつてはこの大きくて綺麗なおっぱいを目当てに男たちがたくさん群がったものだった。スタイルだって抜群に良かった。夜は夜で床上手とも褒められた。でももうあそこはとつくに濡れなくなっているし性欲も湧いてこない。老いてなお男だけが枯れていないのだと思いたるとやはり腹が立つ。なぜ男女間にはそんな不平等な性的機能がそれぞれに備わっているのか。あまりにも理不尽じゃないか。

書棚の奥に一冊の詩集を見つけ出す。手を伸ばして引き寄せる。少し胸が騒ぐ。手に取ったのは谷川俊太郎の詩集だった。表紙を包んでいる透明なビニールカバーが白く曇り紙も相当に日焼けしているが私の愛読書だった本だ。「万有引力とはひき合う孤独の力である」(二十億光年の孤独)。かつてこの詩集の中で一番心に突き刺さったフレーズはこれだった。「引力」という言葉が瞬時に自分の「父」を連想させたからだ。

そういう記憶が蘇った直後だった。不意に一枚の写真が

私はそこから急ぎ足で旅立たねばならない、私自身のために。

「ねえ真咲さん。君には悪いことをしたと思っっているよ。できるなら理解をして欲しいとも考えている。まあ、ちょっと無理だろうね。けどね、あつちに僕の子孫がようやく授かったんだ。ぜひ産んでもらいたいと頼んである。当然君が悪いわけではないさ。悪いのはこつちだ。七十になつてまさかの奇跡が起きたのさ。君とはなぜか子供ができなかった。それなりにと言うと妙だけど僕も辛かったんだ。まっ、言いわけだな。そう言いわけさ。悪いのは僕だ。許しておくれ真咲さん。悪いのは僕のほうだ」

半月前、夫は突然そう告白して詫びの言葉をかさねた。

詩集のページの隅から膝へと滑り落ちてきた。何の音もどんな前触れもなく写真は姿を現した。写真も詩集と同じくセピア色に焼けていた。拾い上げてしばし眺める。写真に写っていたのはスナックの画像だった。緩やかな坂の脇に建っている一戸建ての二階家で、外壁がつい恥ずかしくなってしまうような派手なピンクと青色に塗られている。建物の前では数人の男が寄り添って笑顔を浮かべている。「スナックと父」――この二つの存在はまだ若かったころの私を引き寄せ続けた「惑星」であり、ある種強い磁力を帯びた「磁場」でもあった。

*

たしかに「孤独の力」ではあったかもしれないが別に父とは「引き合って」などいかなかった。引力は片方向のみだった。巨大な惑星が質量の小さな衛星の軌道を常に制約するようにより一方的に私を拘束して引き寄せ続けたのはあつちのほうだった。父のほうだった。

私の父は中堅の出版社で総合雑誌の編集長を長く務めていた。同時にかなり有名な左翼系の評論家でもあった社会社を退職した後は小さな出版社を自営する社主でもあった。こうした事情も手伝って、わが家には私や妹がまだ幼かったころから社会で広範な役割を担っている著名な人々が大勢出入りしていた。詩人や作家や左派の活動家や哲学

者や経済評論家などだ。私はこの過剰にアカデミックな家庭の臭いが厭で厭で堪らなかつた。

週末にはそういう人々（女性もかなり混じっていた）が集まってきたは長い長い飲み会がしばしば開かれていた。

「さあ、飲め、語れ。我らエリートが世の中を牽引する」と父はいつも上機嫌だったのだけれど、いったん会が始まると、母や私や妹は自分のやりたいことは一切できないくらいに多忙さに追われ通しだった。客人の好みに合わせた食事やつまみをせっせと居間に運び、ありとあらゆる種類の酒を供し、ときには彼ら酔っ払い連中から尻や太腿を触られたりした場面すらあった。

女性も女性で、日ごろテレビや雑誌などで真しやかな意見を言うくせに酔うと男どもにも必ずしなだれかかって、自らの性的魅力を臆面もなくひけらかす醜態振りだった（父はそれを見て見ぬ振りをした）。そんなわけで私はまだ子供だったにもかかわらず、大人のいい加減さを厭というほど見せつけられて、一時はすっかり人間不信に陥ってしまった。

父の表向きの顔は進歩人だったしフェミニストでもあったが、裏に隠し持った本当の顔は旧態依然とした保守主義者だった。それもそのはずで戦時中は皇国史観に貫かれている愛国青年だったのだ。そのくせ、戦後になって民主主義が流布するやいなや、その思想を一八〇度大転換させ

嫌いなものはない。

私にとってももう一つの惑星であり、磁場でもあったそのスナックは、吉祥寺のはずれにあった。店名は『エニシグ・ゴーズ』。常連客は略して『エニーズ』と呼んでいた。日本語に訳せば、何でもあり、だろうか。私はたまたま飲みに入ったのがきっかけで市ヶ谷にある大学の文学部に通うかたわらそこでアルバイトもしていた。店は私のアパートから歩いて五分ほどの近所にあった。店の佇まいや常連さんの顔が何人も浮かんでくる。たしか一九七五年の春先だったと思う。当時は「アンタ、あの娘のなんなのさ」とか「死刑！」とかの退廃的な言葉が流行語となったり離婚件数が史上最高を記録したりして、妻や女性の意識変革が大きく進んだ時代でもあった。

その春の直前まで私は横浜の本牧にあるライブハウスに勤めていた。けれども店長に、そろそろ大学に復学したほうがいい。このままだと必ずや中退になっちゃうぜ、と強く諭されて久々に東京に戻ったばかりだった。せっかくな入った大学を途中で投げ出すのはどうしても嫌だったのだ。しかしどうせ東京に舞い戻るなら実家とは遠くに離れた場所に住めば良かったのに、なぜかそうはできなかった。吉祥寺駅の郊外に住まいを決めてしまったからだ。私の実家は国立駅の南側にあった。吉祥寺とは同じ中央線の路線上

た。いわゆる「転向者」だったのだ。

私や妹の日々の暮らし向きは、あれはダメだ、これは止せ、それもいけない、と言われ続けるほどの窮屈なものだった。たとえば頭に少女漫画風のリボンをつんだり綺麗な洋服に身を包んだり脚を伸ばして座ることすら許されなかつた。父が強要するこの躰の趣旨は貧しい人民を虐げ、女らしさを失うことに通ずる不作法な行為だという、ある種の偏見がもたらしたものに過ぎなかつた。可愛い盛り娘がリボンをつけることがなぜ人民を虐げることになるのか。屁理屈にも程がある。

私は中学に上がったころからこうした拘束を強いる父に反抗と反発を繰り返すようになった。高校は不登校児となり、果ては声をかけてきた見知らぬ小父さんとホテルに駆け込んで小遣い銭稼ぎをするようにすらなっていた。別に自ら望んでそうしていたのではない。すべては父への当て擦りのつもりだった。娘の悪い噂が立てば言論界で活動する父にはおおいに痛手になるからだ（実際にそうだった）。そのように父に抗うことは当時の社会に抗うことだし父と戦うことはそのまま世界と戦うことだと信じていたのだ。

それでも大学にはどうにか受かった。私はそれを機に家を出した。ほどなく友だちのアパートに居候をして実家にはまったく寄りつかなくなってしまう。私は何が嫌いといって、父のように「二面性」を平気で保持する人間ほどだ。各駅停車に乗ったって、ほんの十五分もあれば往来ができてしまう近距離でもある。なぜそんな愚行を犯したのか、今でも不思議でならない。

『エニーズ』の店主はガクさんといった。ガクさんは三代で長い髪の毛が西洋の魔女みたいに尖った鼻先にまで被さり、この世は無情。生きるは一時の夢、が口癖の人だった。ガクさんを補佐して厨房を仕切っていたのは四十過ぎで色白で、たらこ唇のワキヤちゃん。ワキヤちゃんの口癖は、これだよ、これ、だった。これだよ、これ。俺はしょせんしがらない雇われ人。でも自ら愚痴るほどには自分を卑下していなかたように記憶している。

私はいつのころからかその店で『網走万が一』と仇名されるようになった。私がお気軽にだれとでも寝たから、私を取り巻く男たちへ、万が一にも妊娠させるなよ、との警告の意味合いがたぶんそこには込められていたのではなかつたか。『網走』と冠せられた理由はよく分からないけれど、当時の私の心がひどく冷えていて、最果ての凍てついた僻地を思わせたからだろう。その名も網走番外地だ。店の常連客の中で一番深く関わったのは十歳ほど年上であまり売れていないイラストレーターの唐橋さんと大学生の内田君だった。二人とは望まれるがまま何度もベッドを共にしたがより私に惚れていたのは内田君だった。周囲

の人からはウッチーと呼ばれていた。

ウッチーは私より二級上で神田にある私立大学の文学部の学生で自家用車を一台保有していた。今はすっかり姿を消したロータリーエンジン車だが、ガソリン代が大変だとしばしば嘆いていた。一リットルでたった四キロしか走らないんだよ、あーあ。多大に燃費の悪い車だったようだ。私は彼を「アッシー君」として重宝に使いまわしていた。たとえば、朝八時にアパートに迎えにきてね。まず市ヶ谷に連れていって。四時になったらもう一度大学にくるのよ。それから××公会堂に向かうの。歌番組の公開録画があるからよ。それが終わったら今度は『エニーズ』にいくの。飲みたければいくらでも飲んでいいよ。ただし自腹で。閉店後の送りはもう不要。なぞって唐橋さんとちよつとあれだから。いい？——そんな感じで使いまくったのだ。

ウッチーの自宅は上井草にあった。だから彼がなぜそんなに遠くにあるスナックに入り浸るようになったのかの事情はよく知らない。たぶんだれか友だちに連れられて『エニーズ』にくるようになったのだと思う。ウッチーは人並み外れて脚が長く顔立ちもなかなかハンサムだったのだけれど、自分の意志を容易に表に現せない気弱なところが目立っている青年だった。しかも惨めなくらいに痩せていて体には筋肉の欠片もついておらず、胸は肋骨が透けて見えていた。学校の保健室によくある、あの人体骨格の標本み

一階は新聞配達所。ひどく酔って明け方近くにアパートに帰りつくと、すでにもう従業員がチラシを新聞に挟み込む作業に精を出していて、どうしようもない罪悪感にたえず苛まれた。でもそういう醜態を人前にさらすのを私はずっと止められないでいた。

金にもいつも不自由していた。アルバイトで稼いだ金はほとんどすべて飲み代で消えていた。蟒蛇うらばみとさえ言われるほどの私は大酒飲みだった。おまけにだれもが呆れるほどの「酒乱」でもあった。酔うと必ずだれ彼なしに食ってかかったのだ。ただ父親名義の銀行カードを一枚所持していたからアパート代はどうか払えていた。入金されるのはせいぜい毎月三、四万円止まりだった。

唐橋さんというと、かなりのお洒落で服装もばりばりのトラッドで決めていた。相当の背高でマッチョで、面はA・ヒッチコックが撮った名作映画『サイコ』で主演したアンソニー・パーキンス似の色男であり、店の客の中で一番のモテ男でもあった。その名に恥じずセックスもそつなくこなしたが私好みの濃密さはなかった。なぜ男どもは揃いも揃ってこれほどまでにセックスが下手なのだろうか。男は女をまず喜ばせてこそ自らの満足感が得られると肝に銘じたほうが良い。もつとも夫もその種のタイプの男だったけれど。

ウッチーとはその後もたびたび寝た。性技にはさほどの

たいに。

しばしば店で顔を合わせるようになったころ、私が誘ってウッチーは私のアパートにきた。本当はセックスをしたくてのこのこついてきたのだと想像するがいつまで経っても私に触れようとはしなかった。それで私は焦れて自分のほうから服を脱ぎ、炬燵こたつの中に引きずり込んだ。ウッチーは驚いたようだったがすぐに私の体の上に覆い被さってきた。手を伸ばしてペニスを握ると私は自分の性器へと導いた。でも挿入したとたんに射精してしまい私をとてものがかりさせた。

ごめん、とだけ呟いてウッチーは私の部屋を眺めまわした。どうしてこんなにも何もないの？ ウッチーは呆れ顔で溜め息のような微かな息を洩らした。だつてさ、あたしいつまでここにいるか分からないじゃん。ここは仮住まい。鳴長明の方丈の庵。それにしてもなあ……。そういうような会話ががあった。そう、だれだつて不可解に思うはずだ。あまりにも部屋が殺伐とし過ぎていて。

私の部屋は二階にあり六畳一間に台所とシャワーのみの狭い浴室がついたひどく質素な造りだった。台所には冷蔵庫も食器棚もなく、わずかに食器洗い籠の中に箸や茶碗や皿が数枚載せてあるだけだった。居間も電気炬燵以外の家具は一切なく蒲団すら所持していなかった。洗濯は店の洗濯機をちよつかり借用していた。

進歩は見られなかったが体を合わせることに親密な心情はどうしてかなれた。ささくれだった私の心の鬚ひげはウッチーと一緒にいる間に限って癒しを得られた。それがきつとウッチーとの半年間に近い交際の根拠だったのだと思う。ちなみにそのころの大学は往時の狂乱振りが嘘のように鎮まって、逆に妙な退廃感に覆われていた。革命の意欲に燃えていた過激派学生は夕風の海のようにいつの間にか影を潜め、キャンパス内には諦めと白け気分と煤けた気配だけが漂っていた。まして校舎の陰に入ると悲惨な内ゲバによるリンチや殺戮ころころがまだ密かに続いていた。だからほんの門をくぐっただけでそうした諸々の病原菌が体中にまわりついて勉強への希望はたちまち損なわれてしまった。ウッチーが「エニーズ」で夜ごと飲んだくれていた背景にはそうした大学の惨状が多分に影響を与えていたはずだ。私も大学に対して同じような気分を常に抱いていたからウッチーの気持ちがよく理解できる。たとえば言いわけだと擲や擲ゆされたとしても。

*

四つ年上の夫と知り合ったのは三十代の後半に差しかったころだった。当時私はフリーのコピーライターを職業としていたし、夫のほうはある経済新聞社の社員記者をしていて、仕事を通じてすぐに親しくなった。私と父と

の確執はまだ続いており、私は相変わらず実家には断じて近寄りず都内のアパートで独り暮らしをしていたが、蟒蛇うづまへと言われた昔が嘘のように酒量はめっきり減り、酒乱癖もすっかり影を潜めて、それなりに落ちついた生活を送れていた。半年ほどの交際を経て、私たち二人はごく自然なかたちで入籍した。どちらも仕事が忙しく、すれ違いと言ってもいいような新婚生活ではあったものの夫婦の仲はおおむね良好だった。

結婚生活も五年が過ぎ、四十代に入ったころだった。母から電話があり、父が自ら社主を務めている小さな出版社の経営を私に引き継いで欲しいと望んでいると知らされた。どうやら体調をひどく崩し、社主の座を継続していくのが難儀になったようだった。私は夫と相談し、夫婦揃って会社の運営を任せてもらえるなら引き受けてもいいと条件をつけた。ただちに父は承諾した。しかしながら父が引退する際に子飼いの社員たちはみな辞めてしまった。それで私と夫は新たに面接をして社員を雇用し直した（たかが六人だが）。この措置は大正解だった。父の幻影にたえず覆われたまま会社にいるなんて考えるまでもなくぞつとずる。こうして私は社長に就任し、夫には副社長兼経済雑誌の編集長を任せた。だから印刷所へ出張校正に出かけて夫は徹夜をしたりする晩もまれにはあった。けれどもそれ以外には外泊をすることなど皆無だった。いったいどこでい

つ年下の彼女と逢い引きをしていたのだろうか。夫にはかなり自由が利く金銭を私は与えていた。それをどう使おうが文句を言うつもりはない。だがいざ「跡取り作り」に費やされたと知ると妙な気分が陥る。

私はずっと反発をかきねていた父の設立した会社など引き継げるわけがないと蹴飛ばす選択肢は当然あった。それなのに私は引き受けた。そこには父の時代よりもずっと繁盛させて、ほら見たことか」と見下してやりたいとの下心があったのは間違いない。実際に父の時代には端から売れないに決まっている地味で退屈な文芸本や詩集ばかりを出版していたが私の代になって路線を経済関連の本やノウハウ物関係の書籍へと変更した。お蔭で売り上げは飛躍的に増大した。ちなみに反目を続ける娘に、父がなぜ会社を譲ろうと思ったのかについては未だによく分からない。

私の会社は神楽坂の坂上を早稲田方面にちよつと下った路地裏にあり、純和風の落ちついた佇まいの一軒家だ（自宅もそこから五分歩いた公園脇にある）。むろん築年数が相当に経っているせいで社屋の外観はかなり古惚けていてお世辞にも綺麗ではない。

私はそこで日がな一日夫と顔をつき合わせて仕事をしてきた。夫との仕事自体は楽しかった。その夫の胸中に、ある日私の知らない女の影が忍び込み、やがて支配的になっていった。浮気をする男は伴侶を欺いてまで我欲を優先させつたり僕の女はすでに亡くなっている。僕は不憫ふくみんでならない。済まないが遺産の半分をその子に上げたい。残りを君たちで分けてくれ」

父親の告白は夫の家族にとつて寝耳に水の話だった。母親はこの不意の話を断固拒否した。私の夫も拒絶した。父親はひどく落胆し三か月後に亡くなった。すぐに弁護士がやってきて父親の遺志がしたためられた遺言書を開封した。そこには隠し子の姉が父親の会社の経営権を相続する旨が書かれていたしすでに社長に任命されていた。そうした書類は会社の規約に必要な要件をすべて満たしているが家族には反論する余地がなかった。腹違いはかなり以前から洋菓子店でパティシエの重鎮として働いていた。しかも評価も高かったらしい。すべては夫の父親が家族に内密で用意周到に着々と進めていた謀計だったわけだ。

「そりゃあ茫然としたさ。あまりの事態に」と夫は私の指を舐めながら溜め息交じりに語っている。「結局金銭や有価証券や貴金属の類いは僕ら家族の所有となったが、肝心の店舗関連はその腹違いに渡っちまった。忌々しい思い出で今でも頭に血が上るよ。腹違いが経営を委ねられた洋菓子店はその後さらなる飛躍を遂げた。君も知っている有名店だが僕はその名を言いたくない。口が裂けても」

夫の話を強い共感シンパシーを抱いて聞いていた。父親なんてどこでもおおよそ身勝手なものだ。あえて言うが私はその腹違い

せるのだからなかなかしたたかだ。実際に私は夫のそんな顔を想像すらしたことがなかった。うかつにも。私は若いころ、同時進行的に多くの男と寝てきた。でも済まないとか悪いなとかと詫びる気持ちになったことはなかった。だって男とのつき合いは、夫のように極秘裏におこなわれたのではなく公然と成されたのであって、浮気をしたつもりもないし相手を欺いていたわけでもないからだ。まあだけど、そんな私だからこそ自らの過去に今ごろになって自らが復讐ふくみんされているとも言えるかもしれない。

片づけ作業に疲れて縁側で煙草を吹かす。そうそう、この縁側で夫を膝枕しながら耳掻きをしてあげた日がときどきあった。夫は私にそうされながら自分の父親との確執をしばしば語っていた。夫の父親は二十店舗を越える洋菓子屋を経営するやり手のパティシエだった。夫はその父親と母親と妹との四人でごく普通に暮らしていた。

夫の父親は五十歳を過ぎたころに胃癌を患って入院した。「生前贈与について相談がある」。父親は病院のベッドの上で息子（私の夫）を始め家族にそう話を切り出した。「実は僕には隠し子がいる。その子は娘で母さんと一緒になる前にとある女が産んだ子だ。その子に僕の財産をたくさん分けてやりたいと考えている。僕がほつたらかしにしたいせいで貧しく碌ろくな教育も受けずに育ったからだ。母親、

に対して何の感情も持つてはいない。あくまで女同士としては上手くやったと褒めてやりたいくらいだ。

そうした家族の対立を夫は嫌というほど思い知らされた。だのに夫は高齢になって自ら隠し子をこしらえ妻の私とも別れようとしている。人とは経験から学ばない存在だろう。

一服し終えると『エニーズ』の写真を手帳に挟み、夫用のクローゼットを開けて衣類の整理に移ろうとした。引越し作業を自分一人で行うのは馬鹿げているし重労働でもあるが今さら夫の手を借りようとは考えていない。引越しは自らの明日のために必要な行為だからだ。クローゼットの中は一部がぼつかりと抜け落ちていた。夫が自らの衣服を持ち出してしまったようだ。ついこの前まで服で満ち溢れていたその空間はひどく余所余所しいものとして私の目に映った。別に幸福の象徴と呼べるような代物ではないけれど、少なくとも衣服は平穩な日常を担保してくれる優しい存在ではあった。夫のなで肩のかたちそのままにハンガーにぶら下がっているカーデイガンが私はけっこう好きだった。情けなくも。

寝室にもいってみた。二人が眠っていた寝具はそのままだし枕も枕カバーも以前とまったく同じ具合だった。ふと気がかりを覚えてベッドの下の抽斗ひきだを開けた。見事に夫のバジヤマだけが消えていた。夫の浮気を知った私が気晴らし

き、ジンをグラスに注いで飲み干した。それで幾分か心が落ちついた。それから手帳を開き、もう一度、『エニーズ』の写真に視線を落とした。

*

これだよ、これ、とワキヤちゃんが長嘆した。その春の晩私はいつにも増してひどく酩酊めいじやうしていた。グリーンラベルのジンをすでに一本空けていたのだった。どうしてお前はそんなに節操がないの？ とワキヤちゃんは続けた。彼もかなり酔っていた。私とワキヤちゃんが座っているカウンター席の横側にはウッチーと唐橋さんもいた（以下の会話はその後ウッチーから聞いた話で私の記憶に残っているものではない）。悪いかつ、と私はもつれた舌で反抗した。寝たいってみんなが言い寄ってくるから寝てやってるだけだ。男なんかみんなさうだろ。本音ではやりたいんだろ。まあまあその辺で、とカウンターのなかからガクさんが仲裁に入った。すでに閉店後で店内に残っているのは五人だけだった。室内には煙草の煙が充満している。

そうだよ、やりたいですよ、真咲君、とワキヤちゃんは右手を振った。それから唐橋さんとウッチーを指差して、嫌じゃないのあんたたち、真咲はあんたともあんたとも平気で寝るんだぜ。昨日はあんた今日はお前。明日は……嫌だなあ耐えられないよな僕には。唐橋さんは無表情でウツ

しに二泊三日で出かけた温泉旅行の合間に、必要と思われるものを大急ぎであちらの家へと運び出したらしかった。

この家は夫婦二人で購入した物件だから後日弁護士を通じてどう分け合うのか取り決めなければいけない。だがあのバジヤマは私が個人的に夫に買ってあげたものだ。そんな昔の匂いや夫婦の記憶がしみ込んだものを夫は妊娠させた女の家で平気で着ようとしているわけだ。家の中を歩きまわっているうちにどんどん気が高ぶっていった。

台所にいきシンの下の扉を何気に開いた。ほどなく膝が緩んですとんと尻餅をついた。料理好きだった夫が日々愛用していた古い鉄製のフライパンだけが消え去っていたからだった。夫はこれを使ってサーロインステーキやミラノ風カツレツを焼きスクランブルエッグを作りフレンチトーストを嬉しそうにこしらえてくれた。中性洗剤で洗うと鉄の質が悪くなると心配して湯だけを使い手入れにも余念がなかった。夫は調理器具の中でそのフライパンだけを新たな家庭へと持ち去ったのだ。

「冗談じゃない！ だったら全部持って行ってよ。好きも嫌いも洗いざらいすべて持ち去ってよ。それが元妻への礼儀よ」。苛立ちで体が強張り頬を涙が伝った。言いようのない悔しさが一気に込み上げてきた。「私らしくもない、ドジ！」と鍋を床に叩きつけた。

それでもややあって「とにかく気を静めなくちゃ」と呟ちーは心配げだった。困らしてやりたいからさ、あたしが公衆便所のマリアになるのは。困らせるってだれを？ だからあいつだよあいつ。あたしの父親。あの人非人、独善者。私はそうほざいてワキヤちゃんから日本酒の徳利をひたたくって酒を煽あおった。親父を困らせるのと男ならだれとでも寝るといったどういう関連があるわけ？ 矛盾し過ぎ。ワキヤちゃんがさらに言いつのつた。知らねえよ分かんねえよ知るかよ。そう叫んで私はカウンターに突っ伏した。

自傷行為というんですよと唐橋さんが抑揚のない声で呟いた。自傷行為ってね、相手が強大過ぎるときにまきこるんです。勝てないと真底自覚するからなおさら自分を虐めるんです。自己救済のために。一種の敗北宣言でもあるんです……。

ウッチーは酔い潰れた私を抱きかかえて店の外に連れ出した。背後でガクさんが、生きるは一時の夢。好き勝手にやれよ、エニシング・ゴーズと叫ぶ声が聞こえた。しばらくもつれた足でふらふらと歩きアパートの階段を登った。階下の新聞店には煌々こうたうと明かりが燈り、従業員が呆れ顔で私たち二人を見やっていた。労働者諸君！ 空はとつくに白みかけている。部屋に入ると台所の蛇口を開いて頭に水をぶっつけた。振り向きざまにウッチーを浴びせ倒してズボンを剥ぎ取りベニスにしゃぶりついた。たちまち亀頭が

唾液で濡れて光った。不意に喉がウツとなって酒と食べ物
を激しく嘔吐したが、構わず馬乗りになって性交した（こ
の辺りから後の行為はだいたい記憶に残っている）。

快感なんか一切なかったけれど上下動を繰り返した。
ウッチーはなぜかいつもとは違つてすぐには果てず自らも
腰を浮かせてペニスをより深く挿入させた。一度射精する
と今度は私の体へのしかりバックから強引に突き立て
た。二人の服は茶色の吐瀉物にまみれて、まるで駅の便所
みたいな惨状になっていたが性交は止めなかった。酸っぱ
い臭いが部屋に充滿し私の頭の中を父親のしたり顔がク
ローズアップになったり遠のいたりした。重厚な父親のあ
の声が部屋中に響いた。

——いいですか真咲君。真摯に生きなさい。世の中のため
に尽くしなさい。弱者を救済しなさい。決して奢るなかれ。
贅を求めぬな。民衆の力を信じる。非暴力革命を起こせ。
政治を疑え。書を読み。詩歌を口ずさめ。言葉を磨け。自
らの感性を信ぜよ。流行を追うな。化粧をするな。華美を
慎め。自立せよ。男の下部になるな。先達に学べ。死者の
声に耳を澄ませ。故人の苦しみを思え。物事の現象に囚わ
れるな。本質を見抜け。家族を愛せ。妹の善き手本となれ。
父母を慈しめ。そうすべきです、あなたは——。はち切れ
んばかりに膨張した父親の声がぐるぐると旋回し頭の中を
乱反射してさらに音量を上げていった。

*

引つ越し作業が終盤に差ししかかったころ、夫の代理人と
名乗る男がわが家を訪れた。代理人は夫が所望するリスト
を書きつけた紙片を携えていた。まだ欲しいものや必要な
ものがあるのか？ 代理人は私が夫の蔵書分として整理し
ておいた書物の山を崩して数十冊の本を手にした。それか
ら時計や母親の位牌などを探し出してはいちいちリストと
照合した。そしてそれらを段ボール箱に詰め終え「以上で
す。残りの物はそちらでどうでもご処分ください。荷物
は後ほど業者が引き取りにまいります」と言い残して帰ろ
うとした。「写真とかはよろしくて？」と私が問いかける
と代理人はもう一度リストを確認してから首を小さく振つ
てドアを閉めた。

「写真」と呟いてからしばしの間笑い転げた。自分が発し
た言葉が可笑しくて可笑しくて仕方なかった。二人でかつ
て出かけた観光地や温泉場やテーマパークで撮った写真に
今さら意味などないと思つたからだ。それらは私たち
夫婦の仲が継続していてこそ初めて意味を成すのであつ
て、こうして関係性が崩れ去った今では家と同じく無用の
長物に過ぎない。「エニーズ」の写真を取り出してまたじつ
と見つめた。ならばこの写真にはどういう意味や価値があ
るのだろうか。これもまたすでに関係性を失った過去の遺
物のはずだ。

この偽善者！ 私は強く髪を振り乱しそれに抗い続ける
かのように腰を振つてウッチーを求めた。ウッチーがこぼ
した涙が背中への窪みに続々と堪り冷感が体の奥へとしみ
入つていった。春なのに涙の粒はひどく冷たかった。はっ
きりとした記憶が蘇つたとき、私たちは虚脱して裸のまま
で天井を見ていた。指に挟んだ煙草の煙が揺らめいてい
た。二人の体は精液と体液と汚物がこびりついていつそ
う嫌な臭いを放つていた。ウッチーは何一つ語ろうとしな
かった。ただひたすら夢遊病者のように何かに対して頷き
続けていた。あたし錯乱してたの。何か喋つた？ かすれ
る声でそう聞いた。お父さん……とだけウッチーは答える
と立ち上がって浴室に入つていった。

私は目を閉じた。できるだけ深く眠りたいと願つた。こ
のまま死にたいと思つた。私はこの浴室で何度か手首を
切つて自殺を試みている。だがひどく酔つていたしカミソ
リが錆びつき過ぎていて上手くいかなかった（下ジ）。
ただ一度だけ成功しかけた晩があつたが運が悪いことに
ウッチーに見つかつて不成功に終わった。私にはそのよう
に死にたくて死にたくてならない時期があつた。きっと死
に魅入られていたのだと思う。

この店が今でも同じ場所にあるとはとうてい思えなかつ
た。私の実家ですらもう時間貸しの駐車場へと様変わりし
ている時代なのだ。ポケットベルは消滅しガラケーも数年
後には消え去る運命にある。ガクさんもワキヤちゃんも年
齢から考えるに亡くなっているかもしれない。ま
あ唐橋さんはまだ確実に生き延びているが。なぜなら彼が
描いたイラストを何かの雑誌でつい最近見かけたからだ。
あの年でけつこう頑張っているよな。偉いぞ。老いてなお
こうあつて欲しいものだ。

内田君はというと、今でも私の体のどこかに存在感を残
している。でも関係性が途絶えたままになっているから、
彼もまた過去の人と言つたほうがより適切かもしれない。
写真に見入るに連れ、内田君や唐橋さんとのつき合ひの中
で、最も強く記憶に焼きついて離れないでいたあの思い出
が鮮やかに結像した。

*

あれはゴールデンウィークの終わりで、私のアパートを
妹が突然訪ねてきた日のことだった（たまたまウッチーも
きていた）。しばらく会わなかつたうちに妹はぐつと大人
びていた。もう高校二年生だそう。妹の話は私は珍しく
素直に聞いた。会わせたい人がいるから父が呼んでいると
のことだった。お姉ちゃんはさ、もうずっと家に帰つてな

いよね。でも大学の授業料やアパート代の一部はお父さんからちゃんと振り込まれているよね。お姉ちゃんは少ないって文句を言うだろうけど、これって支援には違いないよね。お父さんを毛嫌いしているのは分かるけど、一度くらいは顔を見せたほうがいいよ。親子なんだから最低限度の義理は必要だよ。義理を欠くのはお姉ちゃんだって好まないよね。たった一晩よ、我慢できるでしょ。ウッチーがそうだと強く頼いた。分かった、じゃあ一回だけだよ。私も頼いた。会わせたい人？ どうせ碌なやつじゃないだろう。

妹は安堵したのか急に笑顔になった。内田さんってタイプだなあ。妹はウッチーを見つめてとんでもないことを言い出した。ねえ、お姉ちゃんみたいな精神異常者と別れてあたしとつき合わない？ あたし処女なの。お初は嫌？ ウッチーは頭を掻き、姉さんの体が良過ぎて今のところ別れられないんだ、ゴメンよと笑った。体か、たしかにお姉ちゃんはポイン。あたしはベチャパイ。お姉ちゃんと別れたら電話してよ。待つてるからね。こいつもほどなく淫乱になりそうだなと心配になった。血は争えないのだ。

父が指定したその宵、私はウッチーに頼んで車で自宅まで送ってもらった。玄関前に車を横づけすると、じゃあ、とウッチーは手を挙げた。くれぐれも穏便にね。私はウッチーはきちんと自己紹介をした。偉い。臆するな。父は、要するに金魚の糞かねと鼻を鳴らした。ウッチーは無反応で座卓の隅っこに正座した。私も隣に腰を下ろした。わざと思いきり脚を伸ばしてやった。

室内は照明が落ちサイドランプが数個燈っているだけで薄暗かった。これが不肖の娘ですよと父は髪の毛を手櫛しながら二人の客に私を紹介した。若者特有の無意味な反抗を繰り返して家族を悩ませています。まあ世間様に対して無自覚な輩よりはまだマシですが。金さんと蔡さんが同時に、どこの国も変わりませぬねと両手を広げた。私はマッコリの瓶を自分で掴むと二つのグラスに注いだ。それから一気飲みしてさらに注ぎ足した。金さんと蔡さんはほおくと息を洩らした。あんたも遠慮するなと私はウッチーを促した。ウッチーは後見人が酔っては拙いと考えているのかグラスにわずかに口をつけただけだった。

父は一升瓶から清酒をグラスに注ぎ入れ無言のまま静かに飲み続けた。ときおりグラスを置いて点鼻薬を鼻の奥に差し込み、ひーひーと薬液を吸い込んだ。慢性的鼻炎なのだ。ベトナム戦争がようやく終結しましたねと蔡さんがぼつりと呟き、金さんが深く同意した。どうか詩をご披露願いたいと父は金さんの目を見た。金さんは小刻みに顎を動かすとまだ推敲がゆき届いておりませんがと言いながら背広の内ポケットから紙片を取り出して立ち上がった。父は

チーをにらみつけて手を強く引つ張った。ウッチーはまあ仕方ないかと諦め顔になって私についてきた。家の中に入ってみると母も妹も不在だった。昔ならこういう晩は必ず父に待らせられたものだが遁走したようだった。無理もない。だれだって父とべつたりつき合うのは辛い。父は三十畳ほどもある広い居間の一番奥の指定席に陣取っていた。休日だというのにわざわざネクタイを締めベストすら着ている。何様のつもりだ。

鼈べつこ甲縁のまん丸い眼鏡越しにウッチーを見やると父はあからさまに厭な顔つきになった。頬が昔よりずいぶん削げている。顎を小さく振って早く座れと指図する。その瞬間、眼鏡のレンズが灯りに反射して鋭く光った。私は反射的に鳥肌を立てた。父と対峙するといつもそうやってしまった。居間の真ん中に据えられた大きな座卓の上には総菜が山のように並べられていた。ワインや日本酒に混じって紹興酒やマッコリの瓶も用意されている。

招かれた客は二人の外国人だった。父はいつもと違うメンパーだと自慢したいのだなと思った。こちらが、と父が低い声で言った。金秀波きんしゅうはさん。韓国の高名な詩人だ。そしてこちらは蔡和道さいわどうさん。中国の気鋭の歴史学者だ。二人は笑みを浮かべて私たち二人に頭を下げた。で、君は？ 父が蔑んだような視線でウッチーを見た。余分な人間を連れてきやがって。そういう気分が瞬時に伝わってきた。ウッチー

金歯を光らせて、よろしくと大きく頼いた。

自作の詩を読み終わると、金さんはどーも、と照れ臭そうに頭を下げて座った。父が両手を擦り合わせるような小さな拍手をした。蔡さんは無表情のまま、日本政府は中国共産党の今後の動向をもっと注視すべきですと言った。その提言にうんと首を折ってから父は立ち上がりステレオのターンテーブルの上にLPレコードを載せて針を落とした。ほどなく越路吹雪の哀切な歌声がさまよい流れる霧のように部屋の中に重く立ち込めていった。

……人生は過ぎゆく 恋も去りゆく

ラ・ヴィ・サン・ヴァー ラ・ヴィ・サン・ヴァー
好きなのにどうして？……

私は当時この歌を聴くとひどく心が乱れた。あんなに寂しくて切ない歌を私は知らない。

ラ・ヴィ・サンバー——人生は過ぎゆく。人生はこんなもの。好きなのにどうして……。

徴兵されて一度戦場にいくといい。父がだれに諭すでもなく言葉まことを小さく放った。ウッチーはその呟きに顔を上げた。睫毛まゆげが微かに震えている。父はさらに呟き続けた。戦場ほど正直な場所はない。そこには悲惨さだけではなく希望さえ存在しうる（その喉仏が軋みのような音を立てた。

金さんも蔡さんもうつむいたまま顔を上げなかった。人はそこにいたってようやく己が何者であるかを知るのですよ。戦争を知らない人はまだ人とは呼べません。ほんの赤ん坊、ひよっこですよ。分かりますか、あなた方に。

昔とおんなじじゃないか。私はウッチーを促すと立ち上がり手を握り締めてそのまま歩き出した。それでいいのですか？ 父が問いかける声が背中を差した。展望はあるのですか？ 辿りつこうとする場所の用途はついているのですか？ あなたは私に説明するべきではないですか。それに値するだけのことを私はあなたに施してきました。違いますか？

ウッチーが一瞬立ち止まったけれど私は手を強く引いてさらにぐんぐん歩いていった。

海が見たいの。私はウッチーにそう伝えた。ウッチーは黙って首を折ると車のエンジンキーをまわして静かにアクセルペダルを踏み込んだ。お酒があるぞ。バッグからウォッカの瓶を取り出していきなりラッパ飲みした。ウッチーに目配せすると彼もまた瓶を鷲掴んでラッパ飲みした。喉が焼け胃壁が瞬時に溶けそうだった。盗んできた、あいつのけったくそ悪い家から。一本じゃない、二本だよ。それから喉が裂けそうになるくらい思いきり高笑いした。目指せ、横浜・本牧埠頭。帳が下りた高速道路はオレンジ色の

て車は瞬時に横転した。視界がジェットコースターのよう目まぐるしく回転し車体が潰れボンネットが剥がれ落ちた。何かの巨大な痛みが全身を襲ったが覚えているのはそこまです。こまです。

私たちは救急車で病院に担ぎ込まれた。私は全身に何か所かの擦傷を負っただけのごく軽傷で済んだがウッチーは腕の骨と肋骨を数本も折る全治三ヶ月の重傷だった。病院には五日いて六日目の朝に私は退院を許された。ウッチーが包帯まみれの姿で眠っているベッドに忍びよりそのおでこにキスをすると公衆電話を使って唐橋さんを有楽町のとある喫茶店に呼び出した。以前デートをしたときに入った店だと伝えると唐橋さんはすぐに思い出したようだった。実は唐橋さんにしかお願いできない重大な要件を抱えているのだった。

喫茶店に入ってきた唐橋さんは私を見るなり目を丸くした。私が体のあちこちに絆創膏を貼りつけ包帯を巻いていたからだ。事故を起こしたことを伝えると命あつての物種と肩で息をつきウッチーが入院している病院名をメモした。

俺も見舞いに行くよ。ぜひそうしてやってよ。ところで要件って何？ どうやらできちゃったようなの。それってもしかしてあれかい？ うん、そう。そのあれ。時期的に

ライトに包まれその灯りがフロントガラスに映り込んで弾丸のように後方へと飛んでいった。展望があるのですか？ それに値するだけのことを私はあなたに施してきました——冗談じゃない。言わせておけば調子に乗りやがって。そうだろう、ウチダ？

飲み終えた瓶を窓から路肩の芝生に向かつて放り投げ奇声を発した。そのとおりだ、とウッチーも叫んだ。ハンドルがぐらぐら大きく揺れている。車が左右に蛇行しそのたびにタイヤが悲鳴のような摩擦音を上げる。相当に酔っぱらったみたいだった。人生は過ぎゆく。ラ・ヴィ・サン・ヴァー！ ラ・ヴィ・サン・ヴァー！ 歌えば歌うほどその歌の哀切感ばかりが増大していった。ヴァー！ ヴァー！ ヴァー！ 本牧埠頭についたのは午前零時過ぎだった。ねえあれをやつてとウッチーに頼んだ。あれって？ あれだよ、アメリカン・グラフィティ。ほら、レースをやるじゃん。あれか、よし。一台しかないからゼロヨン加速だ！ ウッチーはそう叫ぶとアクセルを吹かした。ペダルを踏み込むごとに車体が揺れた。GO！ サイドブレーキが外され一気に車は加速した。タイヤが路面を激しく擦りゴムの焼けただれる異臭が車内にも漂ってきた。岸壁が見る見るうちに迫ってくる。その向こうは海だ。そのまた先は自由な大海原だ。

強烈なGがかかって体が後方にぐんと押さえつけられた。そのつぎの瞬間だった。ウッチーがハンドルを取られ見てあなたしか考えられないの。ゴメン、ドジを踏んじやつて。そういうことか。「網走万が一」か。そう言い愉快そうに笑った。もちろん産むつもりはないよ、安心して。でもさ墮ろさなきやいけないの。分かった、全部俺に任せろ。病院には当てがある。金の心配も一切いらぬ。大船に乗った気である。唐橋さんは始終笑顔でしかも何か自信たっぷりなような口調で語ってくれた。

手術が終わったらさ、もう一度しようよ、お礼代わりに。前のほうは無理だと思っけど後ろのほうはきつと大丈夫だと思っけよ。後ろねえ。不眠？ いや、そうじゃない。後ろの穴はね、出すところで入れるところじゃない。そう考えているんだ、俺。上手いこと言うね、肛門は出すところであつて入れるところじゃないか。私は久しぶりに快活な声で大笑いした。そしてうるうるしてばーばーと涙をたくさん流した。

それよりね、お前に提言があるんだよと唐橋さんは話し出した。銀座の外れにK宣伝研究所って会社がある。そこでコピーライターを養成する講座をやっている。この四月から基礎講座は始まっているけど俺故あつて顔が利く。お前さえ良ければそこに通って勉強してみないか？ どうにかねじ込んでやるよ。任せておけ。老婆心ながらお前は何か手に職をつけたほうがいいって思っている。この講座は夜間だから大学にもちゃんといける。もちろん費用は俺が

全額負担する。どう？ まさかそんなそんな。遠慮するなよ。だって俺は事情ならお前の子供の父親になるところだったんだよ。そうだろう。そのくらいはしなくちゃ罰が当たるよ。それに俺ちよつと金持ちになるんだ。実は俺の描いた絵がレコードアルバムとポスターに採用されてそれが何とミリオンスラーになったんだよ。偶然ながら印税契約をしていたからかなりの大金が転がり込む。そういう寸法。好きだよ真咲。

私はまたうるうるきて、ぼーぼーと涙を流し続けた。おめでとうおめでとう。一躍有名人だね。周囲の客が啞然としてこちらを見つめているのが涙でにじんだ映像となって網膜に映り込んでいた。結局、墮胎の件も講座の件もすべて唐橋さんに委ねることにした。私につき添って病院にもいつてくれるそうだが、お腹の子の父親として。私は有楽町のガード下を潜り抜けながらまたぼーぼーと涙をこぼして歩いた。

どうしてこんなふうみんなは私に良くしてくれるのだろうか？ なぜこんな性悪で無軌道な女に善意で接してくれるのだろうか？

妊娠したのは事実だった。けれどもその相手が唐橋さんだというのは実は真つ赤な嘘だった。お腹の中に入っていた赤ん坊の父親は間違いなく内田君だった。その旨を伝え

ために渡仏したんだよ。俺は病院に見舞いにいったのが縁で以前より彼と親しくなった。それで知ってるわけさ――。

*

夫と暮らした家に鍵をかけると家の全貌をあらためて見やった。何だか履き潰した後の惨めな靴のように思えてならなかった。そろそろ履き替えるべき時期だ。私はそう確信すると苦笑いをして社屋に向かって大股で歩き出した。

妻の座は降りても社長は辞められない。私はもうじゅうぶんに自らの過去にしつべ返しを食らったのではないか？

それともまだ足りないのか？ アゲインストの強い風が吹いてきて髪が舞い上がる。バッグからあの古惚けた写真を取り出し細かく破いて掌の上に載せ風の吹くままに任せた。

内田君が未だにバリにいたのか日本に戻ったのかあるいは希望どおりにコックになれたのかなれなかったのか、私は知らない。だが一つだけたしかなことがある。それも大恩人の唐橋さんから聞いた話だが、内田君がバリに修行にいくという、そんな重大な決意にいたった大きなきつかけがああ晩にあったのだということ。「展望はあるのですか？」。父が放つたその一言が実は内田君の心を大きく揺るがしたそうだが。だとすれば父も少しは人様のために役に立ったことになる。

その父はすでに他界しているが、臨終の床で私の手を弱

れば内田君は必ず善処してくれる――そう確信してはいたがああ事故の原因を作ったのは私だった。この私だった。ひどい負担を強いたのに、さらに妊娠した、子供を墮ろしたいとはすぐに言い出せなかった。

それに病院に一人だけでいくのも気が重かった。心細くてならなかった。だれかにつき添って欲しかった。もちろん費用を負担してもらおうつもりなど毛頭なかった。それで仕方なく唐橋さんを頼ったのだった。まして将来のために養成講座に通うなんて望外だった。それなのに唐橋さんは全面的に私を助けると言ってくれた（私が唐橋さんに嘘をついたことを彼が悟っていたかどうかは不明だ）。

実は内田君にはおいおいすべて打ち明ける気であった。それで容体が落ちつくのを待ち続けた。ところが内田君は事故から二カ月後に忽然と病院から姿を消してしまつたのだった。何の伝言もなかった。内田君の自宅が上井草にあるのは承知していた。でも住所も電話番号も世帯主の名前も知らなかった。それでそのままになってしまった。今思えば私はあまりにも無責任過ぎた。病院や警察に当たれば住所くらいは判明しただろうに。

養成講座に通い出してから半年ぐらい経つたころだったろうか。内田君の消息らしき手がかりを得た。情報を与えてくれたのは唐橋さんだった。内田ならバリに旅立つたよと唐橋さんは話してくれた。大学を中退してコックになる弱しく握つてこう言った。「そろそろ解放してもらえないだろうか。正直、疲れ果てた。私はあなたから自由になりたい」。それはこつちの台詞だと思つたが私はあえて黙っていた。ちなみに葬儀には母に請われて参列した。棺の中に収められた父の亡き骸を垣間見たとき、ある不可思議な安堵感に包まれて心と体がふつと楽になったのを未だに鮮明に覚えている。きつと「強い引力」からやつと解き放たれて宇宙空間を飛翔する小惑星に私がなれたからだろう。

父が私に遺したのは実のところその言葉だけではなかった。相当に多額の借金があったのだ。会社を引き継ぐときにある程度は把握していたが、それだけには留まらなかつた。自宅は抵当に入り取引先や銀行からの借り入れが続々と私の知るところとなった。私はせつせと働いてそれらを一つ一つ清算していった。けれどもまだ完済できていない債務が少しある。それに父はなぜか私の夫を嫌い続けてもいた。「あの男はいつかきつとお前を不幸にする」。今にして思えばその予感正しかったわけだ。

私にはまだたぶん二十年くらいの余生があるだろう。これまでとは違う道がそこには敷かれていよう。年若いならもう失うものしかないとは言いたくない。心が空っぽけさえしなければもつと先に進んでいけるはずだ。

人生は『エニシング・ゴーズ』。その気にさえなればまだ何とでもなるのだ。願わくは内田君も唐橋さんもそうあつてくれんことを。奔放過ぎた私と関わったことで何かを学び取っていてくれんことを。

私が辿りつこうとするその場所の目途は——そう、父がかつて私に問いかけたようにまだついてはいない。私は本当にあの父から自由になれたのだろうか。

※挿入歌

『人生は過ぎゆく』

訳詞／岩谷時子 作曲／ジヨエル・ホルムス

唄／越路吹雪

※註1 『港のヨーク・ヨコハマ・ヨコスカ』の

中の台詞。

作詞／阿木耀子 作曲／宇崎竜童 唄／ダウン

タウンブギウギバンド

※註2 山上たつひこ作の漫画『がきデカ』で

初の少年警官となった「こまわり君」がしばし

ば発した決め台詞。「週刊少年チャンピオン」

連載。

あなたも 文藝家協会に入りませんか！

公益社団法人日本文藝家協会は創立90年を超える文学者団体です。著作権の保護、法律や税務に関する相談、健康保険、文学者の墓、『文藝年鑑』の編集などの活動を続けています。『文藝年鑑』に名前も記載されます。年に一度の総会で、作家の懇親会も催されます。

入会資格は「文芸的著述を主な活動としている」文学者です。プロの作家だけでなく同人誌で活躍されている方にも資格があります。理事などの推薦が必要ですが、活動を証明する同人誌のバックナンバーなどがあれば事務局で紹介します。

会費などの詳細については事務局にお問い合わせください。

公益社団法人 日本文藝家協会

〒102-8559

東京都千代田区紀尾井町 文藝春秋ビル新館5F

☎03-3265-9657 bungei@bungeika.or.jp

http://www.bungeika.or.jp/



室町 眞

むろまち しん

群馬県高崎市生まれ
法政大学文学部・日本文学科卒業
版下業、海外旅行企画者、通信制美術学校のコンサルタントなどを歴任
2010 長塚節文学賞優秀賞
12 銀華文学賞優秀賞
13 銀華文学賞河林満賞
14 長塚節文学賞優秀賞
19 藤本義一文学賞優秀賞
20 銀華文学賞優秀賞 ほか

銀華文学賞 優秀賞 受賞の言葉 室町 眞

今回の受賞作は一九七〇年代の半ば頃が主な舞台となっている。この時代に生きていた若者に特有の「熟っぽさの名残や退廃」を描出したかと思つて書いたのだが、単なる「昔話」にだけはしたくなかった。それでこういうスイッチバックの構成となった。いずれにせよ、あれからそろそろ半世紀が経つし、書き手の側もすでに忘れ去つてしまつた過去でもあるだろう。だが、現代を照射し直すには格好の時代という側面があると考へている。

末尾ながら、拙作を推してくださいました審査員の方々に心から感謝申し上げます。